



三里もすゑす不二いまだ見ず  
 鹿をおふ弓咲花に分入て  
 春を愁る小の晦日  
 陽炎に坐す縁低く狭かりき  
 砥水きよむる五郎入道  
 悴もたば上戸も譲るかごなり  
 雲ちりく風に風かをる藪  
 伊豫すだれ湯桁の数はいさしらず  
 入院見舞の長に酌とる  
 一陽を襲正月はやり來て  
 汝櫻よかへり咲すや  
 染殿のあるじ朝日を拜む哉  
 しのぶのみだれ寤もゝたび  
 うき世とはうき川竹をはづかしめ  
 名をあふ坂をこしてあらはす  
 後の月家に入る厨出る兒  
 わけてさびしき五器の焼米  
 みの虫の狂詩つくれと鳴ならむ  
 忠に死たる塚にイむ

齋堂風蕉雪角丸齋堂風蕉雪角丸齋堂風蕉雪

初雪の石凸凹にく  
 小女郎小まんが大根曳ころ  
 血をそぐ起請もふけば瀾り  
 見よもの好の門は西むき  
 御あかしの夜をさゝがにの影消て  
 汗深かりし憤る夢  
 はらからの旅等閑に言葉なく  
 ふることささる小夜の中山  
 枝花をそむくる月の有明て  
 ふらこつらん何がしが軒  
 衍して修理する舟の春となり  
 立初る虹の岩をいろどる  
 きれたこに乳人が魂は空に飛  
 麻布の寢覺ほとゝぎすなけ  
 わくら葉やいなりの鳥居顯れて  
 文治二年のちから石もつ  
 みだれ髪股くゞりしと偽らむ  
 礫にかよふこゝろくるはし  
 三日月の影西須磨に落てけり

角丸齋堂風蕉雪角丸齋堂風蕉雪角丸齋堂風

〔落葉考〕に此  
 卷前半五十韻  
 に對する芭蕉  
 註といふもの  
 を輯録しあり  
 〔婆心錄〕に  
 酒屋の觀と  
 し觀をタレと  
 よむべしと云  
 〔婆心錄〕埋  
 めを正とす  
 〔落葉集〕にこ  
 の句「杉風」と  
 す  
 〔婆心錄〕「小  
 雨の」を正と  
 す

秋はものかはあけ捨の棟  
 燈心をおへばかならず初風  
 只一眼も道は一すぢ  
 特のくろきもさすが夕間暮  
 定家かづらの挽む冬ざれ  
 低く咲花を八手と見るばかり  
 桶の輸入の住ひいやしく  
 ひだるさを鏝にかへたるこゝろ太  
 瀧を惜ぬ不動尊き  
 聲なくてさびしかりけるむら雀  
 出る日はれて四方静也  
 花降は我を匠と人やいはむ  
 さくらく奥深き園  
 貞享三年  
 六七 百韻 (享保板鶴の歩)  
 日の春をさすがに鶴の歩み哉  
 砌に高き去年の桐の實  
 雪村が柳見にゆく棹さして

蕉雪角丸齋堂風蕉雪角丸齋堂風蕉雪角丸齋堂風

酒の帳に入あひの月  
 秋の山手東の弓の鳥賣ん  
 炭竈こねて冬のこしらへ  
 里のの麦ほのなるむら緑  
 我のる駒に雨おほひせよ  
 朝まだき三鳥を拜む道なれば  
 念佛に狂ふ僧いづくより  
 あさましく連歌の興をさますらん  
 敵よせ來るむら松の聲  
 有明の梨打烏帽子着たりける  
 うき世の露を宴の見おさめ  
 にくまれし宿の木槿の散たびに  
 後住む女きねたうちく  
 山ふかみ乳をのむ猿の聲悲し  
 命を甲斐の筏ともみよ  
 法の土我剃り髪を埋み置ん  
 はづかしの記をとづる草の戸  
 さく日より車かぞゆる花の陰  
 橋は小雨をもゆるかげろふ

芭 ち 蚊 朱 舉 李 仙 杉 芳 コ  
 北 下 重 杉 枳 齋 角 鱗 筆 蕉 り 足 絃 白 下 化 風 重 齋

(一)「婆心録」  
し咲いて哀れ  
に見ゆるを  
正とす

(二)「永祿」を正し  
とす  
(三)「婆心録」に  
「待宵」を正し  
とす  
(四)一本「物うさ  
の」  
(五)「婆心録」  
「武  
士等」を正し  
とす  
(六)「婆心録」  
「精  
と」とを正し  
とす

残る雪残る案山子のめづらしく

しづかに酔て蝶をとる歌

殿守がねぶたがりつるあさぼらけ

はげたる眉をかくすきぬく

器子咲て情に見ゆる宿なれや

はわけの風よ矢筈きりに入

かゝれとて下手のかけたる狐わな

あられ月夜のくもる傘

石の戸種鞍馬の坊に音すみて

われ三代の刀うつ鍛冶

永祿は金乏しく松の風

近江の田植美濃に恥らむ

とく起て開勝にせん時鳥

船に茶の湯の浦あはれ也

つくしまで人の娘をめしつれて

彌勒の堂におもひうちふし

待かひの鐘は墮たる草の中

友よぶ蟬の物うさの聲

雨さへぞいやしかりける鄙くもり

鹿の音を物いはぬ人も聞つらめ

にくき男の斬すむ月

筈の雨袂七里をぬらす覽

生駒河内の冬の川づら

水車米つく音はあらしにて

梅はさかりの院々を閉

二月の蓬萊人もすさめずや

姉待牛のおそき日の影

胸あはぬ越の縮をおりかねて

おもひあらはす菅の荊さし

菱のはをしがらみふせてたかべ鳴

木魚きこゆる山陰にしも

囚をやがて休むる朝月夜

萩さし出す長がつれあひ

問し時露と禿に名を付て

心なからん世は蟬のから

三度ふむよし野の櫻芳野山

あるじは春か草の崩れ家

傾城を忘れぬきのふけふことし

千

鱗 下 化 絃 春 卜 齋 下 鱗 枳 蕉 重 齋 春 角 楊 下 卜 絃

經よみ習ふ聲のうつくし  
竹深き笋折に駕籠ゆりて  
梅まだ苦き匂なりけり  
村雨に石の灯ふき消ぬ  
鮑とる夜の沖も静に  
伊勢を乗る月に朝日の有がたき  
樺よりきて橋造る秋  
信長の治れる世や聞ゆらむ  
居士とよばるゝから國の兒  
紅に牡丹十里の香を分て  
雲すむ谷に出る湯をきく  
岩ねふみ重き地蔵を荷ひ捨  
笑へや三井の若法師ども  
逢ぬ戀よしなきやつに返歌して  
管絃をさます宵は泣るゝ  
足引の廬山に泊るさびしさよ  
千聲となふる観音の御名  
舟いくつ涼みながらの川傳ひ  
をなごにまじる松の白鷺

峽

峽 枳 角 楊 重 化 齋 角 峽 春 鱗 楊 下 卜 化 水 齋 白 重

揚

齋 化 蕉 枳 下 角 重 絃 化 下 白 鱗 角 齋 枳 蕉 り 白 絃

門は魚ほす磯ぎはの寺  
理不盡に物くふ武者等六七騎  
あら野の牧の御召探みに  
鳴の一聲夕日を月にあらためて  
糺の館屋秋さむきなり  
電の木間を花のこゝろばせ  
つれなきひじり野に笈をとく  
人あまた年とる物をかつき行  
さかもりいさむ金山がほら  
此國の武仙を名ある繪にかゝせ  
京に汲する醒が井の水  
玉川やをのゝ六ツの處みて  
江湖／＼に年よりにけり  
卵の花のみな精にもよめる哉  
竹うごかせば雀かたよる  
南むく葛屋の畑の霜消て  
親と棋をうつ晝のつれなく  
餅作るならの廣葉を打合せ  
蟹に買るゝ秋の心は

不

蕉 枳 鱗 卜 楊 重 化 蕉 齋 角 絃 水 枳 白 下 鱗 角 重 白

寢蓮の七府に契る花句へ

連衆くはゝる春ぞ久しき

(一) 其角 九 仙化 八

文麟 八 李下 九

枳風 八 舉白 八

コ齋 九 朱絃 六

芳重 八 蚊足 一

杉風 二 ちり 二

貞亨 三 寶年 正月

芭蕉 六  
揚水 五  
不卜 四  
千春 三  
映水 三  
筆 一

白ト

朝とき月の都をがみに  
牛車我等か霧の道安き

七〇 歌仙 (無底籠)

南窓一片春といふ題に

久方やこなれ／＼とはつ雲雀

族なる友をさそひ越す春

からばかす櫻の庵掃過て

よろしく長き一瓢の酒

月はれて灯火赤き海の上

峠のそこにふく秋の音

牛蠅に拾おもたく羽折りける

官位あたへて美女召具せり

挑灯に大蠟燭の高けふり

出水にくぐる谷の材木

世わたりは關に道ある寺の背戸

つゝむにあまる腹氣押へし

あだ人のために斯くまで氏をすて

何についたる年暮の雪

虚琴  
洞藏

去芭共嵐  
來蕉角雪

來蕉雪角蕉來角雪來蕉雪

(一) 卷中に就て作句數を見るに  
舉白七不卜五  
なりこの句は  
の誤記か或は  
作者名の誤記  
か猝かに定め  
難し  
(二) 前文と併せ見  
て立句は秋ら  
しく脇は春な  
るは不春  
(三) 七都拾遺に  
「借れば貸す」  
「一葉集」に  
「からはかす」  
「掃置て」  
(四) 同書に「よし  
と口きる」  
(五) 「一葉集」に  
「拾持たせて」  
(六) 「一葉集」に  
「下す宮の」

六八 二句 (一葉集)

古池や蛙飛びこむ水の音

廬のわか葉にかゝる蜘蛛の巣

六九 五句 (丙寅紀行)

首途も近よらぬ問むさし野の月見んと芭蕉

庵を訪て

深川はすみれ咲く野も野分かな

春のはたけに鴻のあし跡

初寅のはじめの市の日和えて

其角翁

芭蕉  
風瀑  
晶

なきおくる八重山本の犬の聲  
軍の加減うとき長追ひ

さる程に心にそまぬ月も花も

やよひへかけて蝦夷の帳合

雨もやう陽炎消ゆるばかりなり

小姓泣き行く葬禮の中

叮嚀も事によるべき杖囊

しくものとは須磨の鹽蘆

あはれます昔がたりの沓手鳥

橋やせし竹の夕陰

冥加なう築すゝめにお腰元

毛氈をしき書畫のはじまり

こちあくる庇の下の十萬家

日は何時ぞ酔ざめの月

きり／＼すいかで心の情なき

葦たぐましき筒の鶏頭花

いつとても兩部の護摩の片燃に

四つの知慧には過ぎた家の子

鼻つまむ晝より先の生肴

連句集

あはつにまけぬ串の有様  
繩きれて架木に咲る花かろく  
あそぶ思案のわけてのどけき

七一 歌仙 (一橋)

三月廿日 即興

花咲て七日鶴見る麓哉

懼て蛙のわたる細橋

足踏木を春また氷る筏して

米一升をはかる關の戸

名月を隣はねたる草枕

枝見苦しき桐の葉を刈

墨衣ふるへば虫のから落て

内外の南向しづかなりけり

すでに立つ討手の使いかめしき

一夜の契り錢かづけたる

松明に顔みむといふ君は誰そ

生きて捨子の水に流るゝ

影形知れぬ敵を世になげき

芭蕉清舉會共

蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良 蕉風白良

ことしの餅をおもふ山寺  
雪を持つ櫓やさはらに露見えて

虹のはじめは日も匂なき

しづみては温泉をさます月すこし

三つ行く鹿の一つ矢を負ふ

勢々と軍に氣ある朝薄

男ながらの白粉をぬる

膝琴に明の風雅を忘れざる

涙をり／＼牡丹散りつゝ

耳うとく妹が告げたる時鳥

つれなき美濃に茶屋をしてゐる

札焼て刀ばかりは傳へけり

我がうつ騰を殿の御拳

檜紅葉狂歌やさしくよみそへて

京の月夜はさぞ躍るらむ

物となくものやむ人の獨寝に

眉ぬく袖の翠簾にうつぶき

からのふみ読めぬ所をうちやりて

ひとつもじ買ひに雪の山道

嵐

齋 良 蕉 白 雪 齋 蕉 角 白 齋 風 雪 齋 蕉 角 白 齋

あはれさは管屋に捨し破れ網

何やらなくて鹽やかぬ浦

相國の植を給ひけむ花と松

車を下りて春のやすらひ

七一 歌仙和漢 (三日月日記)

納涼の折々いひ捨てたる和漢月の前にして

みたしむ

破風口に日影やよわる夕涼

焚茶蠅避煙

合歡醒馬上一

かさなる小田の水落すなり

月代見金氣

露繁添玉涎

張旭が物書きなぐる酔の中

轡を左右にわくる村竹

翠帯驅偷鼠

ふるき都に残るお魂屋

くろからぬ首かきたる柘の撥

素芭

蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂

風 蕉 角 白

(一)この發句は貞享三年「葉集」和漢」と前書あり

(二)三日月日記に「葉集」字にケサと旁調あり、「ツユケサ」ならん

(三)「葉集」に、「かき立る」に、

乳をのむ膝に何を夢見る

舟釣風早浦

鐘絶日高川

顔ばかり早苗の泥によごされて

食はずけぬ蚊遣火のかげ

詫教三社一本

韻使五車一填

花月文山閣

篠を杖つく老の鶯

剪銀鮎一寸

箕面の瀧や玉を簸らむ

朝日影頭の鉦をかゞやかし

風喰喉早乾

よられつる黍の葉あつく秋立て

内は火とぼす庭の夕月

霧籠顔孰與

雲浦目潜焉

ふとん着て其夜に似たる鳥の聲

わすれぬ旅の數珠と脇指

蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂

山伏山平地

門番門小天

鶴鶴窺水鉢

霜にくもりて明る雲やけ

奥ふかき初瀬の舞臺に花を見て

臨谷伴三蛙仙

七三 半歌仙 (一葉集)

蜻蛉の壁をかゝへる西日かな

潮落かゝる芦の穂の上

霧の外の鐘を隔る松こみて

脊にはさまる石原のつゆ

入月に薄粧ひたる武者ひとり

柴の笥に笙をあやとる

山寺は晝も狐のさまかへて

花とひ來やと酒造るらし

夕がすみ日々にかさなる鞠の音

しろき胡蝶の垣を飛こす

絹張を欄の柱に筋かひて

沾 芭 露

蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂



月清く夕立洗ふみすの煤  
 客をつかうて鯉てうじける  
 花咲て人くまゐる草の庵  
 額板拾ふ山吹のはし  
 信濃路やたらの峽の春さえて  
 聲打かたに鳥歸る道

楢の葉に我文集を書終り  
 弟にゆるす妻のさかづき  
 物かげは忍びやすき月はれて  
 琴を聞する夜のあさがほ  
 馬を下て野服をかいとる秋の露  
 九輪指さす尾上はるけき

風の音ならぶ蘇鐵のいかめしく  
 大口着たる庭の雪はき  
 うへもなく鳩のむれ立つ千木さびて  
 ひとりすだれをあみくらす妻  
 一軸の記念の連歌膝に置き  
 名を恥ぬべき越のたゝかひ  
 面かけて鏡にむかふ男つき

〔倭名抄〕  
 小鳥也  
 〔かやく  
 あり〕とも云

〔同園集〕に  
 『早乙女逢』に

蓬 角 カ セン  
 沾 徳 カ

蓬 沾 カ セン  
 蕉 沾 カ

蕉 沾 カ  
 蓬 沾 カ  
 沾 沾 カ  
 沾 沾 カ

みはしをのぼる唐獅子の聲  
 襪織花のにしきのをさ打つて  
 柳の水のすみかへる春

七八 四十四 (續 虚栗)

十月十一日餞別會  
 旅人と我名呼ばれむ初霧  
 亦さゞん花を宿くにして  
 鶴鶴の心ほど世のたのしきに  
 根を分たる山かげの鶴  
 かけありく芝生の露の淺緑  
 新舞臺月にまはばや  
 中の秋畫工一つれかへるなり  
 儲てうじておくる漢舟  
 神垣や次第にひくき波のひま  
 齡とをしれ君が若松  
 酒のみにさをとめ連の並び居て  
 卯月の雪を握るつくばね  
 鯉つる袖つくばかり早瀬川

セン  
 蕉  
 筆

芭 由 共 枳 文 仙 魚 観 全 嵐 執  
 蕉 之 角 風 鱗 化 兒 水 峯 雪 筆 蕉

〔句 餞 別〕に  
 『十八句』と前  
 書あり

蘿一面に残る橋杭  
 道しらぬ里に碁をかりに行  
 月にや泣ん泊瀬の籠人  
 葛籠とく匂も都なつかしく  
 おもはぬ事を諷ふ傀儡  
 途中に立る車の塵を巻て  
 沖こぐ船にめされしは誰  
 花ゆへに名の付く波ぞめづらしき  
 別るゝ鴈をかへす琴の手  
 順の峰しばしうき世の外に入  
 萱のぬけめの雪を燒家  
 老の身の繩なふ程にほそりける  
 君流されし跡の關守  
 明暮は干潟の松をかぞへつゝ  
 いのちをおもへ舟に遺蟹  
 起出て手水つかはん海のはた  
 しらぬお寺を頼む有明  
 薺や石ふむ坂の日にしほれ  
 小畑さびしき案山子作らむ

舉

角 風 鱗 化 峰 蕉 之 雪 白 水 化 之 蕉 白 角 雪 水 峰 風

草の戸の馬を酒債におさへられ  
 つね見る星を妹におしゆる  
 薫のしめり面白き夕涼み  
 織かざして氏の天王  
 御牧野の笛吹習ふ童聲  
 僧くるはしく腰にさす杖  
 見ぐるしと文字の子昂を嘲て  
 塚の錦蜀をあらへる  
 隠家や寄居虫の友に交りなん  
 筏に出て海苔すくふ頃  
 谷深き日うらは花の木目のみ  
 聲しだれたる春の山鳥

七九 半歌仙 (句 餞 別)

江戸さくら心かよはんいく時雨  
 薩埵の霜にかへりみる月  
 貝ひろひゆく磯なれて  
 酔ては人の肩にとりつく  
 けふの賀のいでおもしろや祖父が舞

濁 芭 嵐 共  
 子 蕉 雪 角

蕉 白 化 角 峰 風 角 雪 水 蕉 白 之

根松苗杉蟬の啼聲  
池の橋わたしはじめぬ垣結て  
みなと入帆の見ゆる屋根越  
世の中を畫にのがれたる茶の煙  
妹がかしらの唐輪やさしき  
記念てふ袋のきれのはつゝに  
夢を占きく関の朝風  
津の國のなにはくくと物うりて  
二夜どまりの筑紫ざぶらひ  
一卷の連歌をとむ此寺に  
苗代もゆる雨こまかなり  
鷺の巢のいくつか花に見えずきて  
彌宜下替る春の夕月

八〇 十句 (句 錢 別)

しろがねに蛤をせ霜夜の鐘  
一羽別るゝ千鳥一群  
枯草にいよゝ松のみどりして  
田中の道のとをりくれ行

依 曾 芭 松

子 蕉 雪 子 雪 蕉 子 雪 蕉 子 雪 蕉 子 角 子

月ほそくをのが家しるはなし馬  
秋風上る門のはしとみ  
露の糸錦をとす校の音  
雨には見せじ蘭のきせ綿  
旅枕女あるじの情得て  
傾城かけをかくす明ぼの

八一 十句 (句 錢 別)

時雨くゞに鑑かり置ん草の庵  
火燧の柴に侘を次く人  
松風にそれたる鴟を見のがして  
朝氣はくらす湯の山の月  
鐘ひとつ三郷にかよふ秋の聲  
葛の繩面をゆるされし文  
繼子をもいたはる嫁の名をとげて  
餅二かさねえにしそふ帯  
よし原の土手に子日の松ひかん  
誰がぬし有て飾する宮

嵐 卜 共 口 溪 芭 舉

石 蕉 白 雪 千 角 齋 石 蕉 白

執 苔 夕 風 水 泥

筆 翠 菊 泉 萍 芹

(一) 句 錢 別 一 十句 前書  
あり  
(二) 句 錢 別 一 十句 前書  
あり  
(三) 句 錢 別 一 十句 前書  
あり

(一) この巻傳寫の  
うちニウの  
二句脱落した  
るならんか

八二 三十四句 (一 葉 集)

冬景や人寒からぬ市の梅  
隣をまよふ入あひの雪  
年の貧依おひゆく詠して  
火をたく舟の星くらき空  
鷺うごく松おもしろき磯の月  
かさしに折らんすゝき一むら  
太刀持る童のぬれて露時雨  
車の翠簾につゝむ鈴虫  
尋來る友引地蔵茅朽て  
うれしと飢にいちご拾はむ  
櫛かゝみ枕にそへて残しけり  
御歌合明日とちぎる夜  
加茂川のながれを胸の火にほさん  
萩散かゝる市原のほね  
鴟の啼方に杖つく夕間ぐれ  
牛を彩なす月の染ぎぬ  
花の日を亡八の長とかしづかれ

李 文

下 子 鱗 蕉 齋 角 化 風 角 子 化 齋 風 化 蕉 角 子

桃になみだか一國の醉  
朝がすみ賢者を流す舟見えて  
詞のうみと繪に讀を乞  
松島や雲居の庵に酒を飲  
心は媚すいとせの旅  
四の時冬はあられのさらくんと  
水仙ひらけ納豆きる音  
片里の庄屋の息子角入て  
伊勢思ひたつ草鞋菅笠  
美濃なるや蛤舟の朝よばひ  
ながれに破る切籠折かけ  
月入て電残る蒲すごく  
ことしの勞を荷ふ焼米  
塚の下母寒からむ秋の風  
邦を軍にとられ行く道  
花のおく鳥うつ音に鐘つきて  
すり餌をゆるす目白黃鳥

八三 歌仙 (千鳥掛)

下 化 齋 角 蕉 子 下 化 齋 子 蕉 鱗 齋 下 角 蕉 嵐





雁のなごりをまねくおのく

八五 歌仙 (千鳥掛)

星崎の闇を見よとや啼千鳥  
 船調ふる海士の埋火  
 築山のなだれに梅を植かけて  
 遊ぶ子猫の春にあひつゝ  
 うその聲夜をまつ月のほのか也  
 岡のこなたの野邊青き風  
 一里の雲母ながるゝ川上に  
 祠さだめて門ぞはびこる  
 市に出てしばし心を師走哉  
 牛にれかみて寒さわするゝ  
 靱白の音聞ながら我いびき  
 月をほしたる螺の酒  
 高紐にかぶとをかけて秋の風  
 渡り初する宇治の橋守  
 庵造る西行谷のあはれとへ  
 啄木鳥たゝく杉の古枝

芭 安 自 知 美 如 重

言 蕉 信 吟 足 言 辰 風 言 足 信 風 吟 蕉 風 信 足 言 辰 風 言 足 信

咲花に晝飯の時をわすれけり  
 山もかすむとまではつゞけし  
 辛螺壳の油ながるゝうす氷  
 角ある眉に化粧ひする霜  
 まつ宵の文をくひさく帳の内  
 ねられぬ夢に枕あつかひ  
 罪なくて配所にうたひ慰ん  
 庶子にゆづりし家のつり物  
 式日の日はかたふきて心せく  
 浅草米の出る川口  
 欄干に顔ならぶ夕すゞみ  
 笠もてあふつ螢火のかけ  
 初月に外里の嫁の新通ひ  
 すゝきは招く蒨袖ひく  
 朝霧につらきは鴻の背ならず  
 あかぐね瓦なめらかにして  
 氏人の庄園多き花ざかり  
 鶺鴒いくむれの春とゞまらず  
 田をかへすあたりに山の名を問て

辰 足 風 言 蕉 風 足 信 風 言 吟 辰 蕉 足 吟 蕉 辰 風 足 信

(一)「葉集」に  
 「野は青き風」  
 (二)「調集」に  
 「家の兵」  
 「葉集」に「家の  
 形物」

かすみの外に鐘をかぞふる

八六 三句 (芭蕉翁眞蹟拾遺)

麦はえてよき隠家やはたけむら  
 冬をさかりに椿咲くなり  
 晝の空蚤かむ犬の寐返りて

執 筆

芭 蕉 人 仁 越 野

八七 表六句 (千鳥掛)

(一) 畑村は愛知縣  
 温美郡福江町  
 のうちにてそ  
 のの波邊何某  
 の家に杜國の  
 認めしこの詠  
 草を藤せりと  
 云ふ  
 (二) 「葉集」に  
 「野人」とあり  
 「菊の座」とあ  
 るも杜國の變  
 名ならん

ばせを翁本見し人を訪ひ三河國に越へ序お  
 もしろければ伊良古崎見んと白浪よする渚  
 をつたひからうじて歸給ひし旅の哀を聞て

燒食や伊良古の雪にくづれけん  
 砂さむかりし我あしの跡  
 松をぬく力に君が子日して  
 いつか烏帽子の脱る春風  
 眠るやら馬のありかぬ暖さ  
 疊をかくす臙夜の月

八八 表六句 (千鳥掛)

寂照庵に旅ねして

連句集

足 蕉 人 足 蕉 人 足 蕉 人

八九 四句 (千鳥掛)

置炭や更に旅ともおもはれず  
 雪をもてなす夜すがらの松  
 海士の子が鯨を告る貝吹て  
 背戸より直に踏こはす垣  
 歌よせん此名月をたゞにやは  
 蕎麥のみつきを通す關守

越 知 芭 蕉 人 足 蕉 人

荷 分 芭 蕉 人 足 蕉 人

寂照庵知足子の許へはせを翁を尋來て  
 幾落葉それほど袖もほころびず  
 旅寐の霜を見するあかゞり  
 今朝の月替る小荷駄に鞭當て  
 里の踊に野菊折ける

野 知 芭 蕉 人 足 蕉 人

九〇 三句 (千鳥掛)

鳴海出羽守氏雲宅にて  
 面白し雪にやならん冬の雨  
 氷をたゞく田井の大鷲  
 船繫く岸の三股荻かれて

芭 自 知 蕉 吟 足



鶴白鳥のおりておもしろ  
水浅く舟押ほどの秋のくれ

もう山の端に月の一尋

きぬくや烏帽子置所わすれけり

眉ほそむるも耻るうかれ女

寄手等はいつともなげに歌よみて

干飯の水のつめたきもよし

着て來たる布子苦になる晝の頃

涙うつりて能くはおぼえず

門跡の顔見る人はなかりけり

笈に雨もる峰の稻妻

能ほどに寝てから後の碁聞

夜の明なりと暗つぶす月

うか／＼と律義に花の待れつる

罐ともしらで飼る黄鳥

尼寺の春雨くらくしと／＼と

釣瓶なれば水のとぎるゝ

夕がほの軒にとりつく久しさを

布杭二本よるはさびしき

荷野聽越舟執

兮水洞筆泉人處碧洞泉人處碧洞泉人處

ひまくれし妹をあつかふ人も來ず

食たくことをわびて泣けり

旅立の心はむさき物なれや

けふ髪剃に加茂川の水

蟬の音にひとへの衣も身に付ず

ほそき脈の枕いたげに

月しのお紙燭をけしてすべり入

物着て君をおどす秋風

此橋を好て歸る霧の中

山ひき出してのり初る駒

しでかけて雁股つがふうたく

獨ころひてより隙ころひけり

何事も花になりたる花の陰

藪の中にも椿山吹

九四 半歌仙 (一葉集)

我名呼れんと云旅人の句を聞て

旅人と我見はやさむ笠の雪

さかづき寒し涙ひさふらへ

蕉碧泉人洞水人洞泉蕉兮人洞水人洞泉蕉

「如行子」に  
作「獨」を「狩」に  
句不通恐くは  
錯誤あらん

「如行子」に  
「如行子」によ  
れば十二月三  
日名古屋書林  
の表合にて立  
句「あられどか  
れし笠舎り」

有明の鉢の木賊を劫そめて

露になりけり庭の砂原

小御門に駒ひきむかふ頭ども

椎の古枝を腰に折そへ

覆盆子踏山より村の雨はれて

老聲苦し夏の黄鳥

物くはで晝寝がちなる物思ひ

またふみ書て車かへしつ

櫛籠に見よと摘たる山の草

しるしくづれし柴人の道

櫛作る家もさびしき春の風

三日月ほそく節句知けり

鶉を入る初川いそぐ花の陰

美濃侍のしたりがほなる

御即位によき白髪とえり出され

植て常盤の百本の竹

芭蕉翁不快にして止め

九五 表六句 (一葉集)

連句集

桐

葉蕉行葉蕉行葉蕉行葉蕉行葉蕉行葉蕉行葉蕉行

霞かと聞くほどうれし笠舎り

夜の更るまで竹沓ゆる聲

船あてゝ櫂もぎらるゝ磯際に

汐のはやきをこゆる洲走魚

海鳴て山より曇る暮の月

鐘つく秋の階子ほく／＼

九六 歌仙 (一葉集)

箱根こす人もあるらしけさの雪

舟に焚火を入る松の葉

五六丁布網干せる家見えて

柺むれつゝ霞の中ゆく

明るまで戻らぬ月の酒機嫌

薙／＼を揚る盆の夜

帷子に拾羽折も秋めきて

食早稲くさき田舎なりけり

神主も常は大かたゑほしなく

塘見えすく藪の下刈

どや／＼と還御の跡に鶴釣て

如行道夕荷野芭蕉 如行道夕荷野芭蕉 如行道夕荷野芭蕉 如行道夕荷野芭蕉 如行道夕荷野芭蕉

誰やら申出す念佛  
忍び入戸を明かねて蚊に喰れ

うき名しれつる月の傘

長き夜を泣たるまみの重たげに

人に抱れて船をあがりぬ

花の賀にけふ狩衣を皺にする

其まゝ梅を栽る幕申

是より人々のおもむき有て出がちに物せ  
んといさみあひて

下ごゝろ彌生千句の俳諧に

胡菲喰ふ人の臭さよ

とろ／＼と一寝入して目の覺る

堂もる雨の鐵通りぬ

ころつくはみな團栗の落しなり

其鬼見たしみの虫の父

布袋破れ次第の秋の風

松島の月松島の月

ひよつとして歌の五文字を忘たり

妻戸たゞきて逃て歸りぬ

人 水 行 人 水 行 人 水 行 人 水 行

泣／＼てしやくりの留る果もなし  
あたら姿に頭そられず  
世の中の茶筌賣こそ嬉しけれ  
眠たき晝はまろび轉げて  
旅衣尾張の國の十藏か  
富士畫かねて又馬にのる  
懐に盃入る花をかし  
影和らかに柳ながるゝ

水 行 人 水 行 人 水 行 人 水 行

九七 半歌仙 (熱田三歌仙)

十二月九日一井亭興行

旅寝よし宿は師走の夕月夜

庭さへせばくつもるうす雪

どや／＼と算をあぶる藁焼て

紙漉を見に御幸ある頃

琴持の建の上をつたひ行

障子明ればきゆるともし火

起もせできゝ知る匂ひ怖ろしき

亂し髪汗ぬぐひ居る

芭 越 昌 荷 楚 東  
蕉 井 人 碧 竹 睡 蕉

(二) 鹿鹿に「尾張十越路の人と張す越路の人なればなり」  
栗飯柴薪のたより市つとに隠れ二日つとめて二日つとめて三日あそぶの性酒をこのみ平家の時たふなり「これ我友ふりけるか」  
芭蕉「ふりけるか」

投られて又取付るをかしさよ

乳をのむ子の我に似るらし

麻布を煤びるほどに織かねて

蘭をとりこめばねこだせはしき

夕立の先に聞ゆる雷の聲

馬もありかね山際の霧

小男鹿のそれ矢を袖にいつけさせ

飛あがるほどあはれるる月

凧にかじけて花のふたつ三つ

はたけにつゞく野ははるかなり

九八 二句 (一葉集)

薬のむさらでも霜の枕かな

むかしわすれぬ草枯の宿

九九 表六句 (一葉集)

いざさらば雪見に轉ふ所まで

硯の水の氷る朝起

同じ茶の焙じたらぬは氣香もなし

連句集

芭 起 芭 倒 蕉 碧 兮 人 蕉 睡 竹 兮 碧 人 井

三十餘年もとの顔なり  
あの山のあかりは月の御出やら  
かや釣るせはもやめて此頃  
一〇〇 二句 (三冊子)  
歩行ならば杖つき坂を落馬哉  
角のとがらぬ牛もあるもの  
元祿元年  
一〇一 二句 (春と秋)  
われもさひよ梅よりおくの藪椿 伊  
茶の湯に残る雪のひよどり 芭 雅 賀 良  
一〇二 二句 (芭蕉翁全傳)  
さま／＼の事もひ出す櫻かな 芭 蕉  
春の日はやく筆にくれ行く 探 丸 子  
一〇三 歌仙 (俳諧集)  
何の木の花ともしらす匂ひ哉 芭 蕉

(一) この句は風月堂夕道方にて詠みしものなり  
(二) 「閑閑集」に野人の胃に「杜國更」とあり  
(三) 文考の名あるは不審也  
(四) 俳諧集に此巻を元祿三年とす「袖草紙」に「太神宮法樂」と前書あり

〔一〕『平庵』に  
 〔二〕諸書に『いね  
 かり、可なるが  
 如し、作者を  
 『野人』に  
 〔三〕『きね』恐くは  
 『きね』ならん  
 〔四〕『俳諧集』に  
 『水雞を山に』  
 とあれと誤ら  
 らん、今『一  
 葉集』に従ふ  
 〔五〕同書『誰か乗  
 物に』とあれ  
 と今『一葉集』  
 に従ふ  
 〔六〕同書『釣の玉  
 子』とあれと  
 今『一葉集』に  
 従ふ  
 〔七〕『柚草紙』に  
 『家の園もな』

連句集

こ糸に朝日をふくむうぐひす  
 春深き柴の橋もり雪掃て  
 二葉のすみれ御幸まちけり  
 有明の草紙を絹に引つゝみ  
 ね覺はながき夜のあぶら火  
 釣梯に鼠のかよふ音聞て  
 門細めなる田の中の寺  
 山路来て清水まれなる袖の汗  
 わづらふ鷹をたのむ悲しさ  
 女のみ古き御館の破すだれ  
 棋に肘つきて涙落しつ  
 いねがねに酒さへならず物思ひ  
 陣のかり屋に僧のこもりて  
 しら雲にのぼれと鷹を放つらし  
 はじめて得たる國のはつ稻  
 漏月を賤がはた織る窓にみて  
 藍にしみつく指かくすらん  
 神役にやとはれきぬる注連の内  
 返歌につまるきぬの佛

益又雲勝清

光 玄 庵 里 光 人 延 蕉 玄 庵 蕉 光 里 延 庵 玄 光

こひ草と池のあやめを折かねて  
 水雞を追に起し曉  
 多葉粉すふ舞の跡のけふりたる  
 誰か乗ものぞ霜かゝるまで  
 あくがるゝ樂の一手を聴とりて  
 釣の王子の浦はさびけり  
 聲立て華表に残る秋の蟬  
 しぐるゝ風に銀杏吹ちる  
 笈かけて夜毎の月を見ありきし  
 心とすさむ家の園もきえ  
 親ひとり茶に能き水と軟つる  
 まづ初瓜を米に代なす  
 此坊を郭公きくやどりにて  
 ゆりこむ權に舟繫ぎけり  
 ものゝふの弓弦に花を引挽め  
 短尺のこす神垣の春  
 一〇四 二十三句 (一葉集)

芭 蕉 正  
 蕉 人 延 玄 永 蕉 光 庵 人 延 玄 光 蕉 里 庵 玄 延

〔一〕『馬に西瓜』の  
 句の次に『この  
 のすゑ翁の句  
 をあげて餘は  
 のぞく』とあり  
 りて次の順序  
 に記せり  
 〔二〕『稲妻の光  
 来れば筆投て  
 野中の別れ片  
 袖をもぐ芭蕉  
 夕に駕籠を借  
 みやこ人  
 命ぞとけふの  
 連歌を懐に  
 沙は干て砂に  
 文書須磨の浦  
 家を荷ひては  
 毎食年とる  
 の木の中  
 聖の月もみつ  
 ら前のけしき  
 其まの詩に  
 ハツになる子  
 の顔清げなり  
 同  
 〔三〕芭蕉より  
 宛返書の中に  
 あり、三句の  
 次に『二十四  
 句にてやむ』  
 と附記せり

連句集

澄てまづ波水のなまぬる  
 酒うりが船さす棹に蝶飛て  
 板屋／＼のまじる山もと  
 夕暮の月まで傘を干て置  
 馬に西瓜を付てゆくなり  
 秋寒く米一升に雇れて  
 糲半の糊のたらてさびしき  
 吹付て雨はぬけたる未申  
 夕に駕をかる都人  
 命ぞとけふの連歌を懐に  
 寺に祭りし業平の宮  
 世の中を鶴鶴の尾にたとへたり  
 露にとばしる萩の下末  
 いなづまの光て来れば筆投て  
 野中のわかれ片袖をもぐ  
 君が琴聖の風雅をしたひつゝ  
 兩關集に此末翁の句のみ舉てと有て  
 沙は干て砂に文字書須磨の浦  
 日毎にかはる家を荷ひて

路草史 乙

葛 應 杜 一

孝 有 國 蕉 森 國 蕉 森 宇 國 蕉 森 宇 蕉 有 孝 森 宇 蕉 蕉

乞食をしとる櫛の木の中  
 聖して雲ながらの月も見つ  
 目前のけしき其まゝ詩に作り  
 八ツになる子の顔清げなり  
 一〇五 三句 (芭蕉翁全傳)  
 杜若語るも旅のひとつかな  
 山路の花の残る笠の香  
 朝月夜紙干す板に明初めて  
 一〇六 歌仙 (一葉集)  
 時鳥こゝを西へかひがしへか  
 うす／＼はれるさみだれの暮  
 萱茸のわづかな塵を掃もせで  
 人のたからはとしの數なり  
 有明に土圭の加減直し置  
 植木のかげに今に残る蚊  
 物好は律にかなうて静さよ  
 晝がまはればいつも零風

芭 蕉 萬 一 芭  
 蕉 菊 萬 一 芭  
 蕉 人 延 玄 永 蕉 光 庵 人 延 玄 光 蕉 里 庵 玄 延  
 桂 ュ 東 桐 芭 閑 叩 如  
 栲 山 藤 葉 蕉 水 端 行

篠竹の虎も居さうな谷續

はら／＼と火うち出は手のさえ  
觸事も田舎となればゆるやかさ

蜘蛛の橋のかけつはづしつ  
戀種を其中將とおもひ侘

かくせば文の袖におもたき  
際明の用は序になりもせず

一里までなき産神の森  
散花をまたせて月も山際に

窓から東風のけふもきのふも  
暖な空ははやくもかはる雨

談義すみたる縁のどろ／＼  
はさみては有るかと思の汗拭ひ

非人も都そだちなりけり  
脱かぬるひとつ羽折の一ツ紋

五寸と書て一寸の雪  
寒梅の床から添る茶の匂ひ

やかましい日は鐘もおぼえず  
又してもわすれた物を月あかり

執

筆

何所やら凄き秋の水おと

眞黒な石のそばだつ霧の中  
手前の杖をいたゞいて置

お十二に過た何かの御器用さ  
不淨をよける金欄の徳

釋教も末が末ほどあぢに成  
をさめかねたる儒者の小宅

六經の花を古瀬戸に秘藏せん  
邪なしとおもへ日ながく

一〇七 二十四句 (千鳥掛)

杜若我に發句のおもひあり

麥穂なみよるうるほひの末  
二ツして笠する烏夕ぐれて

かへさに袖をもれし名所記  
住馴て月待ほどのうら傳ひ

それとばかりの秋の風音  
捨かねて妻呼鹿に耳ふさぎ

念力岩をはこぶしたゞり

楫 行 山 藤 蕉 葉 水 端 楫

芭 蕉 知 桐 叩 美 自 如 安  
蕉 足 菓 端 言 咲 風 信

『一葉集』に  
『卯の花』

『加子繪』の三  
字不審  
『笈日記』に  
「是は惟然み  
のに有し時の  
事なるべし」と  
附記せり

『書譜』の二字  
不審

道野邊の松に一喝しめし置

長者の輿に脊を投込ム

から樽を荷ふ下部のうつゝなや  
岸にかぞふる八百の鶯

森透に燈籠三ツ四ツ幽なる  
子をおもふ親の月さがしけり

その秋すなる手打の悔しくも  
猫ならば猫霧晴てから

鳥部野に葛とる女花わけて  
ねためる筋を春惜まるゝ

燕に短冊つけて放チやり  
龜蓋を背負ふさゞなみ

天氣さへ勅に應じて雲なびく  
五日の風の宮雨のみや

菓子賣も木がくれたのみ住はつる  
長屋の外なたつ名はぢらひ

一〇八 二句 (千鳥掛)

芭蕉行脚のころ

連句集

重

辰

夏草よあづま路まとへ五三日

笠もてはやす宿の卯の雪

一〇九 二句 (笈日記)

茄子繪

見せばやな茄子をちぎる軒の畑

その葉をかさねおらん夕顔

一一〇 二句 (笈日記)

書譜

ところ／＼見めぐりて洛に暫く旅寐せし程  
美濃の國よりたび／＼消息有て桑門已百の  
ぬしみちしるべせんとしてとぶらひ來侍りて

しるべして見せばや美濃の田植歌  
笠あらためん不破のさみだれ

一一一 三句 (笈日記)

落椿亭

藏のかげかたばみの花めづらしや

折りてやはかん庭の帯木

荷 落 荷 落  
兮 兮 兮 兮

芭 己 芭 己  
蕉 百 蕉 百

芭 惟 芭 然  
蕉 然 蕉 然

桃 知 桃 知  
青 足 青 足

たなばたの八日は物のさびしくて

一一二 表六句 (一葉集)

林鐘十七日

何所までも武蔵野の月影涼し

水相似たり三股の夏

海老喰ひに群れたる鳥の名を問て

えぼし着ぬ日の更に樂なり

懐をあげてうけたる山さくら

蝶くるひゆく欄干の前

一一三 五十韻 (一葉集)

六月十九日

蓮池の中に藻の花まじりけり

水おもしろく見ゆるかるの子

さゝなみやけふぞ火と暮待て

肝のつぶるゝ月の大きき

刈萱に道つけ人の通るほど

鹿うつ小家の晝はさびしき

眞鐵まがねふく烟は空にほそくと

榎たつ組の風のよめふり

古寺こでらの瓦ふきたる軒あれし

夜よちぎる盗人の妻

涙より雨にしめりて簀おもく

馬の乗たる舟のせばさよ

須磨明石見残すほどに暑くなり

筆ゆひかねる茄子ちひさし

蓬生の垣根に機を巻かけて

齒ぬけの祖父の念佛をかき

足跡に米のこぼれていまし

つなげる舟に在明の月

秋の風橋杖つくる手斧屑

はかまをかけて薄からする

花ざかり節句を山に暮しけり

僧のめしくふ鐘かすむ空

高欄たかねに冠ならびて長閑也

蹴あげし鞠に夕日まばゆき

みどりなる朴の梢の蟬の聲

落 蕉 己 梅 露 鷗 拾 用 東

梧 筵 百 餅 步 景 呂 巡 蕉 人 文 今 然 玉 梧 餅 百

(一) 沙干を季語とせざる例

(二) 一、雁がねの巻ウ八句目に此句を再び用ひあり

(三) 千鳥掛には「鳴海眺望」と題して表六句を擧げ「歌仙有略」と附記せり

辨當洗ふ清水なりけり

微塵ばかり片よせ通る風の跡

荷をまちかけて馬士のいさかひ

手杵つく賤がかしらのとけながら

もえしさる火にいとせはしき

雪の日は内まで鳥の餌をはみて

琴ならひ居る梅のしづかさ

朝霞生捕れたる物おもひ

衣着かへねばわるき春雨

時鳥初音まつ夜はけはひして

まがきの月に車しのばせ

此里は親する音のさらくと

孝子蜜柑を折持て行

しらぬ川人の渡るを詠め居て

餘所は降るらん神のとゞろき

土とりに此片山をほり崩し

牛のくびする松うごきけり

おほひなき佛に鳥のとまりたる

はしりあがりてわたる反橋

土産にと拾ふ沙干の空せ貝

風かぜひき給ふ聲のうつくし

いづくからわかるゝ人ぞ衣かけて

御隔子ごかくしあぐる月の寒けき

木枯きこに花ちる庭の笛鼓

懐紙をつゝむ玉だれの霜

一一四 歌仙 (一葉集)

(三) 七月十三日鳴海眺望

初秋や海も青田の一みどり

のりゆく馬の口とむる月

藻庇霧ほのぐらく茶を酌て

瘦たる藪の竹まばらなり

蛤かきのからみわくる高砂子

笠ふりあげて船まねく聲

白雨しらあめの雲つゝみゆく雨のあし

田面にむれし鶯の羽をのす

お乳そひてわかうにもはや云ぬらん

おもひ残せる遠の國替

芭 重 知 如 安 自

蕉 辰 足 風 信 風 足 風 吹



琵琶彈て今宵は泣て明すべき  
 鈎籠の一重も恥る黒髪  
 軒高き瓦の鬼の影さびし  
 施俄鬼過たる入あひの幡  
 淺瀬川向に角力とり初て  
 樽きりほどき月を酌けり  
 花の雪鷹に見せたまき泊山  
 水おもしろき寺の春風  
 勢多の橋なかは霞たえくくに  
 白壁遠く炭をうる市  
 芝原の朝霜はらふ布衣  
 けふ一七日戸帳ひらきて  
 かしこまる百首の歌をよみ終り  
 妻に聞せん尺八の曲  
 湯あがりの肌には伽羅を炷こがし  
 むかしはづかし今の竹垣  
 糸のころの踏あらしたる蘭の鉢  
 魚つむ船の岸による月  
 露の身の島の乞食と黒み果

牛

蕉 信 足 歩 信 足 信 足 信 風 蕉 辰 信 蕉

次第にさぶき明くれの風  
 猿の子の親なつかしく叫けむ  
 鴉も鳩も柴の戸の伽  
 石ふみてかた下りなる岨の道  
 杉葉まじりのつくし摘  
 かんざしに花折娘打むれて  
 胡蝶をはやす鶴龜の舞

一一五 表六句 (千鳥掛)

賀新宅

よき家や雀よろこぶ背戸の粟  
 蒜にみゆる野菊刈萱  
 投渡す岨の編橋霧こめて  
 風呂燒きに行月の明ぼの  
 杉垣のあなたにすぎき鳩の聲  
 初霜下りて紙子捫つゝ

一一六 歌仙 (秋の日)

七月二十日

芭 知 安

足 信 蕉 足 信 蕉 足 信 蕉 足 信 蕉

(二) 諸書『芭』に作  
れども恐くは  
『林』ならん

(一) 一葉集「  
『まつしくも』  
とす

(三) 一葉集「に  
『月の前』

(四) 一葉集「に  
『ますらをが』

於竹葉軒長虹興行  
 粟稗にとほしくもあらす草の庵  
 藪の中より見ゆる青柿  
 秋の雨歩行鶴に出る暮かけて  
 月なき岨をまがる山あひ  
 ひだるしと人の中せはひだるさよ  
 蕤もちよりて屋根葺にけり  
 木の葉ちる榎の末も神無月  
 つて待かぬる島のくひ物  
 筵着て蚊のなく聲に睡られず  
 われに狂ふや妾がおそろへ  
 水つけず立たる髪の手さましく  
 死て間もなき魂まつるなり  
 石籠もあらはれ出づる夜の月  
 蕤を組むとて寝ぬ渡し守  
 火ぶりして歸るおのこは何者ぞ  
 白き袂の見ゆる輿かき  
 雨乞にすはく華のうるほひて  
 竹ゆひそゆる軒の連翹

芭 長 荷 一 越 胡 鼠

蕉 虹 兮 井 人 及 彈 蕉 虹 兮 井 人 及 彈 蕉 兮 井 人 及 彈 蕉 兮 井 人 及 彈 蕉 兮 井 人 及 彈 蕉

日和さよけふは氣あひの少しよく  
 木馬直して子ものせにけり  
 色黒き下部つまげてかしこまり  
 切籠おりかけすぎき夕暮  
 さま／＼の香かをりけり月の影  
 一人一代の戀をとふ秋  
 捨し世は葛のうらみも引むしり  
 きたなくなれど顔も洗はず  
 懐に脇指さしてまた出づる  
 下戸をにくめる雪の夜の亭  
 早咲の梅をわが身にたとへたり  
 嫁せぬむすめの眉かゝで居る  
 しのび音にすがゞきならす垣の奥  
 ふみきやさせる松のともし火  
 明けやすき夜をますらが腹立て  
 なにを啼き行ほとゞぎすやら  
 花による硯のふたに物かきぬ  
 麁はり出す春の夕暮

兮 及 彈 蕉 人 及 彈 蕉 兮 及 彈 蕉 兮 及 彈 蕉 兮 及 彈 蕉 兮 及 彈 蕉 兮 及 彈 蕉

一一七 歌仙 (一葉集)

いろ／＼の菊もひとつの匂ひかな  
 松のひびきを草庵の秋  
 眞丸に有明月の影見へて  
 道のはやきは人のとりえか  
 聲高な咲ひも腹を立よりは  
 揚場へ船の着かぬるやら  
 此あたり何をしるべに住ひせん  
 芥子などありて竹やせし村  
 被とる顔に驚く一むかし  
 此髪剃んことの安さよ  
 精出して金持こゝろ恥しく  
 紅葉をのみに新きる山  
 雨降の鯛聲のあはれなり  
 硯をさぐる月の小ぐらき  
 氣ばらしは何を思ひの窓のもと  
 まだ目の覺ぬ眉のらうたき  
 散もせず撞樓に近き花盛

叩 桐 芭 東 ユ 閑 執  
 端 葉 蕉 藤 山 水 筆 端

飛ゆく蝶の高くなりけり  
 青／＼とうごかぬ石の長閑にて  
 酔て又寝る此橋の上  
 夕暮は謠ひも聞ぬ蓮池に  
 行水したるさまの兒ども  
 追歸る木幡の馬をかざり連  
 半よごれし蓆おろしつ  
 いそぐほど繪を書さして横に成り  
 女師走の月と契るか  
 雪の日の砧に涙落しける  
 柴たく壁のゑみてほろ／＼  
 砂川を關にこちらも宮ありて  
 息る牛を捨す釣ゆく  
 奥深き事も悟れは近い管  
 行燈の火のほそき明方  
 くもるかと思へば果は風になり  
 筆一本に花の一時  
 誰かしの桃源洞の芳しき  
 茶に酒に先づ水のあたゝか

水 山 蕉 端 葉 蕉 山 藤 水 葉 藤 山 端 藤 山 葉

(一)この巻下折端  
 以下九二五  
 句は九二五  
 やの巻のそ  
 ねと作者は  
 なれとも作  
 は殆んど類  
 是甚たと不  
 是甚たと不  
 是甚たと不

一一八 二句 (一葉集)

ひよろ／＼と猶露けしやをみなへし  
 芭蕉

一一九 半歌仙 (一葉集)

しら菊に高き鶏頭おそろしや  
 泥かぶりたる稻を干家根  
 月何日海なき國に旅ねして  
 笠に玉子をぬすむなりけり  
 ほつきりと折れておかしき雪の竹  
 はかま着ながら箒たばぬる  
 御内にて念佛申と名をいはれ  
 箒捨て行濱の海苔賣  
 左義長の火におどさるゝ在郷馬  
 かはら底に臙なる月  
 鶺鴒を片手に人を引ずりて  
 くらべまけたる名所の貝  
 香の香に物の調子や狂ふらん

杉 越 芭 苔 友 夕 依 泥  
 風 人 蕉 翠 五 菊 々 芹 人 風  
 蕉 人 風 依 五 依

一二〇 半歌仙 (一葉集)

小袖もれ出る翠簾のかさねめ  
 談義の場泣はふじゆ上る人さうな  
 うつくしい子の膝に眠りて  
 里遠き花の木陰に豆麩焼  
 くるふ胡蝶の編笠に入  
 月出は行燈けさむ坐しき哉  
 朝夕かゝる柴垣の櫪  
 此君と名をいふ竹の露落て  
 まづ片假名のいろは習ひに  
 南から聲に雨もつほとよぎす  
 よもぎをのぞく山の草かり  
 打くだく燧のかけのさびしくて  
 女房もどれば留主わたすなり  
 聲と物がたりする戀の友  
 瘡おさへてあかつきを泣  
 まだ止ぬ雪の戸明て怕とさよ

越 芭 友 夕 泥 依  
 人 翠 蕉 五 菊 芹 人 風

人 風 蕉 五 菊 芹 人 風

(一)行雁を秋季に用ひたり

さし残したる曲舞の章  
秋風や子を持ち身の哀より  
谷の庵のあたらしき月

行雁におくれて一羽残りけり  
沖に船見る敦盛の塚  
唐人の頭巾に花の散かゝり

醉て牛より落る春風

一一一 歌仙 (野)

深川の夜

鴈がねもしづかに聞ばからびずや  
酒しぬならふこの頃の月

藤ばかま誰窮屈にめでつらん  
理をはなれたる秋の夕ぐれ  
瓢箪の大きき五石ばかり也

風にふかれて歸る市人  
なに事も長安は是名利の地

醫のおほきこそ目ぐるほしけれ  
いそがしと師走の空に立出て

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

ひとり世話やく寺の跡とり  
此里に古き玄蕃の名をつたへ  
足駄はかせぬ雨のあけぼの  
きぬくやあまりかほそくあてやかに  
風ひきたまふ聲のうつくし  
手もつかず晝の御膳もすべりきぬ  
物いそくさき舟路なりけり  
月と花比良の高ねを北にして  
雲雀さえづるころの肌ぬぎ  
破れ戸の釘うち付る春の末  
見世はさびしき麥のひきはり  
家なくて服紗につゝむ十寸鏡  
ものおもひひる神子のものいひ  
人去ていまだ御坐の匂ひける  
初瀬にこもる堂の片隅  
ほとゝぎす鼠のある、最中に  
垣穂のさゝげ露はこぼれて  
あやにくに頬ふ妹が夕ながめ  
あの雲はたがなみだつゝむぞ

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

(一)「婆心録」に「居士や」とあり  
(二)「一三」蓮池の中の巻二ウ十句目に此句あり  
(三)「寛政七部集」に「法坐」とあるは誤なり

行月のうはの空にて消さうに  
砧も遠く鞍にいねぶり

秋の田をからせぬ公事の長びきて  
さいくながら文字間にくる  
いかめしく瓦庇の木薬屋

馳走する子の瘦てかひなき  
花の頃談義まゐりもうらやまし  
田にしを喰て腥きくち

一一二 歌仙 (葉集)

大通庵道圓追善

其かたち見ばや枯木の杖の長  
千鳥来て啼よし垣の池

簀作りみの作りさす雨止みて  
風のしきりにならす物の音  
内洞のくぼかなるより洩る月  
油單をかける蔦の紅葉々

包めどもやがて冷たる物くひて  
吾をおもはぬ家童子ども

芭 蕉 夕 苔 友 素 路 會

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

君は来て鴉の森を出るまで  
聲うつくしき念佛聞ゆる  
いつかはと央かたふく鳥の御所  
隣を起す雪のあけぼの  
藪の月風吹たびに影ほそく  
地に稻妻の種を蒔らん  
拾はれぬ金の氣ながら秋の来て  
無理に望みをかけし師の坊  
峰の供花の岩屋もつらからめ  
のぼる小鮎を汲ん谷川  
若き身の隠居と成て日は永し  
顔のほくろをくやむ乙の子  
舞衣をむなしく疊む箱の内  
猿は木末の松かさを打  
苔生し佛の膝を枕して  
夢とおもひて覺かぬる夢  
振袖にいつまで拜む月の影  
興じてぬすむ蘭の一株  
露深き無言の僧の戸を明て

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

(一)「西園集」に「蘭の」とあり

『同集』に『酒に名を』  
『同書』に『庭の砂かむ』  
『くみあぐる』  
『恐くは誤記』

『同集』に『機おる虫の聲澄て』  
『同集』に『曼のあくたを』

身の賣代を子に残しゆく  
泣顔をうつす鳥のわすれ水  
奈良にも恥ぢぬ脇師なるらん  
酒を名に付けては人に憎るゝ  
塵をも置ぬ庭の砂くひ  
くみあぐる御堂の朝時ほのかなり  
蚊にせゝられてかぶる笈摺  
清き地に骨を納る花のかけ  
春暮てゆく香の一時

一三三 歌仙 (一葉集)

雪の夜は竹馬の跡に我連よ  
花屋をとはん梅の早咲  
打渡す外面に酒の食干て  
鶴啼あはす族立の空  
轉びたる船の乗場に残る月  
火を焚窓をさし覗く秋  
てうく機おる虫の聲踏て  
朝日にむかひきるゝ珠数の緒

路 宗 友 芭 俗 曾 夕  
通 波 五 蕉 水 良 菊 水  
五 良 菊 五 通 蕉 良 水 通 五 蕉 水

生れ付見にくき人のうらやまし  
親にうらるゝ品もありけり  
世のさわぎ關もこさせぬ御調物  
蔓のあこたをあらす野鼠  
不二詣おひねたわらを草枕  
母の佛を假にあづかる  
産棚に白繪の桶を居並べ  
濁りをすます砂川の水  
夜もすがらつぶねは月につかはれて  
破れ扇の骨をつながん  
初秋はまだ帷子のけしきなり  
腹わづらひてにくむ喰もの  
さんといふ娘の顔の美しき  
いやしき家に積る文塚  
解分る垣ねに黄なる綿掛て  
うばより先に白髪おるさむ  
刈頃にいつかなるべき糯の稻  
嵐に月を吐出す雲  
秋山にあら山伏のいのる聲

良 通 波 五 蕉 水 五 通 蕉 菊 水 良 水 五 通 蕉 菊 水

こる人もなくこけし神の木  
打みだれ何をか蟻のいそがしき  
心をけししに入るかくれ家  
文字ひとつふしては習ふ腹の上  
まなこくじいてあはれ幾年  
俤を浮世袋に残しけり  
馬うりかへて酒ひらく家  
花に舞二男に名乗譲るらん  
貧にほこりし鍛冶の春風

一三四 歌仙 (一葉集)

雪毎に染たわむ住ひかな  
けぶらで寒し浦の鹽焼  
さまくの魚の心も年くれて  
はじめて鴈の北にむく顔  
のけぞりて峰の梅咲朝月夜  
瓢箪荷ふ春のあげまき  
一里は其時よりの神さびて  
尺とりて見む頼朝の釜

俗 路 芭 友 會 宗 嵐 雨  
水 通 蕉 五 良 波 竹 洞

からげたる書物を夜の舛枕  
かたぶく松に母の俤  
宿かりて此頃うつる三井の坊  
力もちするたはら一俵  
放されてねりかむ牛の夕涼み  
つかへに障る旅の稻妻  
西行の像を拜する浦の月  
誰か住らむ碑の銘の露  
若生を朽木の花に植そへて  
春の遊びに母衣かゝるらん  
飴賣の霞をわくる矢潮の里  
野火焚捨て道かはるなり  
後の世の罪とやならん毒ながし  
丸輪は落て青石の塔  
一かいの松うごくほど吹嵐  
むくろばかりを残す夕月  
秋寒くあはれと拾ふ虫のから  
瘦たる乳をしぼる露けさ  
とはぬ夜に膳さし入る蚊帳の内

夕 緑

蕉 絲 通 蕉 水 五 通 蕉 水 洞 良 通 絲 竹 五 良 水 竹 菊 絲 蕉

蛭が小島もなさけしるらん

其まゝに剝たる僧を師と頼む

生木を燃てあたる冬の日

かた／＼は袖なき衣にもる時雨

悴四五人ほえて苦しき

菅笠も哀に見ゆる熊野道

峰には猿の小猿手を引

優婆塞も花に心やうごくらん

麻の羽折につゝむ山吹

一二五 三十句 (一葉集)

皆拜め二見の七五三を年の暮

籬竹うたふ煤掃の風

鯛うる俵の小口解そめて

村の地取におこす鉄形

珍敷湯の湧出る峰の月

葉を巻松の霧に横たふ

霜置ぬ常盤の里の菊買に

立ならびたる家根の繩あみ

芭 岱 會 嵐 宗 路 友 泥

蕉 水 良 竹 波 通 五 芹

夕

菊 蕉 通 良 水 波 蕉 通 五 蕉 水 通

〔一〕「幽蘭集」に「籬竹はこぶ」

〔二〕「同書」に「葉をかへく」

〔三〕「幽蘭集」に「針の耳すの」

〔一〕此巻歌仙に二句不足せり。恐くは傳寫のうちに脱落せしならん

〔二〕尾張一の宮傳追祭の行事

〔三〕「俳諧集」及「袖草紙」に「念佛に瘦る」

連句集

一九九

ぬすみするさへ掟さだめし

甲斐信濃月をあらそふ濁り酒

突はづされてのぼる初鮒

元祿二年

一二六 三十四句 (若菜)

菟菟にけふは賣かつ若菜哉

吹揚らるゝ春の雪花

かへる鴨かへらぬ鴨もさはたちて

七耀山を出かゝる月

町作り栗の焦たる砂畑

露霜窪く溜る馬の血

坊主とも老ともいはす追立歩

土の餅つく神事おそろし

生簀に燃付く烟雨となり

日暮て残る袖が切りかけ

眞白な鹽なき飯をつき向て

なみだに顔をよこす眼薬

舌根の念佛を雇ふ居士衣

芭 嵐

蕉 雪 蕉 雪 蕉 雪 蕉 雪 蕉 雪

良 波 五

三味線を曉ごとにほつくと  
まくりて歸る榻のねむしろ  
茶ひとつの情を思ふ衛士が妻  
稻荷まゐりに縁かりし庵  
朝月の柱にかゝる作の面  
尊とや僧の施飯鬼よむ聲  
侍の身をかへよとや秋の蟬  
笈のうちにも夢は見へけり  
羊腸の道散埋む花の坂  
清水ほり出すきさらぎの雪  
蛙啼窓のあかりに舟よせて  
靨をほどく顔のけだかさ  
髪をれば國なつかしき須磨の寺  
花はさかりに茄子ちひさき  
男なき妹がすだれを守かねて  
涙火桶に鼻紙をほす  
老ぬれば針のみゝすの背けたる  
子ながら僧のはづかしきぞや  
賤の家に茶碗二は手を置ず

小城は稻の中につゝ立  
杖をうつ坐頭が碯上手なり  
みざりふびんやおば捨の月  
散花に垣根を穿ツ鼠宿  
かげろふ重き初の下敷  
身のうさも弟子の見纏に春たちて  
和泉のかつら桶の名を取  
柴垣のふるき都は破まさり  
讀もよんだり椎は黒石  
年寄の忍びてわせる秋の風  
髮切宵の月ぞひがめく  
長門より西の咄の根問して  
粥に玉子はなにと喰らん  
山茶花の後は水仙梅椿  
雪に鞍置くノ貫が馬  
やどりせん大江の岸は八間屋  
削りへらいた状態のふた  
御謀反も先調はぬ金の沙汰  
禰宜が袂に神も嘘つく

蕉 雪 蕉 雪 蕉 雪 蕉 雪 蕉 雪 蕉 雪

(一) 葉集に『物は』と誤る  
(二) 兩關『金關』に『只』とあり  
(三) 『誰こい』とある  
の次に『  
赤人も今一入  
の酒きけん  
土器臭き公家  
の振舞  
の二句を添  
る諸書あれど  
も從ふべから  
ず』  
(四) この卷諸書元  
祿四年とす  
今『兩關集』に  
よる  
(五) 『芭蕉翁俳諧  
集』等『塔山』  
を『前川』とす

連句集

花疊飽も物(二)を思ふらむ  
誰こい(三)と田鶴渡る春

二二七 歌仙 (一葉集)

衣装して梅あたらむる匂ひ哉  
蝶めづらしき入口の杉  
掃よせて消る雪をやかこふらむ  
石のくぼみに墨をすりけり  
月うつる臺の芒を踏敷て  
のたうつ猪の歸る芋畑  
賤の子が待戀ならふ秋の風  
茜染ほす窓のおもかけ  
あちきなく落殘たる國の脇  
寺の物かる罪の深さよ  
振あげて杖あてられぬ犬の聲  
響の利發を町にひろめん  
手作りの酒の辛みも付にけり  
月もこよひとみん驢馬の市  
狩衣を碯のぬしに打くれて

芭 路 晴 會  
通 蕉 良 山 通 良 山 良 蕉 通 山 蕉 通 山 良 通 蕉 良 山 良 通 蕉

わが雅名を君はおぼゆや  
花のかほ室のみなとに泣せけり  
古巢の鳩の子を持ぬ聲  
講堂に僧立ならぶ春の暮  
ながれにたてる悪水の札  
形代に生體著ならす注連の内  
こぼるゝ星の寒き霜風  
軒葺も哀なりけり不破の關  
植おくれたる田の中の小田  
ほとゝぎす瘦てや空に鳴つらん  
わが物おもひうき世一人  
此戀をいはんとすればどりにて  
打れて歸る中の戸の御簾  
柵に目をさすほどの夕月夜  
面のをかしき谷の鼻  
火を焚ば岩の洞にも冬籠り  
國を半に残す願禮  
おとろふる父の白髪を氣にかけて  
折にのせたる草の初物

入過てあまり芳野の花のおく  
何か何やら春のしら雲

二二八 歌仙 (雪の薄)

元祿二仲春  
かげろふの我肩に立かみこがな  
水やはらかにしり行おと  
袖の家うどのあへものあつらへて  
身はかりそめにさるのこしかけ  
いざよひもおなじ名所に歸りけり  
こゝろをかくす物うりの秋  
萩原は露にぬれても面白き  
ぶとふりはらふ供のたいまつ  
五月迄小袖のわたもぬきあへず  
おちたる髪をときそろへつゝ  
こひられてこふ人よりも物ぐるし  
ほそく書たるふみのやさしき  
盃をそこらにこたつ取まきて  
年寄一人目待つとむる

芭 會 晴 此  
蕉 良 山 良 蕉 良 筋 山 筋 蕉 山 蕉 良 筋 山 良 蕉 良 筋 山 良 蕉 良 筋 山 良 蕉 良

もの音もなつは夏をぞふきにける  
きりのたつたる其かげの家  
たびくるまあくするひがしは月と花  
なみはかすみのふじをうごかす  
客よびてしほひながらのいかなます  
いぬにおはるゝあちのむらどり  
城北のはつ雪はるゝみのぬぎて  
おきて火をふくかねつきが妻  
行歸りまよひ子よばる星月夜  
組てこかせば鹿驚なりけり  
やまかせにきびしく落る栗のいが  
黒木ふすべるたにかげの小屋  
たがよめと身をや任せむ物思ひ  
あら野のゆりになみだかけつゝ  
おほかみの番してあくる夏の月  
みつのいはやに佛つくりて  
萎まます諏訪のいで湯のにへかへり  
たび寐性たる關のうちもの  
何ゆへに人のじうさと身をさけて

膳にすはれば鯛のはまやき  
一門の花見衣のさまんゝに  
つたはる藤の筋のどかなり

一一九 二句 (いつを昔)

月花を雨の袂の色香かな  
蛙のからに身を入る聲

一二〇 歌仙 (雪丸け)

那須余瀧翠桃亭尋て  
秣おふ人を枝折の夏野かな  
青き覆盆子をこぼす稚の葉  
村雨に市のかりやを吹とりて  
町中を行川音の月

はし鷹を手に居ながら夕涼  
秋草畫く帷子はたそ

物いへば扇に顔を隠されて  
みだれた髪をつらき乗合

尋るに火を焚付る家もなし  
ぬす人こはき二十六の里

山の鯉竹  
松の根に笈をならべて年取ん  
雪かきわけて連歌始る  
名所のおかしき小野の炭依  
碯うたるゝ尼達の家

あのも戀ゆへにこそ悲しけれ

露とも消えぬ胸のいたきに  
錦繡の時めく花の憎かりし  
己が羽に乗る蝶の聲

日傘さす子供誘ふて春の庭  
衣を捨て軽き世の中

酒吞めば谷の朽木も佛なり  
狩人かへる組の松明

落武者の明日の道問ふ草枕  
森の透間に千木の片そぎ

日中の鐘つく頃に成にけり  
一釜の茶もかすり終りぬ

乞食ともしらで浮世のものがたり  
洞の地蔵にこもる有明

葛の葉は猿の涙や染つらん

蕉 桃 輪 良 里 輪 桃 良 蕉 里 輪 桃 良 蕉 桃 良 輪 桃 蕉

(一)陸奥衛に  
下らんとして  
野國まで旅立  
けるに那須の  
翠桃何某の住  
けるを尋て入  
深き野を分入  
る程道もまが  
ふばかり草ふ  
かければと  
前書あり  
(二)同書に『町  
の中行』に  
(三)同書に『鷹  
の子を手に居  
ながらきりぎ  
りす』  
(四)同に『萩の墨  
輪の縮細は  
誰の』  
(五)同に『ものい  
へば小笠に顔  
を押入る』  
(六)同に『二十六  
の里』  
(七)同に『雪にな  
るから』  
(八)同に『血相に  
て』  
(九)同に『錦繡に』  
(一〇)同に『蝶の小  
車』  
(一一)同に『子供す  
かして』  
(一二)同に『水こと  
の音』と御手洗

(一三)同に『一葉か  
する美濃の草  
長』

(一四)同に『冬を降  
る』

(一五)同に『殿付ら  
れて只のする  
舟、輪』

(一六)同に『奥すぢ  
も時はかはら  
ず杜宇』

(一七)同に『かまらず  
にのめと投る  
丸薬』

(一八)同に『花の宿  
馳走をせぬが  
馳走也、里』

(一九)同に『ふさぐ  
というて火燧  
其ま、翠桃』

(二〇)『一葉集』に  
『雁に屋根ふ  
く村ぞ』雁は  
『ゆい』なり

(二一)同に『山鳥の  
尾にく年や  
むかふらむ』

流人柴かる秋風の音

けふも又朝日を拜む石の上

米ときちらす瀧のしら浪

旗の手の雲かとみえて醜り

奥の風雅を物に書つく

珍らしき行脚を花に留置て

彌生くれける春のつこもり

一二二 二句 (雪丸け)

みちのく一見の桑門同行二人那須の篠原を  
尋ねて猶殺生石見んとこえける程に雨降け  
れば先此所に宿りて

落来るや高久の宿のほとゝぎす

一二三 歌仙 (奥の細道拾遺)

四月十二日  
奥州岩瀬郡相樂伊左衛門亭にて  
風流のはじめやおくの田植歌  
覆盆子を折て我まうけ草

連句集

里 蕉 寸 良 輪 鴉 里

二

秋

芭 蕉 良

會

芭 蕉 良

芭 蕉 良

芭 蕉 良

芭 蕉 良

芭 蕉 良

芭 蕉 良

水せきて晝寝の石や直すらん  
鐘に鉢の聲生かすなり  
一葉して月に益なき川柳  
雇うやねやむし村ぞ秋なる  
賤の女が上總念佛に茶を酌て  
世をたのしやと涼む敷物  
ある時は蟬にも夢の入りぬらむ  
樟の小枝に戀を隔てて  
うらみては嫁が昌の名も憎し  
霜降山や白髪おもかけ  
酒もりは軍を送る關に来て  
秋をしる身と物よみし僧  
更る夜の壁つき破る鹿の角  
鳥のお伽の泣みせる月  
いろ／＼の祈を花に籠りひて  
悲しき骨をつなぐ糸遊  
山鳥の尾に(飯不見)や結ぶらん  
芹堀ばかり清水つめたき  
薪ひく雪車一筋の跡ありて

會

良 蕉 輪 良 里 輪 桃 良 蕉 里 輪 桃 良 蕉 桃 良 輪 桃 蕉





〔一〕葉集「前書  
なし」

（二）出羽新庄風流亭にて

お尋の我宿せばし破蚊帳

はじめてかゝる風の薫物

菊作鉄に芒を折そへて

霧立かくす虹の本末

そゞろなる月に二里隔けり

馬市くれて駒むかへせむ

煤けたる父が弓矢を取傳へ

筆こゝろみて判を定める

梅かざすみきもやさしき唐瓶子

すだれをあけて通す乙鳥

三夜さ見る夢に古郷の思はれて

波の音きく鳥の墓原

雪降らぬ松はおのれと肥りけり

萩ふみしけるののしよの妻

行盡し月を燈の小社にて

疵あらはむと露そゞぐなり

散花の今は衣を着せ給へ

陽炎きゆる庭前の石

連句集

二〇六

たのしみと茶を挽せたる春の水

はてなき戀に長ささかやき

袖香爐けぶりは糸に立そひて

牡丹の雫風ほのかなり

老僧のいで小盃はじめんと

武士みだれ入東西の門

おのづから鹿も啼なるおくの原

羽織につゝむ茸狩の月

秋更て捨子にかさん菅の笠

うたひすませる美濃の谷汲

乗放す牛を尋る夕間暮

出城の裾に見ゆるかゞり火

奉る供御の香も疎にて

よごれて寒き彌宜の白張

ほりくし石のかる戸の崩れけり

しらざる山も雨のつれづれ

咲かゝる花を左りに袖敷きて

黄鳥うたひ胡蝶まふ宿

風

芭蕉

孤松

會良

柳風

執筆

流蕉

良流

如柳

木端

風柳

蕉柳

松端

端蕉

良蕉

一三八 三句 (雪丸け)

風流亭にて

水のおく氷室尋る柳かな

ひるがほかゝる橋のふせ芝

風わたる的の翦矢に鳩啼て

一三九 三句 (雪丸け)

盛信亭にて

風の香も雨にちかしもがみ川

小家の軒を洗ふ白雨

物もなく麓は霧に埋れて

一四〇 歌仙 (つなき橋)

すゞしさを我やどにしてねまる也

つねのかやりに草の葉を焚

鹿子立をのへの清水田にかけて

ゆふづきまろし二の丸の跡

楢紅葉人かげみえぬ笠のおと

連句集

風

流蕉

英流

蕉流

良流

蕉流

風蕉

英蕉

良蕉

風蕉

蕉蕉

良蕉

英蕉

風蕉

蕉蕉

二〇七

〔一〕葉集「に  
『草に』」

勅に來て六位涙にイみし

わかれをせむる炬の數

一さしは射向の袖をひるがへす

かはきつかれてみたらしの水

夕月夜宿とり貝も吹よはり

木賊かる男や餐わすれけん

たまさかに五穀の交る秋の露

篝に明る金山の神

行人の子をなす石に沓ぬれて

ものかきながす川上の家

追ふもうし花吸蟲の春ばかり

夜の嵐に巢をふせぐ鳥

一四一 歌仙 (つなきはし)

おきふしの麻にあらはす小家かな

狗ほえかゝるゆふだちの簑

ゆく翅いく度良のにくからん

石ふみかへす飛こえの月

露清き青花摘の朝もよひ

火の氣たえては秋をとよみぬ

この島に乞食せよとや捨つらん

雷きかぬ日は松のたねとる

立どまる鶴のから巢の霜さむく

わがのかるべき地を見置也

いさめても美女を愛する國有て

べにおしろいの市の争ひ

秀句には秋の千種のさまんに

碑に寝て象潟の月

籠むしろ船の中なるきりくす

東ね捨たる薪雨にほす

貧僧が花より後は人も來ず

灸すゑながら眠き春の夜

まつほどは足音なくて飛蛙

菅かりいれてせばき賤が家

果の日は梓にかたる哀さよ

今ぞうき世を鏡うりける

二の宮はやへの几帳にときめきて

鳥はなしやる月の十五夜

英良蕉風良英風蕉英良風蕉良英蕉風良英蕉風良英蕉風良英蕉風

舍利ひろふ津輕の秋の汐ひがた

椒懸る三の樟の木

つくくとはたちばかりに夫なくて

父が旅寢を泣あかすねや

うごかすも雲の遮る北のほし

けふも坐禪に登る石上

盗人の糞にすてる山がたな

築にかゝりし子の行へきく

繫ばし導く猿にまかすらん

けぶりともしき夜の詩のいへ

花とちる身は遺愛寺の鐘撞て

鳥の餌わたす春の山守

一四二 歌仙 (奥の細道拾遺)

山形町にて

さみだれを集めて早しもがみ川

螢をつなが岸の舟枕

瓜畑いさよふ空に影まちは

里をむかふに桑の細道

連句集

牛の子に心なくさむ夕まぐれ

雨雲重し懐の吟

佗笠を枕にたてゝ山おろし

松むすび置國の境目

永樂の古き寺領をいたゞきて

夢と合する大廳の紙

薫の名を曉とかこちたる

爪紅うつる双六の石

まき揚る簾に兒の這入て

頼ふ人に告る秋風

水かゆる井手の月こそ哀なれ

碇うちとてえらび出さるゝ

花の後花を織する花むしろ

涅槃いとなむ山陰の塔

穢多村は浮世の外春富て

かたながりする甲斐の一亂

葎垣人の通らぬ關所

物書たびに削る松の木

星祭る髪は白髪にかゝるまで

英良蕉風良英風蕉英良風蕉良英蕉風良英蕉風良英蕉風良英蕉風

(一)「葉集」前書  
行に「葉集」あり  
前書「大石田  
高野平左衛門  
亭にて」とあり  
紙今大石田に  
ありと  
(二)「葉集」等に  
「集めて涼し」  
をつなぐ  
(三)「葉集」に  
「枕に當て」  
(四)「葉集」に  
「星をむ  
かひに」と誤  
(五)「葉集」に  
「同に『姑うて  
とてえりて出  
さるゝ』」  
(六)「葉集」に  
「同『刀持する』」  
「白髪」にかゝる  
「まで」とあり

奥の細道拾遺に「名をとむる月」今一葉集に記す

「一葉集」に「魚日の鉦」

奥の細道拾遺に「最上川のほとり」榮子の宅に於て興行元祿二仲夏芭蕉庵桃青書

連句集

集に遊女の名をとむる月

鹿笛に貰ふておかし整足駄

柴賣に出て家路忘るゝ

合歡咲く木かけを晝のかけろひに

たえくならず千日の鐘

古郷の友かと跡をふりかへり

言葉論する舟の乗合

雪雲師走の市の名残とて

煤掃の日を草庵の客

亡人を古き懐紙にかぞへられ

やもめ鳥の迷ふ入相

ひらづみ型も越べき峰の花

山田の種をいはふむら雨

一四三 歌仙 (花摘)

有難や雪をめぐらす風の音

住ほど人のむすぶ夏草

川舟の綱に螢を引立て

鶴のとぶあとに見ゆる三日月

芭露會釣

蕉丸良雪

澄水に天をうかべる秋の暮  
北も雨もきぬた打けり  
眠ては晝の陰に笠ぬきて  
百里の旅を木曾の牛追  
山つくす心に城の記を書ん  
斧持すくむ神木の森  
歌よみの跡したひ行家なくて  
豆うたぬ夜は何と啼ク鬼  
古御所を寺になしたる檜はだ葺  
糸に立枝にさまの萩  
月見よと引起されて恥しき  
髪あふがする羅の露  
まつはるゝ犬のかざしに花折て  
的場の末に咲る山吹  
春を經し七ツの年の力石  
泣ていたゞく醒が井の水  
足引のこしかた迄もひねり衰  
敵の門に二夜ねにけり  
かき消る夢は野中の地蔵にて

梨珠

妙水雪蕉丸良雪丸蕉良水蕉丸雪良丸蕉丸入良丸

妻ごひするか山犬の聲

うす雪は椽のかれ葉の上寒く

湯の香はくもる旭淋しき

鬨の音を狩宿に矢をはきて

篠かけしぼる夜すがらの法

月山のあらしの風ぞ骨にしむ

鍛冶が火のこす電の影

ちるかひの梧に見付しこゝろふと

鳴子おどろく片藪の窓

盗につれそふ妹が身を泣て

祈も盡きぬ關の神

盃の肴に流す花の波

幕うちあぐる燕の舞

一四四 歌仙 (はっ茄子)

羽黒山を出 鶴が岡 重行亭

めづらしや山を出羽の初茄子

蟬に車の音添ふる井戸

絹機の暮いそがしう梭打て

芭重會

蕉丸良行

閨彌生のすゑの三日月  
吾顔に散りかゝりたる梨の花  
銘に胡蝶と付しさかづき  
山の端にきえかへり行く帆懸船  
藥なき里は心とまらず  
粟稗を日毎の齋に喰飽て  
弓のちからを祈る石の戸  
赤櫻を母の記念に植おかれ  
雀に残す小田の刈初  
此秋も門の板橋崩れけり  
赦免にもれて獨り見る月  
きぬは夜なべも同じ寺の鐘  
宿の女の妬き物かけ  
婿入の花見る馬に打群れて  
もとの廓は畑に焼ける  
金銀の春も一步にあらたまり  
奈良のみやこに豆腐始る  
此雪に先づあたれとや釜揚て  
寝巻ながらにけはひうつくし

呂

丸行蕉丸良丸蕉丸行丸良丸蕉丸行丸良丸蕉丸行丸良丸蕉丸

「一葉集」に「はじめる」

連句集



蟹の小舟をさせ上る磯  
鴉啼く向ふに山を見ざりけり  
松の木間より續く供やり  
夕嵐庭吹拂ふ石の塵  
鹽とりまく賤が行水  
思ひがけぬ算を傳ふ鳥ひとつ  
きぬくの場に起も直らず  
數くの恨の品の指つきて  
鏡にうつる我わらひ顔  
吹はなれ朝氣は月の色薄き  
鹿引こくる犬のにくさよ  
礮打つすべさへしらぬ墨衣  
たつた二人の山本の庵  
花の後其まゝ暮て星かぞふ  
蝶の羽をしむ蠟燭の影  
春雨は髮刺兒が涙にて  
香は色くくに人くくの文

一四九 二十六句 (金蘭集)

眠 此 布 石 執 義  
鴨 竹 囊 雪 筆 栗 良 年 蕉 栗 雪 年 良 蕉 雪 良

おなし所にて  
星今宵師に駒牽て止たし  
色香ばしき初刈の米  
さらし水跡に急く布つきて  
此間十句キレテシレズ  
秋風送る父が旅立  
かの巻を錦に包拾ふべし  
絶て續たる國の古堂  
種植て小枝に花の名を印  
雨のあがりの日は長閑なり  
糞を引雪車もおかしき雪の上  
一むらがらす人馴て飛ぶ  
金山や侘て小砂を拾ふらむ  
科のむかしを島蔭の庵  
憂事の百首に魚の名を讀て  
人聞しきとしのくれかな  
松柏荒て嵐の音すなり  
子を射させたる猪の床  
修行者の袂をぬらす硯水

右 芭 會 右 蕉 雪 良 也 右 蕉 雪 良 蕉 也 右 蕉 雪 良 蕉 雪 右

(一)「雪丸け」及「清水の流」に  
(二)「金蘭集」及「鎌倉ならふありて其下に」とありて其下に「懐紙のま」と附記せり  
(三)「雪丸け」及「花の實に入」に  
(四)「菅庵通稱昌庵又外庵、高田市の郊外、金谷山の麓、此堂の前に此堂の礎石あり、礎石を刻したる碑石あり、そを草枕芭蕉翁萩の庵を極めくる月、昌庵」とある由  
(五)「一葉集」に「みじかさま」  
(六)「一葉集」に「すき間さびしき」  
(七)「一葉集」其他諸書に「生長しも娘の恩」

往古の月山に開たし  
檜皮むく老の頭の秋寒く  
しぐれて露の深き牛部屋  
鹽漬の孤村の烟雲結ぶ  
清水に波の半淡しき  
かたぶきし地蔵の膝に石かいて  
笈を下せるさとの物蔭  
俳諧を尋て花の窓に入り  
身木を取まく梅の彦生  
懐紙杉原堅紙也曾良、金石斗符所持  
一五〇 四句 (雪丸け)  
細川青庵亭にて  
薬園にいづれの花を草枕  
萩の庵を揚かける月  
爐烟の夕を秋のいぶせて  
馬のりぬけし高藪の下

一五一 半歌仙 (花の故事)

芭 棟 更 會  
蕉 雪 也 良  
也 蕉 雪 良 右 也 雪 蕉 也  
良 蕉 雪 年 栗 鴨 雪 栗 蕉 年 良 蕉 雪 良

少刈庵にて  
殘暑しばし手毎にれうれ瓜茄子  
みじかさまたで秋の日の影  
月よりも行野の末に馬次て  
透間きびしき村の生垣  
鐵鍛冶の門をならべて樋の音  
小桶の清水結ぶ明くれ  
七つより生長せしも姉の恩  
鳥放ちやる西の栗原  
讀習ふ哥に道ある心地して  
ともし消れば雲に出る月  
肌寒み暖したる渡し守  
をのが立木にほし残る稻  
ふたつ家はわりなき中と縁組みて  
さどめ開ゆる國の境目  
糸かりて寐間に我ぬふ戀ごろも  
あしたふむべき遠山の雲  
草の戸の花にもうつす野老にて  
畑うつことも知らで幾はる

芭 一 左 ノ 竹 語 雲 乙 如 北 會 流  
蕉 泉 化 松 意 子 口 州 柳 枝 良 志 泉 蕉 枝 口 生 良

(八)『乙州』とあるは不審也  
 (九)『俳諧集』に『足駄』とあれど『明日』ならん

(一〇)『雪丸』に『観水亭雨中』と題して『濡れて行くや人もおかしき雨の萩』と發句のみを出せり『俳諧集』

『雨』は『折』十二句を擧げ作者名を芭蕉、子曾良、北枝、ト、康生、季色、祝三、夕市、蕉、格、蟻、枝、良、子、良、三とせり。生三とせり。句の異同は次に註す

右歌仙一折翁の直筆にて小春か末葉洪水所持す

一五二 四句 (一葉集)

翁を一夜とせめて

寐るまでの名残なりけり秋の蝸

あたら月夜の庇さしきる

初嵐山ある方のはげしくて

江ぶちのりこす水のさゝ魚

小春 芭蕉 良枝

目を経たる湯木の峰の幽なる

むら雨の古き鏡もちぎれたり

道の地藏に枕からばや

晚鐘に鴉の聲も啼まじり

歌をすゝむる牢輿の船

肌のきぬ女のかをりとまりけり

文ぬすまれて我うつゝなき

よりかゝる木より鳴出す蟬の聲

かみなり上る塔のふすぼり

世に住まば竹の柱も只四本

朝露きゆる鉢のあさがほ

夜もすがら虫には聲の嘔めなき

むかしを戀る月の御陵

散かゝる花に米搗里ちかき

離賣翁道たづねけり

蝶の羽や赤き袂に狂ふらん

芭蕉 觀生 良枝 芭蕉 清

一五四 五十韻 (一葉集)

七月廿六日觀生亭にて

ぬれてゆく人もおかしや雨の萩

芒がくれにすゝきふく家

月見とて漁にも出す船あけて

干ぬかたびらをまぢかねるなり

芭蕉 觀生 良枝 芭蕉 清

はしの上より投るさかづき

ひゞき來る木魚に心角折て

目鏡して見てすみ渡る月

道の名とぬす人の名は残る露

しかふみくづす石の唐櫃

野社は椽の實生のいくかゝえ

病ひの愈てありく初雪

一たびはむくひかへさむ扶持の禮

あながま鼠夜の戸障子

侘しさに心も狭き蚊帳釣て

かみきる所を夫はおさゆる

入山のいばらに落しうき涙

霜にさびしき猿の足跡

岩にたゞ粥たき捨し鍋ひとつ

甲は篋の中にかくれて

追割の碇をならす秋のくれ

月に起臥乞食の樂

長き夜に葦をつゞり居るなつかしき

翠簾に二人がかはるものごし

祈られてあら怖しと打倒れ

汗は手透に残る朝風

問丸の門より不二のうつくしく

鱗呼ころも都しづけき

長生は殊更君の恩深き

賤が袴はやれるともなき

初花は萬歳歸る時なれや

酒にいさめる宿の山ぶき

一五五 世吉 (一葉集)

しほらしき名や小松吹く萩芒

露を見知りて影うつす月

踊る音さびしき秋の數ならん

よしの編戸を問ぬ夕ぐれ

しら雪や足駄ながらもまだ深き

あらしにのりし鴉一むれ

浪あらし磯にあげたる矢を拾ひ

雨に洲崎の岩をうしなふ

鳥居たつ松よりおくに火は遠し

良枝 芭蕉 生枝 良枝 芭蕉 生枝 良枝 芭蕉

芭蕉 鼓北 斧塵 志夕 致觀 生益

(一〇)『金蘭集』に『なつかしき』

(六)本より降出す

(七)柱も三四本

又『柱も二三本』

(八)『聲のかれめなき』

乞食起して物喰はせける  
際きざのゆきては笠に落かへり

茶をもむ頃やいと夏の日

夕雨のすゝ懸か乾かに舎りけり

子をほめつゝも難少しいふ

侍の思ふべきこそいのちなれ

そろ盤習ふ末の世となる

洞にさす月まで豊の光りして

皮はた粟をたいて味ふ

朝露も狸の床やかかく覽

帯解かけてはしる馬追

麓より花に庵を結びかへ

ぬるむ清水に洗ふ黒米

春霞はる槍捨橋やぶに入立て

かたちばかりに蛙聲なき

一棒に打れて拜む三日の月

秋の霜をく我眉のいろ

富とみながらくらじ八が袖の良寒く

戀によせたる蟲くらべ見む

會

良

枝

ト

翁

枝

蟾

觀

格

市

益

生

良

格

枝

市

蕉

蟾

生

わすれ草しのぶのみだれ植まぜに

疊かさねし御所の板敷

頭陀よりも歌取出し奉る

最期のさまの仕方ゆゝしき

闇明て互の顔はしれにけり

聲さまざまのほどのせはしも

大かたは持たる金につかはるゝ

庵より見ゆる町のしら壁

風送る鼓聞えて涼しやな

若衆ともいふ女ともいふ

古き文筆のたてども愛らしき

なげの情に罰やあたらむ

しどろにもかたしく琴を掻鳴し

花に暮して盃を友

鶯の聲も筋よき處あり

うらゝゝや近き江の山

あなむざんやな曹の下のきりくす

觀

枝

良

蕉

觀

蕉

益

ト

蕉

市

蟾

益

觀

良

枝

蕉

享

鼓

子

蟾

蕉

子

蟾

蕉

子

蟾

蕉

子

蟾

蕉

子

蟾

蕉

子

うつくしき佛を御所に賜て

つゞけてかちし園基の仕合

暮かけて年の餅搗いそがしき

蕉ひくなる志賀の古里

しら／＼と明る夜明の犬の聲

舍利を唱ふる陵の坊

竹ひねて割し算の岩根水

本家の早苗もらふ百姓

朝の月園車に赤子をゆすり捨て

討敵の繪圖はうき秋

良寒く行は筑紫の船に酔

守の館にて簾かりて頼

十重二十重花のかけ有午時の庭

杉菜一荷をわける里人

鳩の来て天窓にとまる世の長閑

馳走の雑煮はこぶ神垣

一五七 歌仙 (卯辰集)

元祿二の秋翁をおくりて山中

温泉に遊ぶ三雨吟

子 蕉 蟾 子 蕉 蟾 子 蕉 蟾 子 蕉 蟾 子 蕉 蟾

くはらばしりか

ちからも枯し霜の秋草

渡し守綱よる丘の月かげに

しばし住べき屋しき見立る

酒肴片手に雪の傘さして

ひそかにひらく大年の梅

遺水や二日なぐるゝ煤のいろ

音問る油隣はづかし

初戀に文書すべもたど／＼し

世につかはれて僧のなまめく

提灯を湯女にあづけるむつましき

玉子貰ふて戻る山もと

柴の戸は納豆たゝく頃こ静なり

朝露ながら竹輪きる藪

鴨落す人は二十にみたぬ顔

よせて舟かす月の川端

鍋持ぬ芦屋は花もなかりけり

去年の軍の骨は白暴

やぶ入の嫁や送らむけふの雨

霞にほひの髪洗ふころ

連句集

（二）指月の「山中集」に芭蕉加筆のまゝの詠草を摸刻せるものあり

連句集

馬かりて燕追行わかれかな  
花野みだるゝ山の曲め  
月よしと相撲に袴踏ぬぎて  
鞘ばしりしをやがてとめけり  
青淵に獺の飛込水の音  
柴かりこかす峰の笹道  
霰降左の山は音の寺  
遊女四五人田舎わたらひ  
落書に戀しき君が名も有て  
髪はそらねど魚くはぬ也  
蓮の糸とるも中／＼罪ふかき  
先祖の貧をつたへたる門  
有明の祭りの上坐かたくなに  
露まづ拂ふ獵の弓竹  
秋風は物いはぬ子も涙にて  
白きたもとの續く葬禮  
花の香は古き都の町造り  
春をのこせる玄仍の箱  
長閑さやしらゝ難波の貝づくし

芭會北

枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良

銀の小鍋に出す芹焼  
手枕にしとねのほこり打拂  
美しかれとのぞく覆面  
つき小袖 蕉賣の古風也  
非蔵人なるひとの菊畑  
鳴ふたつ臺にすへても淋しさよ  
あはれに作る三ヶ月の脇  
初發心草の枕に修行して  
小畑も近く伊勢の神風  
抱瘡は桑名日永もはやり過  
雨晴くもり枇杷つはる也  
細長き仙女の姿たをやかに  
あかねをしぼる水の白浪  
仲綱が宇治の綱代と打詠  
寺に使を立る口上  
鐘ついで遊ん花のちりかゝる  
醉狂人と彌生暮行

一五八 二句 (卯辰集)

執  
筆 蕉、枝、蕉、枝、蕉、枝、蕉 枝 蕉 良

（一）葉集に『かたくなし』

（三）葉集に、『わかれかな』  
（四）葉集に、『わかれかな』  
（五）葉集に、『わかれかな』  
（六）葉集に、『わかれかな』  
（七）葉集に、『わかれかな』  
（八）葉集に、『わかれかな』  
（九）葉集に、『わかれかな』  
（十）葉集に、『わかれかな』  
（十一）葉集に、『わかれかな』  
（十二）葉集に、『わかれかな』  
（十三）葉集に、『わかれかな』  
（十四）葉集に、『わかれかな』  
（十五）葉集に、『わかれかな』  
（十六）葉集に、『わかれかな』  
（十七）葉集に、『わかれかな』  
（十八）葉集に、『わかれかな』  
（十九）葉集に、『わかれかな』  
（二十）葉集に、『わかれかな』  
（二十一）葉集に、『わかれかな』  
（二十二）葉集に、『わかれかな』  
（二十三）葉集に、『わかれかな』  
（二十四）葉集に、『わかれかな』  
（二十五）葉集に、『わかれかな』  
（二十六）葉集に、『わかれかな』  
（二十七）葉集に、『わかれかな』  
（二十八）葉集に、『わかれかな』  
（二十九）葉集に、『わかれかな』  
（三十）葉集に、『わかれかな』  
（三十一）葉集に、『わかれかな』  
（三十二）葉集に、『わかれかな』  
（三十三）葉集に、『わかれかな』  
（三十四）葉集に、『わかれかな』  
（三十五）葉集に、『わかれかな』  
（三十六）葉集に、『わかれかな』  
（三十七）葉集に、『わかれかな』  
（三十八）葉集に、『わかれかな』  
（三十九）葉集に、『わかれかな』  
（四十）葉集に、『わかれかな』  
（四十一）葉集に、『わかれかな』  
（四十二）葉集に、『わかれかな』  
（四十三）葉集に、『わかれかな』  
（四十四）葉集に、『わかれかな』  
（四十五）葉集に、『わかれかな』  
（四十六）葉集に、『わかれかな』  
（四十七）葉集に、『わかれかな』  
（四十八）葉集に、『わかれかな』  
（四十九）葉集に、『わかれかな』  
（五十）葉集に、『わかれかな』

一五九 半歌仙 (一葉集)

九月三日落着の夜  
野あらしに鳩吹立る行脚哉  
山にわかるゝ日を萩の露  
初月や先西窓をはづすらん  
波の音すく人もありけり  
木を挽て枕のたねとこゝろざし  
酒のさかなに出す干瓜  
おのづから隣の松をながむらん  
過なきあやしむものゝふ  
いとほしき人の文さへ引さきて  
般若の面をおもかげに泣  
まつよひの鎌をやよそに忍らし  
藥たづぬる月のさむしろ  
薄着して碇きくこそ苦しけれ

北芭

枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良

網代の鮭を市のむさぼり  
舟の形處によりてかはりけり  
上藤たちも旅のさがなき  
花の雪吹宮の長橋ひとりづゝ  
欲に見ておく岨の山ぶき

一六〇 歌仙 (一葉集)

はやく咲九日も近し宿の菊  
こゝろうきたつ宵月の露  
新ばたけ去年の鶉の鳴出て  
雲うす／＼と山のかさなり  
酒飲の癖に障子を明たがる  
猶おかしくも文をくるはす  
足のうら撫て眠をすゝめけり  
年を問れてふすまかぶりぬ  
二人めの妻に心や解ぬらむ  
けづり蟹に精進わするゝ  
兎角して灸する坐をのがれ出  
書物のうちの紙魚はらひ捨

芭 左 路 文 越 如 荊 此 木 殘 會 斜  
蕉 柳 通 鳥 人 行 口 筋 因 香 良 嶺

連句集



飽はてし旅もこのころ戀しくて

齒ぬけとなれば貝も吹れず

月寒く頭巾あぶりてかぶるなり

あかつき替る宵の分別

一棒にあづかる山の花咲て

鹽すくひこむ春の糠みそ

萬歳の姿ばかりはいかめしく

村はづれまで犬におはるゝ

嘶きく行脚の道のおもしろや

二代上手の醫はなかりけり

揚弓の工みするほどむづかしき

ゑぼしかゝらぬ髪も薄くて

冬籠ものおぼえての大雪に

茶の立やうも不案内なる

美しく顔生れつく物うさよ

尼になるべき宵のきぬぐゝ

月影に具足とやらをすかし見て

萩とぞおもふ一株の萩

何事も盆を仕舞て隙になる

追手も連にさそふ參宮

丸腰に捨て中々暮しよき

物のわけしる母の尊さ

花のかけ鎌倉殿の艸まくら

梅山ぶきに殘るつぎ歌

一六一 歌仙 (芭蕉林)

九月八日

一泊り見かはる萩の枕かな

むしの侘音を薄縁の下

紙子もむ夕べながらに月澄て

あらしにたわむ笹のこまかさ

植木屋は植木に軒を隠すらむ

食のすゝまぬ事は覺えず

肌ぬぎて人に見せたる夕間暮

兒そゝのかす時のおかしさ

薫の煙りに染し破れ御簾

ほそき聲してぬき茶呼入れ

蔭に雀のさむくりにけり

良香因行嶺

路

蘭

白

殘

芭

會

木

通夕之良夜 通夕良夜 通夕良夜 通夕良夜

柳蕉鳥口通因人通嶺因人通口鳥蕉柳

月見ありきし旅の装束

さまぐの貝拾ふたる布袋

地獄繪をかく様のあはれさ

きぬぐのしり目に鐘を恨らむ

賤が垣根になやむおもかけ

豆腐ひく音さへきかぬ里の花

鳥の巢もと住みあらず庵

きさらぎや落行く甲おもたくて

あらしに光る宵の明星

管まくり舟に米つむかしましく

此ごろ室に身を賣られたる

文書てたのむ便りの鏡とき

旅から旅へ思ひ立ちぬる

たふとさは熊野參りの咄して

薬手づから人にほどこす

田を買うて侘しうもなき桑門

大吠えかゝる森の入口

夕月夜爰をうしろにつきはりて

そろ／＼寒き秋の炭焼

谷越しに新酒のめと呼ぶなり

はや辻堂のかるき棟上

打むれてえやみを送る朝ぼらけ

麥もかじけて春□□□

鷹すゑて近ふめさるゝ花造り

胡蝶みだるゝさかづきの陰

一六二 二句 (一葉集)

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

たねはさびしき茄子一もと

一六三 二句 (笈日記)

おなし頃舟にて送るとて

秋の暮行先／＼の管屋哉

萩にねやうか萩に寐うか

一六四 歌仙 (多胡碑集)

元禄二年霜月朔日於良品亭 誹諧歌仙

いざ子供はしりありかん玉霰

夕通之蕉筆 夕通之蕉筆 夕通之蕉筆 夕通之蕉筆

芭蕉林に、元禄二年九月八日祖翁は伊賀の上野の何かしの歌仙ありて翌の日は遷宮を拜み給はむとてはまぐりの二見と聞えしも此折からにや伊賀に行きたる事實なく又作者も伊賀の人々にあらざらん

月見ありきし旅の装束  
さまぐの貝拾ふたる布袋  
地獄繪をかく様のあはれさ  
きぬぐのしり目に鐘を恨らむ  
賤が垣根になやむおもかけ  
豆腐ひく音さへきかぬ里の花  
鳥の巢もと住みあらず庵  
きさらぎや落行く甲おもたくて  
あらしに光る宵の明星  
管まくり舟に米つむかしましく  
此ごろ室に身を賣られたる  
文書てたのむ便りの鏡とき  
旅から旅へ思ひ立ちぬる  
たふとさは熊野參りの咄して  
薬手づから人にほどこす  
田を買うて侘しうもなき桑門  
大吠えかゝる森の入口  
夕月夜爰をうしろにつきはりて  
そろ／＼寒き秋の炭焼

〔多胡神集〕に  
「居住居」とあ  
れど今「一葉  
集」に従ふ

〔一葉集〕に、  
「傍輩連」に、

〔一葉集〕に、  
「道すべ」るる

折敷にさぶき椿水仙

羽箭の風やむ跡に軸巻て

居相撲はじむ月のさむしろ

鹿の聲響のかり着の哀なる

さら／＼落る峯の團栗

銀頭の愛なき窓に打折て

物くふうちの蠅のくるしき

常ながら鬚斗干わびる海士が妻

つかれたすけよ雨の手枕

曇紙しのび／＼に涙かみて

はかまもとらではや別れけり

馬の音傍輩達のとりの／＼に

月入かゝる不二のいたゞき

秋風のすだれふるへば雲出て

簫によりける藪の山雀

へし折ば零にぬれる花の笠

羽織揃へて春の参宮

鉄立て耕す肩を打やすめ

首のはげたる頼朝の鶴

良 梢 之 土 半

品 風 燕 芳 残 品 蕉 風 残 芳 蕉 風 残 品 蕉 風 残

初雪にまづ下の句を出しけり

いふことおほし奥州の客

苔生し君の卒都婆に泣こがれ

林はづれに結ぶ柴の戸

寝る時も馴れば安き瀧の音

風雅仕上し酒のみの弟子

世の中は機嫌かひなる旅衣

よき石見れば佛きりたく

琉璃燈は月をくゞりしごとくなり

僧の髮剃盆の夕ぐれ

をみなへしなまめくなりと踏敷て

兎かゝれと畔に網はる

生れ来て煙草のまぬも氣の樂か

白髪ながらに初子かゝへる

左義長のあたゝかさより花を待

ながるゝ雪に道すべる園

一六五 五十韻 (俳諧集)

曉や雪をすきぬく藪の月

風 園

蕉 品 燕 風 残 品 蕉 芳 風 燕 品 蕉 残 品 蕉 風 残

〔俳諧集〕「配  
刀」とあれど  
今「一葉集」に  
従ふ  
〔一葉集〕に、  
「銀頭の重」  
〔一葉集〕に、  
「女咳する」  
〔一葉集〕に、  
「鳴つらん」

けぶりを作る櫛のけだもの

厩よむ人なき里も安く居て

かはり牡丹の名を廣めけり

猷々に聞することの上手なる

扇の角をつぶす舞まひ

春にあふ蒔繪の鞘をさげ帯に

はつ神鳴に將監が裳

馬の鞍ふまへて手折るさくら花

おこせを出す注連繩のかげ

伊勢の海よこれ素襖を打すゝぎ

敵の首を送る古郷

村人は關の筵にこゝなりて

鯖江門徒を尊がりけり

造り出すことしの酒も甘口に

月も名残のやゝ寒きあし

妹がりや溝に穂蓼の生茂り

ふみ書ちらす庭の芭蕉葉

それ／＼の樂の衣裝を脱捨て

出しかけたる餓頭の汁

梅 半 土 良 風 芭 木 配

額 残 芳 品 蕉 風 残 品 蕉 風 残 品 蕉 風 残 品 蕉 風 残

この花に瀧を登るも今はじめ

肩に持ぬる供のさわらび

残る雪男に見せむ里がくれ

放て犬の跡を追來る

葬禮にしをるゝ馬の哀也

女咳たる竹の戸のうち

後朝の亥の子の餅を配るとて

背中寒く頭うちける

しぐれたる旅の巾着たよりなき

手をひかへみる猿澤の魚

哥よめと皆／＼鳥帽子かたぶけて

なみだもろしや賤が黛

七夕にうきをかしたる染ぶくさ

家賣て世はあちきなき月

柿の木の枝もたわゝに實を持って

飛てすさまじ名や紅葉鳥

修行者の踏迷ひたる峯づたひ

北斗の星をつゝむ村雲

鷹の爪あかゞり寒く鳴ぬらん

白 額 風 麥 芳 品 蕉 風 残 品 蕉 風 残 品 蕉 風 残

松は一本山の神々

乞食して花に巻する薦すだれ

雉子／＼遊そこはいことなき

春雨にほろ／＼酔のをかしくて

思はぬかたの歎冬をつむ

このごろは火を焚習ふひとりすみ

家ぬしが来て琵琶の名をとふ

引かつぐ葛蒲の階子おもたげに

目の塵拭て貰ふ夕ぐれ

月の前しかみし顔もうつくしき

礎うち／＼戀のいさかひ

一六六 歌仙 (一葉集)

霜に今ゆくや北斗の星の前

笛の音氷るあかつきの橋

一つがひ鶴の來て寝る松ふりて

間ばらに菊し田面はるけし

盃の名をあらためん暮の月

阿おし強き露の衣手

百 式 芭 夢 村 槐  
歳 之 蕉 牛 鼓 市

若殿のすだれの中の大わらひ  
奈良の小彌宜も宿に下りし  
提灯を燈せといひし鐘の音  
紙子羽折を少しにほはせ  
浦／＼を見にゆく人へ物書て  
古き名染の家をしへけり  
有明の飼おく鴨に餌をかはせ  
しつくりしたる青山の秋  
手習の衣を礎に打せける  
瓶子にそへて出すしらす糸  
杖突て上れば坊が花の場  
空あたゝかにつとめ怠る  
春の來て猿に小唄を舞せけり  
みすの屏風に畫く唐獅子  
佛に打かさしたるから團扇  
夜着のうつり香風にしらるゝ  
はら／＼とあられの音の過る也  
むらがる雀藪くゞりゆく  
柴うりの市の歸に酒買て

梅

額 蕉 牛 之 鼓 市 額 歳 額 之 蕉 鼓 市 額 歳 額 之 蕉 鼓 市 額

〔一〕佛語集に、  
〔二〕霜下り行や、  
〔三〕袖草紙に、  
〔四〕初霜に行や、  
〔五〕壬生山家二に  
〔六〕鴨金蘭集に  
〔七〕鴨二題

〔一〕何袋にこの  
卷の懷紙を模  
刺す元禄三  
年二月六日、  
講語之連歌  
と二行に端作  
りあり

明日の鐘鐺の月もはれたり  
稻安に舟こぎ習ふわたし守

露に消ばや着ものゝ紋

子供等が傳る家をあらそひて

千木のひまより下す棟札

狩衣の下知のえぼしを傾けし

幕をしぼればみな箸をとる

雞のうたふも花の晝なれや

畑打跡にもゆる陽炎

初春の射場やあらむと弓提て

鐙に付るすみれ一ふさ

◎元禄三年

一六七 歌仙 (何袋)

黄鳥の笠落したる椿かな

古井の蛙草に入聲

陽炎の消さま見たる夕影に

指さすかたに月ひびむ也

梢なる隣の柿をからすらむ

連句集

桃 乍 百 村 式  
青 木 歳 鼓 之

きびを吹折風のあらさよ  
佗しらに牛の子にがす朝ぼらけ  
世を土なべといのちなりけり  
佛に妹が袷をうへに着て  
夢さへ酒に二日酔する  
古郷をわすれぬ馬にほく／＼と  
はへて程なき月の花蕎麥  
住持なき庭に木の實の落るをと  
鳩吹人のなり窄き也  
給物は麓の市にはし賣て  
機嫌にむけば幸若の舞  
孫曾孫うちならべたる花のかけ  
藤むらさきにさま／＼の蝶  
春の色新古今こそあはれなれ  
尾上をへだつ木魚はかなき  
むら雨の笠きぬ程に降過て  
桑も早苗も一度成けり  
ゆるされて流され人の立かへり  
泣てゐる子のかほのきたなさ

吳

梅 一 槐

額 蕉 牛 之 鼓 市 額 歳 額 之 蕉 鼓 市 額 歳 額 之 蕉 鼓 市 額

宿かして米搗程は火も焼ず

脚氣を侘て膏藥をはる

大内に井戸ほりを召す秋のくれ

地震にころぶ松の下露

有明に母の里より文をこし

形見にびんを殘す陸奥

掛香を小袖のふりに縫ふくみ

三味線引てならぶ乞食

東山中にもはなは清水寺

げにのどかなる智恩院のかね

連哥師の杖をわするゝ春の空

すいかむたゝむ庭の若草

一六八 二句 (笈日記)

時雨てや花迄殘るひの木笠

宿なき蝶をとむる若草

一六九 歌仙 (己が光)

午年伊賀の山中

芭蕉 その女

種芋や花のさかりに賣ありく

こたつふさげば風かはる也

酒好のかしらも結す春暮て

ぬきかへがたき革の衣手

有明の七ツ起なる薬院に

ひさごの札を付わたしけり

秋風に楨の戸こちる膝入て

小僧のくせに口ごたへする

やすくと矢州の河原のかち渉り

多賀の杓子もいつのことぶき

手枕のおとこも持たて三つ輪組

人にとりつく憂名くちおし

萱草の色もかはらぬ戀をして

秋たつ蟬の啼しにけり

月暮て石屋根まくる風の音

こぼれて青き藍瓶の露

隣の花の手際に咲そめて

細や鳴来る水のかはりめ

芭蕉 半土良

蕉 殘 芳 品 蕉 殘 品 芳 殘 蕉 芳 品 蕉 殘 品 芳 殘 蕉 芳 品 蕉 殘 品 芳 殘 蕉

猫の目の六ツ梯核に四ツ圓く

あすのもよひの織羅菊きる

からうすも病人あればかさぬ也

たゞさゝやいて出る髪ゆひ

とりくゝに紺屋の形を取散し

冬至の縁に物おもひます

けはへどもよそへども君かへりみず

まだ元服のあどなかりける

朝夕にきらひの多き膳まはり

いとあはれなる野々宮の衆

田鼠の稻はみあらず月澄て

風ひえそむる牛の子の旅

露しぐれ越のさきおり袖もなし

しなすば人の何に成べき

神風や吹起されてかい覺ぬ

筆をおとせば□□出す

しら／＼とひとへの花に指むかひ

長閑き晝の太鼓うちけり

連句集

一七〇 歌仙 (資虫庵小集)

木のもとに汗も鱧もさくら哉

明日来る人はくやしがる春

蝶蜂を愛するほどのなさけにて

水のにほひをわづらひにける

くさまくらこのごろになき月のはれ

猿のなみだかおつる椎の實

石だんの織目も見えずこけのつゆ

顔よごれたる賤の子ども等

はうぐはんの烏帽子ほしやとおもふらむ

木幡あたりのゆきのゆふぐれ

賣座を見せむと人のみちびきて

井戸のはたなるいぶききるなり

涼しさのはだかになりて月をまつ

むしろをたてにはしり飛せる

寝てゐたかかしく犬の尾をすゑて

神事見たつる脇母子が太刀

まんちうの紅つけちらす花ざかり

二二九

半

蕉 麥 芳 品 蕉 殘 品 芳 殘 蕉 麥 芳 品 蕉 殘 品 芳 殘 蕉 麥 芳 品 蕉 殘 品 芳 殘 蕉

(一) 園女亭にて、  
梅のゆかし北の  
詠めるに芭蕉が  
句に又芭蕉の  
也聽せるもの  
「葉集」に、  
「花まては時  
雨て残れひの  
木笠」とあり  
「葉集」  
の鳴来る

(二) 原本二字不明  
「葉集」  
「葉集」  
「金  
鳴  
出  
す」

〔一葉集〕に  
〔廿七日〕と  
あり又作者類  
芭蕉、風澤、  
良品、土芳、半  
殘」とあり誤  
寫多しと考  
るにより一々  
照校せず

〔十丈園筆記〕  
「顔かゝれた  
る」  
〔一葉集〕に、  
「鳥羽田あた  
り」  
〔十丈園筆記〕  
「白横」「一葉  
集」「いぶき」

〔十丈園筆記〕  
「一葉集」共に  
「館」  
〔一葉集〕に、  
「饅頭に」  
〔同〕に「長閑  
き」  
〔同〕に「長閑  
字不明」十  
丈園筆記に  
「落ころびた  
る」一葉集  
に「荷ひませ  
たる番匠が五  
器」  
〔十丈園筆記〕  
に「打采て」  
「一葉集」に  
「打のべて」  
〔十丈園筆記〕  
に「氣重に」  
〔七〕「一葉集」に、  
「はづる」  
〔八〕同「捉て」  
〔十丈園筆記〕  
に「より道」  
〔九〕十丈園筆記  
に「踏で泣出  
し」  
〔十丈園筆記〕  
に「坊はるす  
佛はふるく」  
〔一葉集〕に、  
「房の留主佛  
は石炭に」

日永き空に二日酔さけ  
陽炎のみぎりに榻をひきすられ  
すげなくせいのたかさげ髪  
しのぶ夜の蠟燭おとす橋のもと  
ひとへのきぬに蚤うつりけり  
賤が家もかひこしまへば廣くなり  
またあたらしき妻うたをきく  
御佛につかゆる日よりまづしくて  
源氏をうつす手はさがりつゝ  
ひちりきの音をふきいれるよもすがら  
燕子樓のうち火の氣たえたり  
ゆふ月を扇に繪がく秋の風  
露こひしがる人はみのむし  
しらぎくの花の弟と名をつけて  
能見にゆかん日よりよければ  
乗いるゝ二歳の駒をなでさすり  
彌書さへならぬ老の身  
降かゝる花になみだもこぼれずや  
雉やかましく家居しにけり

芳 麥 品 蘭 洞 蕉 殘 芳 麥 殘 芳 麥 品 蘭 洞 品 蕉 蘭

一七一 四十句 (花はさくら)  
元祿三年三月二日  
俳諧之連歌  
木の下に汁も餡もさくら哉  
聖來る人はくやしがる春  
蝶蜂を愛する程の情にて  
水のにほひをわづらひにける  
草枕此のごろになき月の晴  
猿のなみだか落る椎の實  
石壇の欄目も見へず苔の露  
顔よごれたる賤の子供等  
判官のえぼしほしやと思ふらん  
木幡あたりの雪の夕ぐれ  
賣庵を見せんと人の道びきて  
井戸の端なるゆふき伐也  
すゞしさの裸に成て月を待  
蕙をたてにはしり飛する  
寝て居るかおかしく犬の尾をすへて

芭 風 良 土 雷  
蕉 麥 品 芳 洞 蕉 麥 品 芳 洞 蕉 麥 品 蕉 麥

神事見たつるわきも子がたち  
饅頭の紅粉つけちらす花ざかり  
日ながき空に二日酔さけ  
鐘かすむ喰さき紙を飛ばきて  
荷ひ□たる番匠のごき  
何事にいそぐめくらのひづむらん  
かざす扇のかなめはしりし  
おかしさは鼓の拍子打のつて  
氣おもく見ゆる脇息の上  
かけがねのひとりはずれし夕嵐  
香ひしみたる狎の首たま  
はり道を傘さしてひとひつき  
飯のこはきを好れにけり  
月影に燈籠張て泣暮し  
髪筋よりもほそき秋風  
鶴の夢すゝきの中にまどろみて  
冬のかゞしの弓を失ふ  
房は留主佛はうににふすぼりし  
けやき棋盤の板の薄さよ

半 蘭 三 芳 麥 蕉 芳 洞 麥 品 蘭 白 品 芳 蘭 洞 白 麥

老ながら廿日鼠の哀にて  
石菖青く目を覺しつゝ  
着かゆれば染ものくさき單物  
おくの坐敷へ膳すゆるなり  
花あればいやしき家にとゞめられ  
終に出来たる燕の土  
木白あとよりきたりければ興に乗じて付延し  
侍るされどとり鐘に筆をとゞむ  
一七二 歌仙 (ひさご)  
花見  
木のもとに汁も餡も櫻かな  
西日のどかによき天氣なり  
旅人の風かき行春暮て  
はきも習はぬ太刀の鞘  
月待て假の内裡の司召  
親白つくる袖がはやわさ  
鞍置る三歳駒に秋の來て  
名はさまんに降替る雨

殘 品 蕉 芳 蘭 洞 蕉 品 芳 洞 蕉 品 蕉 麥 品 蕉 麥

(一) 葉集に『老けるあはれさ』  
(二) 同『覺しぬる』  
(三) 同『むさき家にも』  
(四) 葉集に『元祿庚午の春も樹もさくら』  
(五) 折句は『大に異なり』  
(六) 折句は『大に異なり』  
(七) 折句は『大に異なり』  
(八) 折句は『大に異なり』  
(九) 折句は『大に異なり』  
(十) 折句は『大に異なり』

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮  
中にもせいの高き山伏  
いふ事を唯一方へ落しけり  
ほそき筋より戀つものりつゝ  
物おもふ身にも喰へとせつかれて  
月見る顔の袖おもき露  
秋風の船をこはがる浪の音  
雁ゆくかたや白子若松  
千部讀花の盛の一身田  
順禮死ぬる道のかげろふ  
何よりも蝶の現ぞあはれなる  
文書ほどの力さへなき  
羅に目をいとほるゝ御かたち  
熊野見たきと泣給ひけり  
手束弓紀の關守が頭に  
酒ではけたるあたま成覽  
双六の目をのぞくまで暮かゝり  
假の持佛にむかふ念佛  
中／＼に土間に居れば蚤もなし

水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩

我名は里のなぶりもの也  
憎れていらぬ跡の肝を煎  
月夜／＼に明渡る月  
花薄あまりまねけばうら枯て  
唯四方なる草庵の露  
一貫の錢むづかしと返しけり  
醫者のくすりは飲ぬ分別  
花咲ば芳野あたりを欠廻  
蛇にさゝるゝ春の山中  
一七三 三句 (一葉集)  
いろ／＼の名もむづかしや春の草  
うたれて蝶の夢はさめぬる  
蝙蝠ののどかにつらをさし出して  
一七四 歌仙 (俳諧集)  
ひるがほのみじか夜眠る晝間哉  
せめて涼しき蔭の青壁  
初月の影長繁にたゝかひて

向 奇 芭 路 芭 珍  
白 香 蕉 通 蕉 碩 碩 水 蕉 水 碩 蕉 水 碩 蕉

(一) 千葉縣流山町  
(二) 秋元酒江氏藏  
(三) 芭蕉眞蹟  
(四) のこの巻あり  
(五) それに『猿蓑』  
(六) の稿なり参考  
(七) の爲左にそれ  
(八) とこれとの異  
(九) 同を記す  
(十) 眞蹟に『凡兆』  
(十一) を『加生』とす

石にいとゞの聲ひくくなり  
松の木を秋風さそふ折／＼に  
礎をやめて琴の糸よる  
うかれたる女になれて目を積る  
矢數に腕のよわる戀ぐさ  
古塚に古郷の文を捨にけり  
柿の棠とる童かしまし  
まだ暮ぬさきより出てほたる狩  
うき世の外の清水わく寺  
嵐ふく雲間をわける月二つ  
杖を枕に菅笠の露  
いなづまに時／＼社をがまれて  
よこしまの身の汗ぞながるゝ  
花を見て芳野は見ずに歸りきや  
雨に肥たる峰のさわらび  
萎めしに駕まねく友ならむ  
されたる窓に鉦の音きく  
燈火のかすかにうつる松の枝  
出よとさそふ舟のむら雨

白 通 松 宜 江 官  
白 通 松 宜 江 官

水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩 水 蕉 碩

道心のとふて悲しき野邊の墓  
おはれて鹿の子を捨て行  
中の秋蟻峨なる竹を伐せけり  
三絃ちかく萩を踏をる  
うき人をほめてはそしる月の前  
大勢寄て遊ぶたはれ女  
一條や二條あたりの小袖賣  
亥の子告こすひえの山風  
ころ／＼と雪にまぶれて千鳥啼  
春を荷ふて歸る疇みち  
酔時は伯父の顔さへ見忘るゝ  
都の妹が子を産に來る  
機たゝむ妻戸に花の香を焚て  
よき夢かたるけふの初春  
一七五 歌仙 (猿蓑)  
市中は物のにほひや夏の月  
あつし／＼と門／＼の聲  
二番草取も果さず穂に出て

去 芭 凡  
來 蕉 兆 白 蕉 龍 香 雪 江 白 洞 香 白 香 雪 蕉 龍









一葉集一、  
御靈別當景  
桃丸興行」と  
前書あり

一葉集一、  
馬のあし音』

連句集

冊子の葉末にぬるゝ花筐  
しら木の樽のほふ宜春  
今川の武威を箱たる瓢初  
泣て手をする夫の不届き  
張籠に五百ばかりの米の錢  
節句の宵に祭りかさなる  
町端の埃掃ためて火に燃す  
死をわすれたる祖父の岩疊  
月ましの謂れ尊き葦の鹽  
内裏の帳に入し牛の子  
萩垣の川をさかひに原の末  
墓にもものいふ秋は來にけり  
傘取にやるほどもなき月の雲  
提灯さわぐ切の狂言  
蠅がらの庇に這る店の先  
肥て氣味よき豕の寢姿  
ひとり子の分に過ぎたる榮耀事  
呼にもゆかね醫者の乗物  
花咲て軒端明るき鼠壁

他國まで風中に慰む  
一八三 歌仙 (物の親)  
上御靈にて  
半日は神を友にやとし忘  
雪に土民の供物納る  
水光る蘆のふけはら鶴啼て  
闇の夜わたる面楯の聲  
なまらずにもものいふ月の都人  
秋に突折虫喰の杖  
實入よき岡部の早田赤らみて  
里近くなる馬の足踏  
押あつて犬にくれけり炙もち  
奉加に出る僧の首途  
白川や關屋の土をふし拜み  
右も左も荊棘咲けり  
洗濯にやとはれありく賤が業  
猫のいがみの聲もうらめし  
上はかみしもは下とて物おもひ

彈 丸 蕉 石 邦 州 丸 蕉 來 兆 丸 蕉 石 邦 州 丸 蕉

一葉集一、去  
來抄共に見  
つる日の影』  
一葉集一、  
真白に』  
一葉集一、  
作者名『殘香』  
一葉集一、  
春と秋』に、  
野良猫とほ  
る』とあり、今  
一葉集に従ふ  
一葉集一、  
作者名『此筋』  
名『千川』、作者  
同二に、作者

連句集

みな白張のふすまなりけり  
高麗人に名所を見する月と花  
春のうみ邊に鯛の濱燒  
晝下り寢たらぬ空に歸鴈  
雨ほろ／＼と南吹なり  
米ふるふ隣づからの物がたり  
日をかぞへても駕は戻らず  
くだり腹みじか夜ながら九十度  
おさへはづして蚤逃しけり  
閑成窓に繪筆を引ちらし  
麓の里のおてゝ戀しき  
首取かとらるべきかの鴉鳴  
野中に捨る錢の有たけ  
月細く小雨にぬるゝ石地蔵  
世は成次第いも擲てくふ  
萩を子に芒を妻に家建て  
綾の寝巻に匂ふ日の影  
泣／＼もちひさき草鞋求めかね  
たばこの形の風にうごける

好

真向に鳥居を見こむ花盛  
かすみにあぐる鷹の羽遺ひ  
一八四 附句 (一葉集)  
赤人も今一しほの酒機嫌  
土器くさき公家の振舞  
◎元祿四年  
一八五 歌仙 (春と秋)  
水仙は見るまを春に得たりけり  
窓のほそめに開く歳旦  
我猫に野良猫通ふ鳴侘て  
ほし忘れたるきぬ張の月  
權にいらぬ糸瓜のからみあひ  
仁といはれてわたる白つゆ  
鞆入に茶賣も己が名を替て  
戀に古風の残る奥筋  
めづらしき歌かきつけて覺ゆらむ  
形もをかしうそだつ賤の子

丸 邦 碩 蕉 珍 芭 路 通 丸 邦 州 丸 蕉 來 兆 丸 蕉 石 邦 州 丸 蕉

〔一葉集〕に、『ぼだに柴たたく』  
〔二葉集〕に、『花さかカリ』  
〔三葉集〕に、『かゝる信』  
〔四葉集〕に、『花さかカリ』

此里に持ちつたへたる布袴

餅そなへ置く名月の空

はら／＼と葉廣柏の露のおと

一むれあぐる雁の朝啄

折ふしは鹽屋まで来る物もらひ

亂より後は知らぬ年號

猪猿や無下に見残す花のおく

雪のふすまをまくる春風

此石のうへを浮世にし取り

彼岸にいと鐘聞ゆなり

ゆき違ふ中に我子に似たるなし

いはぬ思ひのしるゝ溜息

元ゆひのほつれてかゝる衣かつぎ

人のなさけをつたふ柴かく

語つゝ萩さく秋の戀しさを

陀袋さがす木曾の椽の實

月の宿亭主盃持いでよ

朽たる舟のそこ作りけり

唐人の知れぬ詞にうなづきて

蕉 仙 川 仙 蕉 通 川 蕉 通 仙 川 通 蕉 仙 蕉 通 川 蕉 通 仙 川 通 蕉

しばらく俗に身をかゆる僧

飼立し鳥も頃日見えぬなり

塘の家を降うづむ雪

あけぼのは筏の上にたく篲

あかきかしらを撫る青柳

花さけり静が舞を形見にて

鶯遊ぶ中だちの聲

一八六 歌仙 (猿)

饒乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

かさあたらしき春の曙

雲雀なく小田に土持頃なれや

しとき祝ふて下されにけり

片隅に虫齒かゝえて暮の月

二階の客はたゞれたるあき

放やるうづらの跡は見えもせず

稲の葉延のちからなきかぜ

ほつしんのはじめにこゆる鈴鹿山

芭 乙 珍 素

蕉 州 男 蕉 州 男 蕉 州 男 蕉

内蔵頭かと呼聲はたれ  
卯の刻の箕手に並ぶ小四方  
すみきる松のしづかなりけり  
萩の札すゝきの札によみなして  
雀かたよる百舌鳥の一聲  
懐に手をあたゝむる秋の月  
汐さだまらぬ外の海づら  
鐘の柄に立すがりたる花のくれ  
灰まきちらすからしな跡  
春の日に仕舞てかへる經机  
店屋物くふ供の手がはり  
汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸  
わかれせはしき鶏の下  
大膽におもひくづれぬ戀をして  
身はぬれ紙の取所なき  
小刀の蛤双なる細工ばこ  
棚に火ともす大年の夜  
こゝもとはおもふ便も須磨の浦  
むね打合せ着たるかたぎぬ

〔一葉集〕春の日の句以下な  
〔二葉集〕秋の日の句以下な  
〔三葉集〕春の日の句以下な  
〔四葉集〕秋の日の句以下な

智 凡 去 正 半 土 園 猿  
州 碩 男 州 月 兆 州 來 兆 秀 來 殘 芳 殘 芳 殘 芳 殘 風 雖 殘

此夏もかなめをくゝる破扇  
醬油ねさせてしばし月見る  
咳聲の隣はちかき縁づたひ  
添へばそふほどこくめんな顔  
形なき繪を習ひたる會津盆  
うす雪かゝる竹の割下駄  
花に又ことしのつれも定まらず  
雛の袂を染めるはるかぜ

一八七 歌仙 (勸進驛)

乙州が江戸へ赴くとき

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

笠あたらしき春のあけぼの

雲雀啼小田に土持ころなれや

しときいはうて下されにけり

片隅に虫齒かゝえて暮の月

二階の客はたゞれたるあき

はなちやる鶉の跡は見えもせず

稲の葉延のちからなき風

芭 乙 珍 素

蕉 州 男 蕉 州 男 蕉 州 男 蕉



葛もうらふく帷子の皺

小燈をさはらぬ萩に掛捨て

釣して來たる魚の腸

一通りみぞれに曇る朝月に

たゞそろ／＼と背中うたする

打明ていはれぬ人を思ひかね

手水つかひに出る面かけ

物ほしのはづれかゝりて危けれ

取揃へたる芝の小さかな

夕間暮煙管落して立歸り

泥うちかはす早乙女のざれ

石佛いづれ缺ぬはなかりけり

牛の骨にて牛作らばや

酒の徳數へ上ては醉ふさり

室の八島に尋あひつゝ

陸奥は花より月の様／＼に

啞の眞似するころのうぐひす

餅すきの友をほしがる春の雨

我小ちからにしむる巻藁

芭路丈惟

蕉通草然來蕉通草然來蕉通草然來蕉通草然來

物申は誰ぞと窓に顔出して

疹してとる跡のやすさよ

片足づゝ拾ひ次第の古草履

あす作らふと雪に鳴鳥

供多くつれしも駕の靜なり

畑の中に落る稻づま

崩れ井に熊追入れし夕月夜

松割鑿の見へぬ露けさ

やさしげに手打かぶりを教そめ

御簾の外にあらぶ侍

時鳥こゑ／＼啼て通りけり

畑の中におろすはや桶

この島も片側ばかり立揃へ

飯苞ほどく菅笠のうへ

佛にはかたみの花を奉る

茶をつむ髪の白き曙

一九一 歌仙 (一葉集)

芭路 蕉通草然來蕉通草然來蕉通草然來蕉通草然來

(一)「一葉集」に、「こちの黄鳥」「併諧集」「衣小刀に」とあれど「一葉集」に從ふ

下桶の上に葡萄重る

酒しぼる雫ながらに月暮て

扇四五本書なぐりけり

くれ竹に置直したるすゞみ牀

蓮の巻葉の解かゝるころ

笈摺もまた新しく懸連て

遊行の輿を拜む尊さ

休み日も癒ふるひの顔よわく

溝くむ臭の隣いぶせき

生干なる裏打紙をすかし見る

いつも露持萩の下枝

秋立て又一しきりなすび汗

薄縁たゞく僧堂の月

分別の外を書るゝ筆のわれ

瘡につられてうき世さりゆく

散時にならねば散ぬ花のいろ

畑をふまると春ぞ苦しき

人情常陸國はさえかへり

産月までもかろき俤

路史丈去野正

通邦草來童 通邦草來童 通邦草來童 通邦草來童 通邦草來童

うきことを辻井に語る隙もなし

拍買客の歸るきぬ／＼

硝子にへり際見ゆる藥酒

たちはな咲ばむかし泣るゝ

草むらに寢處替る行脚僧

明石の城の太鼓うち出す

大かたは同じやうなる船印

ちからに似せぬ礫かひなき

ゆるされて女の中の音頭取

藪潜らせぬしのび路の月

匂ひ水したるくなりて初嵐

又もいたちの小鼠おひ出す

手に持し物見うしなふ闇しさ

油あげせぬ庵はやせたり

うぐひすの花にはねじと高ぶりて

柳は風のたすけてぞふく

一九二 歌仙 (一葉集)

秀蕉通草來童 秀蕉通草來童 秀蕉通草來童 秀蕉通草來童 秀蕉通草來童

支考の前の名

雁もはなれず溜池の水  
 しら壁の中より砧うちそめて  
 蠟燭の火をもらふ夕月  
 たのまれて銀杏の廣葉うち落す  
 すがりて乳をしぼる狗の子  
 關守にはやなじみたる嘶好  
 身は沓うりと成て悟りし  
 天窓つき春と秋とはさだまらず  
 金ほりに入洞のともし火  
 田の中にいくつも鶴の打ならび  
 芝居の札の米あつめけり  
 御嶽より駕も不自由に旅の道  
 夜寒にしむる帯の綻び  
 月影に二階の軒をつき揚て  
 蕎麥の匂ひのむせる下積  
 陽炎や海手の花のさかり也  
 東風吹しほる菊水の旗  
 鴨の囀りながら狂ふらん  
 豆衛上手にあげて客待

昌 芭 正 野 乙 畫 珍 盤 里 探 游

房 蕉 秀 徑 州 好 碩 子 東 刀 通 好 東 刀 秀 碩

恨ある義理を語て涙ぐむ  
 くもれと捨しものと委鏡  
 うすやうに書てもふるふ筆の跡  
 潮のさし來る月の廻廊  
 暮の露岩屋の坊主打覗き  
 みなおのが音を啼からず出  
 弓と矢もまだいたいけに跳き  
 白髪さし出すみすの合せめ  
 ほととぎす綺麗に膳を組立て  
 夜の間に伸る竹の子の篠  
 文は先三史文選うつし書  
 坐録おしやる晝のうたいね  
 おさへたる鼠を終に取はづし  
 草履ふみこむ居風呂のもり  
 内裏たつほどは在家を花の宿  
 燕の出入にぎやかな聲

一九三 歌仙 (俳諧集)

州 通 蕉 子 秀 州 好 徑 通 刀 房 子 碩 徑 志

俳諧集

俳諧集 片  
はら町とあ  
れど葉集  
に従ふ  
白壁付る

月さしかゝる庭のこね土  
 旅の空圖は茶をまく頃ならん  
 手拭帯のしめちからなき  
 廣敷の草履を人に直させて  
 又こがしたる魚の焼やう  
 窮屈に頸髪ばかりはやし置  
 轡をすかす赤金の鐙  
 山づたひ伊賀の上野の年ふりて  
 狂歌の集をあみかゝりけり  
 出來合のものふるまはん初しぐれ  
 小鳥とび立そば垣のうへ  
 名月にかりそこなひし戻り馬  
 新酒の酔のほきくとして  
 語る事なければ君にさし向ひ  
 手のふるふとて書なぐる文  
 咲花のはれに墨の表がへ  
 傘ほせる宵の春雨  
 かへる雁おのがくみ打つれて  
 日高にとまる足よわの旅

正 昌 盤 芭 及 楚

秀 房 子 蕉 秀 志 江 肩 蕉 子 房 秀 江 蕉 志 房 子 秀 房 子

見るばかり細工過たるもみ佛  
 湖水を吞で胸にさはらず  
 隠家はもの静なる勢田の奥  
 鹿のおどしのつゞく松明  
 むさくさと太鼓唄しに月更て  
 名残を惜む庭のらん菊  
 みちのくや勅の草紙を書仕舞  
 心にたらぬかろき膳立  
 相組に男所帯のきれいすき  
 たはるゝことに法華あらそふ  
 一振の關より西は能登の國  
 淨瑠璃やめて説教にする  
 風筋に片側町を吹まくり  
 馬にのりても鏡をかたげる  
 誰が蔵ぞ白土付るはなの春  
 海から見へてのどかなる松

一九四 二句 (笈日記)

正秀亭初會興行の時

江 蕉 房 秀 子 松 志 秀 房 蕉 房 秀 子 秀 房 子 蕉 房 子

月しろや膝に手を置宵の宿  
萩しらけたるひじり行燈

一九五 二二句 (みつの顔)

野水が旅行を送りて

見送りのうしろや寂し秋の風  
来る春までと柳ちる陰

一九六 歌仙 (夕顔の歌)

古寺 瓶月

月見する坐にうつくしき顔もなし  
庭の柿の葉みの虫になれ

火桶ぬる窓の手際を身にしめて  
別當殿の古き扶持米

尾頭のもでたかりつる鹽小鯛  
百家しめたる川の水上

寂寞とまゐる人なき薬師堂

雨の曇りに晝蚊ねさせぬ  
一むしろなぐれて残る市の草

芭蕉 玉秀

芭蕉 野水

芭蕉 尙白

芭蕉 同白 同白 同白 同白 同白 同白

這かゝる子の飯つかむなり  
いそがしとさがしかねたる油筒

ねぶと踏れてわかれ侘つゝ  
月の前おさへてしひる小屋の宿

桔梗かるかや夜すがらの蟲  
信發る髪は黄色に秋かれて

大工の損をいのる遷宮  
三石の猿樂屋ふ花ざかり

八さがりより春の吹降  
鴈歸る白根に雲のひろがりて

打のる馬にすくむ襟卷  
商人の腰にさしたる綿秤

物よくしやべるいわらしの顔  
蒜の香によりもつかれぬ戀をして

暑氣によわる水無月の鯛  
鯛の聲つくしたる玄關香

高宮ねぎる盆も來にけり  
葱菜仁に粟の葉向の風たちて

随分細き小の三日月

芭蕉 白

芭蕉 白

芭蕉 白

芭蕉 同白 同白 同白 同白 同白 同白

【五】「葉集」に、「風をわび」

【四】「夕顔の歌」には「商人も」とあれと今「俳諧集」に従ふ

【三】「葉集」に、「三郷の」に、

【二】「葉集」に、「小屋の者」に、

【一】「葉集」に、「もろ聞えたり」

たかどりの城にのぼれば一里半

さても啼たるほととぎすかな  
西行の無言の時の夕間暮

小草ちら／＼野は遙かなり  
薄雲のやがて晴たる日の寒さ

水波かへて捨る宵の茶  
窓あけて雀を入る／＼軒の花

折懸垣にいろ／＼の蝶

堅田晩望

安／＼と出ていざよふ月の雲  
舟をならべて置わたす露

ひらめきて咲も揃ぬ萩の葉に  
鍋こそげたる音のせはしき

とろ／＼とねぶれば直る駕の醉  
城とり廻す夕立のかけ

我ものに手馴る鉄のこゝろよき  
石の鳥居の書付をよむ

連句集

芭蕉 成秀 路通 丈草 惟然 貉睡 正則 楚江

芭蕉 秀通 草然 睡正 則楚 江

芭蕉 同白 同白 同白 同白 同白 同白

鶺鴒の森を見かけてきそひ行

ふすま作りし日は時雨けり  
拍子木に物くふ僧の打つれて

瀧をへだてる谷の大竹  
月影にこなし置たる白の上

只ちら／＼ときり／＼す鳴  
糊こはきはかまに秋を打うらみ

鬢の白髪を今朝見付たり  
年／＼の花にならびし友の數

きしる車もせかぬ春の日  
薦の巢の下は芥を吹落し

さ／＼やくことのもろき聲なり  
なげきつゝ文書うちは戸をさして

いくらの山にそふて來る水  
汗くさき人はかならず遠慮なき

せめてしばしも煙管放さず  
風止てながるゝまゝのわたし舟

只一しほとたのむ染もの  
はし／＼は古き都のあれ残り

二五二

勝重 菴香 兎秀 正則 重古 重氏 重古 重氏 重古 重氏 重古 重氏

勝重 菴香 兎秀 正則 重古 重氏 重古 重氏 重古 重氏 重古 重氏

月見をあてにやがて旅立  
秋風に網の岩焼石の窟  
栗ひる糠の夕さびしき

支離なる子は哀さに捨残し  
身ほそき太刀の反方を見よ

長縁に銀土器を打くだけ  
時鳥啼て夜は明にけり

職人の品あらはせる花のかけ  
南おもてにめぐむ若草

一九八 二句 (笈日記)

おなじ年九月九日乙州が一樽をたづさへ来りけるに  
草の戸や日暮てくれし菊の酒

蜘蛛手にのする水桶の月  
一九九 二句 (笈日記)

元禄五年神無月のはじめつかたならん月の澤とき  
こえ侍る明照寺に羈旅の心を澄して

たふとがる涙やそめてちる紅葉  
芭蕉

をさなきどちの戀のあどなき  
おく住ひ留主のおもては戸をしきり

米つきさして物かひにゆく  
鞍おろす馬は雲を打はらひ

たうげに月のさえて出かゝる  
初花の京にも庵を造らせて

目利で春を送るなりけり  
二〇〇 二句 (笈日記)

おなじ冬の行脚なるべしはじめて此叟に逢へるとて  
奥底もなくて冬木の梢かな

小春に首の動くみのむし  
二〇三 二句 (一葉集)

翁幻住庵を出て東武に赴き給ふを熱田にて  
水仙やしろき障子のとも移り

炭の火ばかり冬のもてなし  
宵の月舟を浅みに引あげて

又はら〜とこほろぎの啼  
連句集

一夜静るはり笠の霜

二〇〇 二句 (一葉集)

木がらしに手を當てみん一重壁  
四日五日の時雨霜月

二〇一 半歌仙 (一葉集)

元禄四年の初冬茅屋に芭蕉翁をまねきて  
もらぬほどけふは時雨よ草の屋根

火を打聲に冬の黄鳥  
一年の仕事は麥にをさまりて

かき結船をさし廻すなり  
打連て弓射に出る有明に

山雀籠をさげる小坊主  
秋風に鍋かけ渡す長いろり

疊の上を草鞋でふむ  
蝙蝠の喰破りたる御簾の縁

念佛の聲の細う聞ゆる  
わかれんとつめたき小袖あたゝめて

初嵐勝にうすもの打おほひ  
頬髭剃て見ちがひにけり

旅の空いとま乞する雨はれて  
また一しきり瀧のなる音

物ぐさき夜は折〜に目を覺し  
わすれぬやうに其疊紙

蒼天をながめ渡せる三笠山  
時宜して次へ廻す盃

二〇四 歌仙 (一葉集)

其匂ひ桃よりしろし水仙花  
土屋わら家の並ぶうす雪

朝から暫ならず鳥の来て  
早ふ野分の吹てとるなり

せんだくのいとまを貰ふ宵の月  
野郎にわたすきり〜す籠

寢所はもらひ集た繪を押して  
何うたひやら鼻聲でやる

別れ路の出張た石に腰かける  
桃

李山

規外

芭蕉

斜嶺

如行

芭蕉

荆口

文鳥

此筋

左柳

恕風

怨行

殘香

千川

辨三

桃林

馬啼

野幽

利雨

越人

桐葉

執筆

芭蕉

白雪

白鱗

桃鱗

芦鴈

支考

以之

扇車

淡水

桃先

二〇五 五は四の  
讀記なるべし  
二〇六 初便に  
つのころにか  
ありけんみか  
斜嶺亭にして  
けふは時雨よ  
草の屋根  
斜嶺  
香に冬のほ  
たる火  
一年の仕事  
は麥にをさ  
まりて  
まことや芭  
蕉  
三を十餘句  
どせられて  
座がしめり  
りとして此句  
決せられたり  
と其連衆の  
たるを聞きぬ

二〇一 一葉集「前書  
なし  
二〇二 桃林は「桃  
梅」の事也  
二〇三 鞍宮物語に  
「桐葉改臨高」  
二〇四 抽草紙に  
「白雪が二人  
の子に桃先桃  
後と名をあた  
へて」と前書  
あり



藪いたちめが仰山に出た

水波に目こすりながら戸を明て

都の方もさだまらぬ秋

花すゝき若き坊主の物ぐるひ

額破れたるしら雲の月

ゐのしゝのおはれて歸る哀なり

茶ばかり吞てけふも旅立

散花にうすき化粧のところ元

二月の雛のとつゝけもない

おもしろき霞の中のこけら屋根

小鯛も鱈もとれる伊勢うら

黒崎の濱は鴉の啼連て

雨にならうか西のつかへし

籠作る側にあぶなく目を塞ぎ

松葉の埃のにえる鍋蓋

雉子笛を首にかけたる狩の供

雪降こみてけふも鳴瀧

にこゝと生死涅槃の夢さめて

院も白髪をわび給ひけり

桃 桃 雪

後 鯉 丸 雪 蕉 水 考 之 先 鴈 隣 後 丸 鯉 蕉 同 隣 考 後 考

和らかに鶴鳴ふかす夜の月

須磨の砦は下手で持たぞ

あの家は早う新酒をしぼらるゝ

馬つないだる門の竹垣

干ものゝ庭かゝへる一時雨

顔のしかんで黒き小悴

咲花に獅子のさゝらを摺ならし

村を挾て肥るわか松

二〇五 歌仙 (誹諧會我)

此里は山を四面や冬籠り

青うて細くけぶる炭竈

いぶせさは千鳥一種の旅をして

波に飛込船の遠淺

降くてけふは無疵に出る月

残る暑の門の行水

小地頭の前に並居ル萩芒

終りのしれぬ下手の舞く

鈴馬の拍子に乗て口を取る

支 淡 白 雪 芦 桃 扇 以 桃

考 水 雪 先 鴈 隣 後 丸 鯉 蕉 同 隣 考 後 考

(一)「一葉集」『漸と塔下』に、  
(二)「誹諧會我」に、  
(三)「一葉集」に、  
(四)「一葉集」に、  
(五)「一葉集」に、

世繼をいのる九世の観音  
侘人に明てほどこす小袖櫃  
あらははらめく谷の笹原  
熊の子の親を尋て鳴て居る  
切ッて付たる庵の三日月  
寒初るいろり普請に取かゝり  
鶉の籠は形がきはまる  
花散て扱は二葉に萌上り  
春ともいはぬ火屋の白幕  
やう〜と時にかゝる雲かすみ  
複子のしめる味噌の曲物  
手を書と童に筆を取せける  
明しの松を廻す夜仕事  
海少し隔る水の鹽はゆき  
秋風凄し義朝の墓  
蕎麥畑の荒ゆくまゝに道付て  
小づらのにくき衣の月の  
さま〜の戀は馬刀貝わすれ貝  
乞食となりて夫婦かたらふ

桃 芭 桃

後 鯉 丸 雪 蕉 水 考 之 先 鴈 隣 後 丸 鯉 蕉 同 隣 考 後 考

さしむける背中の雪を打拂ひ  
きれたる弦をおし直す弓  
素湯ひとつお寺見かけて呼び覺  
荷をおひながら牛は寝ころぶ  
めた〜と日向の方の花盛  
柳の糸がひたる石鉢  
念佛にすゝめ込たる蝶の夢  
またいく度の彌生めで度

◎元祿五年

二〇六 歌仙 (一葉集)

黄鳥や餅に糞する縁の先

日は眞直に晝のあたゝか

養父入は只藪入と見せかけて

なぐさみながら箒持なり

むら鴉月夜〜に鳴てゐる

風も吹ぬに笹の葉の露

歌の會すみかゝる時肌寒き

豪子の間にも居るさぶらひ

支 芭

蕉 考 蕉 考 蕉

ぐはら／＼と音する物を聞にやる  
 瓦がよれば諸願成就  
 二三年立のは夢の共ごとく  
 髪をはやして見ちがへる顔  
 坐敷には行燈つける暮の月  
 機おるきぬは角力取の帯  
 何所の田へゆくやら雁の啼連て  
 夜明の星のまだひとつあり  
 御供に常陸介も花ごころ  
 白いつゝじに紅の飛入  
 陽炎の傘ほす側にもえあがり  
 手紙を持って人の名を問  
 本膳が出ればおの／＼かしまり  
 金をくづして錢をつみ置  
 松風のすん／＼と吹夜半過  
 捨子があると告る門番  
 湯は水のやうに成たる手水鉢  
 馬一匹に留主をあづける  
 小調市の時から居たる奉公人

蕉、考、蕉、考、蕉、考、蕉、考、蕉、考、蕉、考、蕉

瘡がなければ女房とりもつ  
 むだ口に涼しい月の入かゝり  
 あらゝから蚊柱の立  
 二の丸の光りかゞやく金屏風  
 雨もあがりてほんの朔日  
 さら／＼と茶漬の食を喰仕舞  
 口上いふてかへす若黨  
 氏神の花もさかりに咲捕ひ  
 鳥居を越てのびる青柳

二〇七 半歌仙 (俳諧集)

水音や小鮎のいさむ二股瀬  
 柳もすさる岸の刈株  
 見しりたる乙切草の萌出て  
 刀の柄にくゝる状態  
 食傷の腹をほしけり朝の月  
 晝寝て遊ぶ盆の友達  
 小構へに家は木槿の取廻し  
 錢一文に下駄をかる道

湖 芭 沾 利 桃  
 風 蕉 蓬 牛 風 蕉 隣 牛  
 、蕉、考、蕉、考、

『一葉集』に、  
 『ちさう』も『  
 『南無大悲』に、

菊蕚の色の黒きもめづらしく  
 祭のすゑは殿の數鐘  
 見るほどの子供にことし抱瘡の跡  
 古き簾にころ鮫をつる  
 小さうて砂場をありく原の馬  
 蝨を焼て誰か喰そめ  
 月影の白は佛の臺坐なり  
 盗人かへる鷺の朝しも  
 杳掛の峠ほのかに花の雲  
 けふも野あひに燕うつ網

二〇八 歌仙 (未來記)

草庵に桃さくらあり門人に其角嵐雪をもてり  
 兩の手に桃とさくら草の餅  
 翁に馴し蝶鳥の兒  
 野屋敷の火繩もゆるすかけろふに  
 山のあなたの鐘聞ゆなり  
 のり下に月毛の駒の有明て  
 風ひやゝかにきれ／＼の雲

曾 良 蕉  
 良 蕉 風 牛 隣 蕉 蓬 良 風  
 傍輩に相撲の打身いたはられ  
 帯ほころばす金のたしなみ  
 寝言さへ初瀬籠の南無大悲  
 まめ蒔しまふ宵過の東風  
 酒さます杖にかぼそき禿ども  
 剣やともらふ老の紅裏  
 負軍功者に引てかへる也  
 ふたゝび暮るゝ霧の明方  
 見盡して蚊屋へ這入月の友  
 庵の雜水をすゝる小男鹿  
 一通彼岸の花の咲ちりて  
 日永にめぐる嵯峨や太秦  
 あたゝかに綿子とらせん弱法師  
 お醫者まじりに伽衆立るゝ  
 絃を浪よ／＼と追もどし  
 てうちん見ゆる町の入口  
 女房よぶ米屋の亭主若やぎて  
 高田の喧嘩はやむかし也  
 夏寒き關の孫六ぬきはなし

蕉 雪  
 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角  
 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角 蕉 雪 角  
 二五七

たしなき風の石菖へ来る  
牛の子の牛にせかるゝ市中の中  
江湖披露の田舎六尺  
とつぷりと夜に入月の鳥羽繩手  
いづこどまりと鴨の行らん  
糊こたちに四手うつ葛の裏表  
ずんずとのびる男兄弟  
一度は江戸を見たがる小あきなひ  
みたらし汲て神の門前  
榮よと未來を植し花の陰  
三人咲ふ春の日ぐらし

其不二や五月晦日二里の旅  
茄子小角豆もおのが色なる  
鷹の子の雲雀に爪のかたまりて

二〇九 三句 (一葉集)

二一〇 歌仙 (一葉集)

芭蕉庵會

素堂 露沾 芭蕉

蕉角 雪蕉 角雪 蕉雪 蕉角 雪蕉

風流のまことを啼や時鳥  
旅の草鞋にうの花の雪  
砂川にひたす双釜のかたぶきて  
門ちがひする醫者の鹿相さ  
月の夜は見しらぬ犬も静なり  
しろき西瓜も今はすゞしき  
庫裏クラ姥の手を東ねたる盆の中  
ぬるみひとつと望む陸尺  
みつめより人もしたしむ契にて  
こゝろもあるか假名に名を書  
行燈を隔て影をかくし合  
木賃泊りは不馳走にする  
入かけも細き高野の朝の月  
鹽を荷て良寒き人  
こほろぎに隣は臼を挽出しぬ  
小觸の文を送る村々  
此花に判官殿やとどめけむ  
寺のくれ木をながす雪水  
入物も田螺イナゴに似せて竹筴

涼芭 青曾 濁子 嵐水 曲水 嵐水 怒 蕉葉 誰良 山曲 子蘭 岱葉

二一〇 一葉集に、『醬油の燐』

二一一 一葉集に、『あひひて』

二一二 一葉集に、『月』

かたるをきけば乞食を君  
長からぬ髭人參の賣處  
また年くれて隠居苦しき  
火桶すらぬぬ夜の夢に消残り  
蕎麥の粉ふるふ聖の振舞  
返事せぬ手紙は掃て捨ぬらん  
おどけた顔は名のおぼえよき  
落着に風呂いひ付るいせのお師  
先日先日和よき秋の夕ぐれ  
柿見世の富貴に見ゆる後の月  
稻かりつれて小舟のりこむ  
狗の尾房さげたる雄の童  
碓氷の岩に残るあし跡  
ひきわたす弓にあたりを望れて  
きげん直しに酒もられけり  
やよやまで宿まで送る花の暮  
巢をくふ鳥の人に怖ざる

二一一 歌仙 (小文集)

連句集

雪山 子雪 蘭雪 葉雪 岱雪 蕉山 雪蕉 山雪 蕉山 葉雪 岱雪 蕉山 雪蕉

帷子は日々になすさまじ鳥の聲  
扱一升を稻のこき賃  
夢二の穂に醬かのかびをかき分けて  
夜市に人のたかる夕月  
木刀の音きこえたる居あひ抜  
二階二ばしごのうすき裏板  
寒さうに薬の下をふき立て、  
石丁なれば無縁寺の鐘  
手細工に雜箸ふときかなくなつ  
よびかへせども負けぬ小がつを  
肌寒き隣の朝茶のみ合二て  
秋入秋ときの筋氣いたがる  
鹽濱二にふりつゞきたる宵の月  
無住になりし寺のいさかひ  
持なしの新剃刀もさびくさり  
土たく家のくさききるもの  
花に寝む一疊あをき表がへ  
小姓の口の遠き三月  
竹橋の内よりかすむ鼠穴

史芭 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水

『一葉集』に、  
『來れば』

『一葉集』に、  
『云うた程』

馬の糞かく役もいそがし  
 夕ぐれに洗濯賃をなげ込て  
 とはぬもわろしばいの弔  
 椀かりに來れど折ふしをびす講  
 此あたゝかさ明日はしくれむ  
 夜あそびのふけて床とる坊主共  
 百里そのまゝ船のきぬく  
 引割りし土佐材木のかた思ひ  
 よりもそはれぬ中は生かべ  
 云たほど跡に金なき月のくれ  
 もらふを待ちて鳴ののつべい  
 摺鉢にうへて色付く唐がらし  
 障子かさぬる宿がえの船  
 北南雲降雲のゆきわたり  
 二夜三日の終るあかつき  
 考へてよし野參のはなざかり  
 百姓やすむ苗代の際

二二二 歌仙 (一葉集)

蕉 水 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉

初茸やまだ日數経ぬ秋の露  
 青きすゝきに濁る谷川  
 野分より居村の替地さだまりて  
 さしこむ月に藍瓶の蓋  
 鹽付て餅くふほどの草枕  
 撫てこはゆる革のひきはだ  
 としよりは土持ゆるす夕間暮  
 諏訪の落湯に洗ふ馬の背  
 辨當の茶を只おく石の上  
 やさしき色に咲るなでしこ  
 よつ折の蒲團に君が丸くねて  
 物書うちにつらき足音  
 月暮て雨の降止星明り  
 早稻の依にほめく刈大豆  
 胸虫にまた起さるゝ秋の風  
 畚に赤子をゆする小坊主  
 花守の家と見へたる土手の下  
 ほそき井溝をのぼるわか鮎  
 春風に太鼓聞ゆる旅芝居

芭 岱 史 半 嵐

蕉 水 邦 落 蕉 蘭 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉 邦 水 蕉

『再版本』には  
『見せる』

呑口ならず伊丹諸白  
 琉球に野郎疊のおもて替  
 是非此際はおげん物役  
 見しられて近付なりし木曾の馬士  
 嫁入するよりはや鳴子引  
 袖ぬらす染帷子の盆過て  
 月もわびしき醬油の粕  
 草赤き百石取の門がまひ  
 公事にまけたる奈良の坊方  
 からかさを廣げもあへず俄雨  
 見るめも暑し牛の日おほひ  
 出店へと又も隠居の出られて  
 干物つきやる精進の朝  
 手拭のまぎれてそれを云募り  
 駄荷をかき込板敷の上  
 人つゞく毛利細川の花ざかり  
 聲もけんなりきじの勢ひ

二二三 歌仙 (深川集)

水 蕉 邦 落 蕉 蘭 水 蕉 邦 落 蕉 蘭 水 蕉 邦 落 蕉 蘭 水 蕉

深川夜遊  
 青くてもあるべきものを唐辛子  
 提ておもたき秋の新鋏  
 昏の月楓のこつばかたよせて  
 坊主がしらの先に立たるゝ  
 松山の腰は鵜鴫の喉渡り  
 焙爐の炭をくだす川舟  
 祝ひ日の牙えかへりたる小豆粥  
 ふすま揃んで洗ふ油手  
 掛乞に戀の心を持たせばや  
 翠簾にみぞるゝ下賀茂の社家  
 寒徹す山雀籠の中がへり  
 正氣散のむ風のかるさよ  
 目のはりにまづ千石はしてやりて  
 きゆる斗に鑑おさゆる  
 踏まよふ落花の雪の朝月夜  
 那智の御山の春遅き空  
 弓はじめすぐり立たる子息ども  
 荷とり馬子の海へ飛込む

芭 酒 嵐 岱

蕉 堂 蘭 水 蕉 堂 蘭 水 蕉 堂 蘭 水 蕉 堂 蘭 水 蕉 堂 蘭 水 蕉



燒焦したる小妻もみ消ス  
 粽つむ笹の葉色に明わたり  
 襪履をのぼるならの入口  
 半分は鏡はぬ人もうち交り  
 船追のけて蛸の喰飽  
 宵闇はあらぶる神の宮遷し  
 北より萩の風そよぎ立つ  
 八月は旅面白き小服綿  
 焼山ごえの雲の赤はげ  
 打起す晶も花の木陰にて  
 つらも長閑に鶴の卵わる  
 春ふかく隠者の富貴なつかしや  
 當摩の丞を酒に酔する  
 さつぱりと鱗一本に年暮て  
 夜着たゝみ置長持の上  
 灯の影めづらしき甲持チ  
 山ほとゝぎす山と出る聲  
 兒達は鮎のしら焼ゆるされて  
 尻目にかよふ翠簾の女房

蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水

いかやうな戀もしつべきうす宴  
 琵琶をかゝえて出る鴛物  
 有明は毘舍門堂の小方丈  
 舌のまはらぬ狐やゝ寒  
 一寸じも青き葉のなき薄原  
 篠ふみ下る箱根路の坂  
 宗長のうき寸白も筆の跡  
 茶磨たしなむ百姓の家  
 花の春まつへて廻る神樂米  
 七十の賀の若菜莖立

二二七 十六句 (一葉集)

千 芭 此 左 酒 海  
 川 蕉 筋 柳 堂 動  
 水 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水

『一葉集』に『許六亭興行』の再版本に『宵の踊に』と誤る

物書て慰む日あり五月雨  
 散際かるし雨天の花  
 笠とれば前髪ゆがむ草鞋がけ  
 なみだも急にいさむ大酒  
 高館は年穿鑿になりにつけり  
 居風呂たてる雪の降出し  
 ふくさ薬取みだしたるすけと鱗  
 傷寒病のあたまかゝゆる  
 伊豆の海みさきに船を漕入て  
 一夜の法に宗旨定る

二二八 歌仙 (深川集)

二日泊りし宗鑑が客煎茶一斗米五升下戸は亭主の仕合なるべし

洗足に客と名のつく寒さ哉  
 縮館双ぶ冬むきの里  
 鶴鶴階子の鐘をつたひ来て  
 春は其儘七草もたつ  
 月の色米ものこる小鮎うり

連句集

借 水 川 蕉 蘭 柳 筋 動 水 川 蕉 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水

築地のどかに典樂の鶴  
 相國寺牡丹の花の盛りにて  
 椀の蓋とる露に竹の子  
 西衆の若黨つるゝ草まくら  
 むかし咄に野郎泣する  
 きぬくは宵の踊の箔を着て  
 東追手の月ぞ澄きる  
 青鷺の椀に宿す露の音  
 ふたりの柱杖迹先につく  
 乗掛の挑灯しめす朝おろし  
 汐さしかゝる星川の橋  
 村は花田面の草の青み立ち  
 塚のわらびの萌ゆる石原  
 蘆僧の師に廻りあふ春の末  
 今は收れし今川の家  
 うつり行く後撰の風を讀興し  
 又まねかるゝ四國ゆかしき  
 朝露に濡渡りたる藍の花  
 よごれし胸にかゝる麥の粉

堂 蘭 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水 蕉 六 堂 蘭 水

(一)再版本に「子  
供たち」と誤  
る  
(二)同上に「積か  
はる」と誤る  
(三)同上に「堀の  
内」と誤る  
(四)再版本に「見  
たる」と誤る  
(五)「一葉集」に  
「打豆の」に

馬かたを待戀つらき井戸の端  
月夜に髪を洗ふ採出し  
火とほして碇あてがふ子共連  
先づ積みかくるとしの物成り  
薄りと門の瓦に雪降て  
高観音に唐崎を見る  
今はやる單羽織を着つれ立  
奉行の槍に誰も隠るゝ  
葎垣に木やり聞ゆる堀の内  
日は赤う出る二月朝日  
はつ花に伊勢の蛇のとれそめて  
釣樟若やく宮川の上

二一九 歌仙 (深川集)

支梁亭口切  
口切に埒の庭ぞなつかしき  
筭見たき藪の初霜  
山雀の笠に縫ふべき草もなし  
秋の野馬のさまの形

芭 支 嵐 利  
蕉 梁 蘭 合

旅人の嘶に月の明けわたり  
大戸をあけに出づる裸身  
鶴の玉子の敷を産みそろへ  
あらたに橋を踏みそむるなり  
緑さす六田の柳ほり植えて  
掛菜春めく打大豆の汁  
細なる雨にもしほる蝶のはね  
鏝かなぐる空坊の縁  
酒で乞食のなりやすき月  
行雲の長門の園を秋立ちて  
露に朽ちけむ一腰の鉛  
西日入る花は庵の間半床  
萱の二葉の萌えてほのめく  
都をば去年の行脚に思れて  
兒にまたるゝ釋迦堂の暮  
咲きそめて忍ぶたよりも痕すべり  
鳥のなみだか枇杷の薄色  
凡卑して鎖すともなき旅のやど

酒 俗 桐 也

堂 水 奚 竹 梁 堂 蘭 水 堂 合 蕉 梁 竹 奚 堂 蕉 蘭 爰

(一)「一葉集」に  
「はえる」

(二)「一葉集」に  
「はん」極か  
る  
(三)再版本に「白  
ぼろ」  
(四)「一葉  
集」に「しらほ  
る」

(四)「一葉集」に  
「算」  
(五)同上に「御室  
の町の」  
(六)同上に「執  
筆」

清げに注連をはゆる社家町  
日盛に鬻賣る聲を夢ごゝろ  
みよしの房の双ぶ川口  
水つきの稻の雪に肩重し  
はえ黄ばみたる門前の坂  
皮判の物煮て食ふ宵の月  
上毛吹かるゝしろほろの鶯  
谷づたひ流しかけたる竹筏  
太刀持斗り二ごゝろなき  
物音も簾静におろしこめ  
盆に算ゆる丸薬の数  
花盛御空の路の人通り  
葵と菜種の野は錦なり

二二〇 半歌仙 (一葉集)

木がらしにうめる間違き入湯哉  
毛をひく鴨をのするまた板  
掛乞の中脇差にはかま着て  
處々は木履はくみち

荆 口 酒 堂 芭 筋 此

梨の枝おもりを解ば暮の月  
桶にいろこき芋がらの灰汁  
秋風に架拵る鷹のやど  
鼠のわたる梁の弓  
六月の日も照仕舞杵の木  
手数の入し荷繩ゆるまる  
袈裟ばかり懸て供する淨土宗  
箕面の瀧のくもる山降  
籠ふせの駒鳥おろす篠の蔭  
依に豆の葉をしこく秋  
月代も小ぐらき里のはなれ際  
手繩ひかへて馬の順くる  
盃は今朝よりとれぬ花ざかり  
壘の上へのぼる陽炎

二二一 歌仙 (桃の實)

水鳥よ汝は誰を恐るゝぞ  
白頭更に芦靜也  
中波の酔も仄に棒提て

瓦 芭 酒 堂 蕉 峰

左 大 千

柳 舟 川 蕉 堂 柳 筋 川 舟 堂 川 筋 柳 堂 蕉 柳 蕉





としわすれ盡に桃の花書む  
膝にのせたる琵琶のこがらし  
宵の月よく寝る客に宿かして

酒堂 芭蕉

二七〇

二二四 表八句 (一葉集)

『西園集』に、  
『世の中を』の  
前書の前  
『壬申歳暮』と  
あり  
『西園集』に、  
『吹すかす』に、

よの中をいとふまでこそかたからめ  
小契情行てなぶらん年の暮  
頭巾ばかりに假のたきもの  
ふきさする袴のひだの赤らみて  
替るこゝろになりし盃  
算盤をひそかに弾く市の中  
いつも自由に出湯の行水  
竹槍の葉ごしに並ぶ月の空  
胸すかしたる早稲の朝風

共角 芭蕉 普船 史邦 去來 丈草

◎元禄六年

二二五 歌仙 (一葉集)

野は雪に河豚の非をしる若菜哉  
まだ黄鳥の啼きらぬ聲

涼葉 千川

門番の寝顔にかすむ月を見て  
けさむき初る前栽の柿  
秋風にむしろをたるゝ裏坐敷  
蟲も雨夜は目ざめがちなる  
肌寒く宿の方を下になし  
手本に墨を付て悔めり  
尼寺の老尼はひとり髪剃て  
奈良はむぐらの中にこそあれ  
掛わたす小袖の微をもみ落し  
金の團扇を閑のなぐさみ  
見る度に源氏一部のしのばしく  
捨てうき世をやすき僧正  
出来合も伊勢の料理は龜相にて  
はだしでありく内庭の砂  
朝月に花の乗物せつき立  
日かげの藤の雫つめたき  
石疊む鳥居のおくの春がすみ  
地取の棧に見ゆる名苗字  
爰までとはかぬ鹿の音をしたひ

芭蕉 宗此 濁

芭蕉 波筋 川筋 蕉波 葉川 筋蕉 葉筋 蕉葉

『西園集』に『歳』の  
誤ならん

寺のひかへは四五反の秋  
夕月に植木つり出す塀の破  
見よ水籠を懸られし軒  
先ばなは土依鞆の一繩手  
着てゐるうちに帷子の干る  
うつぶきて糸さす簾の暮かゝり  
あはれ氣もなき講の題目  
三條の橋より西は時雨けり  
茶屋の二階は酒の樓閣  
美しき顔も丈より年ふけて  
うらみの文を作る琴の手  
花咲ば又來てのぼる塚の上  
高荷にはさむ蓬たんぼゝ  
もろ雲雀夕日をしげに囀りて  
只よきほどに春風ぞ吹

二二六 歌仙 (一葉集)

からかさにおしわけ見たる柳かな  
わか草青む塀の築さし

芭蕉 濁子

臘月いまだ火燵にすくみ居て  
使のものに禮いふてやる  
洗濯をしてより裾のつまりけり  
ほめられてまた出す吸物  
湯入衆の入草臥て峰の堂  
黒部の杉のおし合て立  
はびこりし廣葉の茶園二度摘て  
けふも暑に家を出て行く  
伊勢の連又變替をしておこす  
發しかねたる道心の沙汰  
金はらひ名月までは延られず  
のぼり日和の浦の初雁  
秋もはや升ではかりし蕃椒  
清涕たらす子の髪結てやる  
在所から半道出れば花咲て  
瓢の煤をはらふ麻だね  
春の空十方暮の時くゝに  
汐干に出てをしむ精進日  
駕舁の一人は酒をかきもせず

涼野 利宗 會

葉蕉 波筋 川筋 蕉波 葉川 筋蕉 葉筋 蕉葉









化物曲輪掃殘す城  
榎の枝おろしかねたる暮の月  
姉まちうける後の藪入  
ひとり住古き碓をしらけり  
うらみはてゝや琴箱のから  
都より十日も遅き花ざかり  
爪を立たる獨活の湯手物  
年禮を御師の下人に詞して  
あほしかぶれば兀もかくるゝ  
持付ぬお太刀を右にかしこまり  
よればはねたる馬のふり髪  
夏川にはや宵の瀬を踏ちがへ  
道祖のやしろ月を見隠す  
我戀は千束の茅を積かさね  
鴈も大事にとゞけゆく文  
眉作る姿似よかし水かがみ  
大原の紺屋里に久しき  
數おほくつなげば牛も富貴也  
冬のみなとに終を釣

馬

子 水 子 蕙 子 蕉 子 良 水 子 蕉 子 蕙 子 蕉 子 葉 子

初時雨六里の松を傳ひ來て  
老が草鞋のいつぬけたやら  
朝過を水雞の起すねざめ也  
筭あらすゐのしゝの道  
雪ならば雪車にのるべき花の山  
春風さらす谷の細布

二四〇 三句 (翁 草)

漆せぬ琴や作らぬ菊の友  
葱の笛ふく秋風の蘭  
鮎よはく籠の目潜る水落て

素 芭 沾  
堂 蕉 圃

涼

子 蕉 子 葉 蕉 子 蕉 子 葉 良 子 蕉 子 蕙 子 蕉 子 葉 子

十三夜曉やみのはじめ哉  
小袖の糊のこはき薄霧  
燒飯に瓜の粕漬口あけて  
荏胡麻のからに四十雀つく  
雨氣付笠の干反のしめりあひ  
ごみかき流す風呂の水やり

二四二 歌仙 (一葉集)

濁 會 芭 史 杉 倚  
子 良 蕉 邦 風 水

きり姿をはや朝影に打立て

幸手をゆけば栗橋の關

松杉をはさみ揃る寺の門

ひとりやもめの冬のこしらへ

梟の身をも隠さぬ戀をして

涙くらべむ朽落るなり

うす月夜麻の衣の影ぼうし

客まつ暮に薪わる秋

末廣を釘にかけたる禰宜の家

塵打はらふ片器の喰積

先汁と筆を始めるはつ花に

うぐひす啼て旅になす空

ねざめにも指をうごかす一節切

中よくちなむ兄が膝元

具足着に履るゝほど場のありて

顔には似せぬ饅頭の好

盛なる隠居の牡丹見て歸る

襦はづして出るをうな子

笠からん歌の返事にみのもし

涼

葉 蕉 良 子 水 蕉 邦 風 子 葉 蕉 邦 水 蕉 邦 葉 邦 風 水 邦

あしはむくみて河原行けり  
よこれたる衣に輪袈裟打しほれ  
伯母の泣るゝ酌人のかげ  
けふの月實植の梨の穂がけして  
枝もぐ菊の括りちひさき  
露霜に土こそげたる杵の裏  
潜りほそめにあける肴屋  
初産は思の外に安かりて  
かりし屏風をかへす夕暮  
花にまた花をかざりし弓空穂  
はや録倉の道のわか草

二四二 歌仙 (炭 俵)

神無月廿日ふか川にて即興  
振賣の鴈あはれ也ゑびす講  
降てはやすみ時雨する軒  
番匠が榎の小節を挽かねて  
片はげ山に月を見るかな  
好物の餅を絶さぬあきの風

芭 野 孤 利  
蕉 坡 屋 牛 坡







吳洲の茶碗を賣に出さるゝ  
なま禪の二階を居間に閉籠  
月を隣に癪捕をさく  
ねり物の一番見ゆる花すゝき  
蛸に醉懸る柚子のきり形  
秋の空年々下る旅功者  
奉加帳にはつかぬなりけり  
不公儀に花咲山の新三位  
田舎の谷になまる黄鳥

二四七 歌仙 (續 猿蓑)

いさみ立鷹引居る嵐哉  
冬のまさきの霜ながら飛  
大根のそだぬ土にふしくれて  
上下ともに朝茶のむ秋  
町切に月見の頭の集め錢  
荷がちら／＼と通る馬次  
智恩院替りの噂極りて  
さくらの後は風わかやぐ

馬 芭 沽 里  
沽 莫 里 沽 莫 蕉 圃 圃  
莫 蕉 圃 莫 同 圃 莫 圃 蕉

狙の鱸に水をかけながし  
目利で家はよい暮しなり  
狀箱を駿河の飛脚請とりて  
まだ七ツにはならぬ日の影  
草の葉にくぼみの水の澄ちぎり  
伊駒氣づかふ綿とりの雨  
うき旅は鶴とつれ立渡り鳥  
有明高う明けはつるそら  
柴舟の花の中よりつゝと出て  
柳の傍へ門をたてけり  
百姓になりて世間も長閑さよ  
ごまめを膳にあらめ片菜  
賣物の澁紙づゝみおろし置く  
けふの暑さはそよりともせぬ  
砂を這ふ棘の中の絡線の聲  
別を人がいひ出せば泣  
火燵の火いけて勝手をしづませ  
一石ふみし確の米  
折々は突目の起る天氣相

里 沽 莫 里 沽 莫 里 沽 莫 里 沽 莫 里 沽 莫 里

「一葉集」には  
表のみありて  
他なし  
「標注七部集」  
に「一本『流  
物』に作れど  
元板古集とも  
に『賣物』に作  
るとあり

「不猫蛇」に  
此の句支考が  
寛入のやうに  
いへり

仰に加減のちがふ夜寒さ  
月影にことしたばこを吸てみる  
おもひのまゝに早稲で屋根ふく  
手拂に娘をやつて娘のさた  
参宮の衆をこちで仕立る  
花のあと躰躰のかたがおもしろい  
寺のひけたる山際の春  
冬よりはすくなうなりし池の鴨  
一雨降てあたるかな風

二四八 歌仙 (炭 俵)

雪の松おれ口見れば尙寒し  
日の出るまへの赤き冬空  
下看を一船濱に打明て  
あいだとぎるゝ大名の供  
身にあたる風もふはく薄月夜  
粟をかられて廣き畠地  
熊谷の堤きれたる秋の水  
箱こしらへて蟹節賣る

野 岱 利 桃 子 芭 孤 杉  
坡 水 牛 隣 璠 蕉 屋 風  
里 沽 莫 里 沽 莫 里 沽 莫

二三 屢寝所もらふ門の脇  
馬の荷物のさはる干もの  
竹の皮雪踏にかへる夏の來て  
稲に子のさす雨のはら／＼  
手前者のひとりも見えぬ浦の秋  
めつたに風邪のはやる盆過  
宵々の月をかこちて旅大工  
背中へのぼる子をかほゆがる  
茶むしろのきはづく上に花ちりて  
川からすぐに小鮎いらする  
朝曇はれて氣味よき雉子の聲  
背戸へ廻れば山へ行みち  
物思ひたゞ辭／＼と親がゝり  
取集めてはおほき精選日  
餅米を搗て俵へはかりこみ  
わざ／＼わけて樂代の禮  
雪舟でなくばと自慢こきちらし  
となりへ行って火をととりて來る  
又けさも佛の飯で埒を明

沽 會  
水 石 杉 利 依  
圃 菊 風 坡 合 々 隣 璠 依 隣 良 屋 水 風 菊 圃 水

「これより以下  
『一葉集』にな

損ばかりして賢がほなり  
大阪の人にすれたる冬の月  
酒をとまれば祖母の氣に入  
すけぬる御前の箔のはげかより  
次の小部屋で唾にむせる聲  
約束にかきみて居れば蚊に食れ  
七ツの鐘に駕籠呼に来る  
花の雨あらそふうちに降出して  
男まじりに蓬そろへる

二四九 牛歌仙 (一葉集)

雪やちる笠の下なる頭巾まで  
刀の柄に氷る手拭  
唐がらし木ながら軒に打かけて  
秋来てよわる鍋蓋の蠅  
朝／＼は布子を羽折暮の月  
研て捨る腰の印判  
鳥守に言葉の禮をしみ／＼と  
あからむ姿は鳥のなみだか

野 會 依 倚 芭 杉  
坡 水 蕉 良 々 水 蕉 風

白樫の梢は寺の林にて  
髪をきりても身を作りけり  
焼蕪る物見のむしろ押まくり  
もらひよせしも茶に合ぬ水  
藪こはす跡はうき立霜柱  
出家に物をやり上る也  
御局もいとまがちなる郷の月  
取草の湯のさめてゆく空  
初花は蓬揚よりいそがれて  
塀のつり木にうぐひすの鳴

二五〇 三句 (翁草)

古將監の古賞をかたりて  
月やその鉢の木の日ひた面  
旅人なれば折からの冬  
水鳥に廻文のむらに來て

玄 共 沾 芭 執  
虎 角 圃 蕉 筆  
坡 依 良 坡 風 良 蕉 水 風

二五二 芭蕉翁全傳  
「芭蕉全傳」に、  
「芭蕉翁全傳」に、  
「芭蕉翁全傳」に、

二五二 表六句 (一葉集)

虎落の氷柱ながくみじかき  
十露盤を片手に米の印して  
こゝろあてなき旅のいとなみ  
けふの月處のものは山の猿  
よき岩組に秋の水おと  
一株の芒は物に似たるかな  
人見ねばこそ闇の臆病  
片道はしるき足駄をぶらさげて  
右もひだりも崖造りなり  
わき出る雲より下のほととぎす  
尾上にかゝる鐘のつきぞめ  
東國のあらき男も口そよぎ  
鳴戸の月を待てのる船  
秋風に木綿肌着も吹しめり  
並ぶ在所を霧の隔る  
花ざかり志賀の田の畝きり立て  
なにおくれけむ蝶になる虫  
春の日に長柄の傘の繪のもやう  
鬘斗を付たる駕かきの紋

芭舟

蕉 竹 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹

白粉に千代をや關の姥が甜  
錢よむ業を専にする  
風はなに油へる火のちら付て  
時を引ずる棒の片そぎ

芭 玄 舟  
蕉 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹 虎 蕉 竹

元祿七年

二五三 表八句 (甲戌歳且驛)

年たつや家中の禮は星月夜  
筆紅梅をたむ國紙  
春も雪茶通の手前ゆたかにて  
山より見たる夕ぐれの町

共 介 岩 枳  
角 我 翁 風



蒼みたる松より花の咲こぼれ  
四五人通る僧長閑なり  
薪過町の子供の稽古能  
いづくも春にしたきよの中

二五六 歌仙 (別座敷)

紫陽草や藪を小庭の別坐舖

よき雨あひに作る茶依

朝日に鯛の子賣の聲聞て

出駕籠の相手揃ふ起々

かん／＼と有明寒き霜柱

樽掘りかけてけふも又来る

住憂て住持こたへぬ破れ寺

どう／＼と鳴濱風の音

若黨に羽織ぬがせて假枕

ちひさき顔の身嗜よき

商ひもゆるりと内の納りて

山のかぶさる下市の里

草臥のついでには旅の氣むづかし

來 化 蕉 來  
四日の月もまだ細き影  
秋來ても畑の土のひぐわわれて  
雲雀の羽のはえ揃ふ聲  
べら／＼と足のよだるき花盛  
ひらたい山に霞立なり  
正月の末より鍛冶の人雇  
濡れたる依をこかす分ヶ取  
晝の酒寝てから酔のほかつきて  
五がなれば歸る女房  
此際を利上げかりに云延し  
まんまと今朝は鞆を乗出す  
結構な肴を汁に切入て  
見世より奥に家はひッ込む  
取分て今年は晴ん盆の月  
まだ花も無き蕎麥の遅蒔  
柴栗の葉もうつすりと染なして  
國から來たる人に物いふ  
關しう一白搗いて供支度  
蕨波むにほひ隣さうなり

芭 子 杉 桃 八

蕉 珊 風 隣 桑 蕉 珊 風 隣 桑 蕉 珊 風

隣 桑 蕉 珊 風 隣 桑 蕉 珊 風 隣 桑 蕉 珊

「一葉集」に、  
「けんく」と  
誤る  
「一葉集」に、  
「此際も」  
「晴ん」はハル  
ルとよむなる  
べし「一葉集」  
には「はれる」  
と書きたり

今の間にしるう成程降時雨

日用の五器を籠に取込

扈從衆御茶屋の花にざわめきて

小舟を廻す池の山吹

二五七 歌仙 (小文庫)

饒 別

新麥はわざとすゝめぬ首途かな

また相蚊屋の空はるか也

馬時の過て淋しき牧の野に

四五千石のまつたて山

方々へ醫者を引ずる暮の月

躍の作法たれもおぼえず

盆過の頃から寺の普請して

ほしがる者に菊をやるる

蓬生に戀をやめたる男ぶり

濕のふきでのかゆき南氣

丹波から便もなく啼鳥

節季が來れど利あげさへせぬ

風 桑 隣 筆 執

雪に出て土器賣を追ちらし  
たゞ原中に月ぞさえける  
神鳴のひつかりとして沙汰もなき  
しやくりがやんで氣がかるうなる  
奥の院をづ／＼花をさしのぞき  
けさからひとつ鶯のなく  
春の日に産屋の伽のつくりと  
かはり／＼や湯漬くふらむ  
いそがしく皆股立を取並び  
目つらもあかず霞ふるなり  
からびたる櫟林に日かくれて  
佛の木地をつゝむ糸だて  
ごろ／＼と白挽出せばほとゞぎす  
そゞろに草のはゆる竹縁  
羽二重の赤ばるまでに物おもひ  
わかいつから神せゝりする  
鶏をまたぬすまれしけさの月  
鳥はあれて山くすのはな  
日光へたんがら下す秋のころ

山 芭 蕉 店

店 蕉 店 蕉 店 蕉 店 蕉 店 蕉

蕉 店 蕉 店 蕉 店 蕉 店 蕉 店

「一葉集」に、  
「日の暮れて」  
「一葉集」に、  
「はえる」

くれぐれのむ弟の事  
ゆふかぜに蒲生の家も敗れ行  
物にせばやとさする天目  
花のあるうちは野山をぶらつきて  
藤くれかゝる黒谷のみち

二五八 二句 (芭蕉翁真迹集)

やわらかにたけよことしの手作菱  
田植とともにたびの朝起  
芭蕉舟  
元禄七月雨に降こめられてあるじのもてなしに  
心うごきて聊筆とる事になん

二五九 半歌仙 (笈日記)

隠士山田氏の亭にとめられて  
水鶏啼くと人のいへばや佐屋泊  
苗の雫を舟になげ込  
朝風にむかふ合羽を吹たてゝ  
追手のうちへ走る生もの  
さかやきに暖簾せりあふ月の秋

芭蕉  
露川  
素覽

崩れてわたる椋鳥の聲  
耕作の事をよくしる初あらし  
豆腐あちなき信濃海道  
尻敷の縁とりごさも敷やぶり  
雨の降日をかきつけにけり  
炮椽のもちにくるしむ蠅の足  
蘭を刈あげて門にひろぐる  
切麥であちらこちらへ呼れあふ  
お旅の宮のあさき宵月  
うそ寒き言葉の釘に待ほうけ  
袖にかなぐる前髪の露  
咲花に二腰はさむ無足人  
打ちひらいたるげんげしま畑

二六〇 歌仙 (續有磯海)

元禄七年後の五月に去來が許にて故翁に向對の折  
此頃難波の之道が参りて人々打寄り申捨てたると  
て見せ給ひし歌仙一卷今續集の冠となし侍る  
(浪化)  
落柿舎即興

芭蕉  
川覽  
芭蕉  
川覽  
芭蕉  
川覽  
芭蕉  
川覽

(二一)「葉集」に、  
「吹きちる」と  
誤る  
(二二)「葉集」に、  
「十五盃ある」  
(二三)「葉集」に、  
「松原」  
(二四)「同」に、「あふ  
人ごと」に  
(二五)「續有磯海」に  
「船」とあれど  
誤記なり一節  
尾冠「等」同一  
筆研のもの皆  
この誤記をな  
せり依て訂正  
す  
(二六)「葉集」に、  
「川舟の濁り  
に下す」  
(二七)「葉集」に、  
「賣りに出す」  
(二八)「同」に、「迷惑  
なひま」  
(二九)「同」に、「戻らる  
」  
(三〇)「續有磯海」に  
「氣達」とあれ  
ど誤ならん  
今「伊呂集」に  
従ふ  
(三一)「葉集」に、  
「船をしかく  
る」

牛流す村のさはぎや五月雨  
青葉ふきゝる梅檀の花  
一枚のむしろに晝寝押あひて  
柄も小鎧も古き脇ざし  
月影に苞の海鼠のさがるなり  
堤おもては田の中の道  
家々はなよ竹原の間にて  
御寮は月に十五盃有  
秋もやゝ今朝からさむき袷がけ  
雁より鴨のはやう来て居る  
抱きこみて松山ひろき有明に  
逢ふほどの人魚くさき也  
雨乞のしぶりながらに降出して  
紡苧をみたす櫛ばこの蓋  
極樂でよき居處を頼みやり  
しはうきたなう浮世經に覺  
道もなき晶の岨の花ざかり  
半夏を雫子のむしる明ぼの  
獵船の出水にくだるうす霞

之  
去  
芭蕉  
然  
艸  
考  
道  
來  
然  
明  
考  
野  
去  
支  
丈  
惟  
芭  
去  
之

塔にのぼりて消るしら雲  
賣りにやる竹の子ほりて惜むらむ  
茶どきの雨のめいわくな隙  
此ごろの上下の衆のもどらまし  
腰に杖さす宿の氣違  
わら苺に夕氣のなりのおもたくて  
ちら／＼鳥の渡り初けり  
朝の月起き／＼たばこ五六服  
分別なしに戀に仕かゝる  
蓬生におもしろげつく伏見わき  
加減をせゝる淺漬の桶  
出来てくる青の下染きに入て  
何をけら／＼笑ふ髪ゆひ  
吸物で座敷の客をたゝせけり  
肥後の相場をまた聞てこい  
幾くちか花見のつれのさははれて  
日ぐせになりし春の雨風

二六一 歌仙 (刀奈美山)

然  
考  
道  
來  
芭蕉  
然  
明  
道  
來  
芭蕉  
然  
明  
考  
道  
來  
芭蕉  
然  
明  
考

〔一〕「一葉集」に、  
「立たせたる」  
〔二〕「一葉集」に、  
「花見のつれ  
に」

連句集

蕉翁の菅柿舎に寓居し給ひけるころたづねまゐり  
て主客三句の情をむすび立歸りぬるをその後人々  
まゐりける序終に一卷にみち侍るとて去來がもと  
より送られける(浪化)

葉がくれをこけ出て瓜の曇さ哉  
野松に蟬のなき立る聲  
歩荷持手振の人と咄して  
かごと御供の間ひとぎるゝ  
半時ほど夜のかゝりたる月の入  
火のはち／＼と燃てやゝ寒  
軒口は蔭はひのぼるふしん前  
兄弟どもが兄をあがむる  
切立て鳥見わたす丹波やま  
そろ／＼出す冬のうり物  
寄合は鯨のとれぬさたばかり  
あかうすゝけしあんどんのさや  
ちくとした風呂敷さげて戸を蔽  
こそり／＼とそよぐ黍の葉  
砂川の浅くながるゝ夕月夜  
露しとれども輕荷ふらつく

去來 芭蕉 之道 支草 惟然 野明 野童 野童 野明 野童 野明 野童 野明 野童

百道ふ花の木かげの店屋もの  
茶種臘に西を見はらす  
此寺に楞嚴よめしこそぞの春  
獵場の公事のむづかしうなる  
朝の内むす子に馬をおはせやり  
餅つきあげて汁粉もり出す  
はご板の寄て一間にあまるほど  
借上いふて妾たづぬる  
茶小紋にろの十徳のすんがりと  
手舟さつさと秋は來にけり  
此夕月を野にとり山にとり  
しづが晶のなることがらつく  
雨氣づく鉢の戻りのはら／＼と  
早ふ出來たる市の小屋懸  
此ごろの化物ばなししづまりて  
むこと男のなほる挨拶  
お局の里下しては涙ぐみ  
ぬつたはこより物のだし入  
花の香の暫く止め宮うつし

道來 草考 然童 明道 來草 考童 然童 明道 來草 考童 然童 明道 來草 考童

日がな一日鳥のさへづり

二六二 歌仙 (市の庵)

閏五月廿二日 落柿舎亂吟  
柳小折片荷はすゝし初真瓜  
間引捨たる道中の稗  
村雀里より岡に出ありきて  
堀かけ渡す手前石がき  
月残る河水ふくむ船の端  
小鯛かれて砂に照り付  
上を着てそこらを誘ふ慕參  
手桶を入るゝ御通のあと  
瘡にも食はいつものごとくにて  
大工の邪魔に鋸をかる  
竹種の水波かくる庫裏の先  
便をまちて酢徳利をやる  
降出しも忘るゝ雨のした／＼と  
惣々やめにしたる洗足  
打籠を焼と給と兩方に

芭蕉 酒堂 去來 支草 丈草 素牛

黒みてたかき徑の木の森  
月花に小き門を出ッ入ッ  
巢おろす兄の登る腰板  
陽炎に眠氣付たる醫者の供  
新茶のかざのほつとして來る  
片口の溜をそつと指し出して  
迎をたのみ明日の別端  
薄雪の一箇庭に降渡り  
御前はしんと次の田樂  
追込の網を鼠のならす音  
隣の明屋あらし吹也  
葬禮の跡で経よむ道心坊  
手拭脱ておろす牛の荷  
川ひとつ渡りて寒き有明に  
岩にのせたる田上の庵  
正月もいにやれば淋し廿日過  
種漬に來るとゝの名代  
咲花の片へら残スしほ鯉  
彼岸をかけてお隙さゝやく

明 焦堂 來草 考童 牛草 素牛 蕉堂 來草 考童 牛草 素牛 蕉堂 來草 考童 牛草 素牛

牛蕉 堂蕉 來草 考童 然童 明道 來草 考童 然童 明道 來草 考童 然童 明道 來草 考童

(一)素牛は惟然の  
前誠

連句集









〔一〕「葉集」に、『あられ片よる』  
 〔二〕「葉集」に、『落』と記す  
 〔三〕同に、『豆腐賣き』と記す、ウリキルと讀めて宜しからず  
 〔四〕同に、『細ほどき』と誤る  
 〔五〕「壬生山家」に、『北の春風』とあれど、今「葉集」に従ふ  
 〔六〕「葉集」に、『わろき』と誤る、又『ほめ』と記す  
 〔七〕同に、『もる』と記す

一升は代を持て來ね酒の粕  
 盥のそこに霰かたまる  
 燈に革屋細工の夜は更て  
 颯の聲の棚本の先  
 帚木は蒔ぬにはえて茂る也  
 干帷子のしめる三日月  
 神主は御供を持てあがらるゝ  
 しばらく岸に休む笈士  
 衣着て旅する心しづかなり  
 加太へはいる關の別れど  
 耳聾をそがるゝやうに横しぶき  
 行義のわるき履ひ六尺  
 大ぶりの蛸引あぐる花の陰  
 米の調子のたるむ二月

二七二 歌仙 (壬生山家)

土 惟 望  
 芳 然 翠 蘇 刀 翠 雖 芳 蕉 袋 翠 雖 蕉 刀 芳 翠 蕉

すればするほど豆腐賣レ切  
 大八の通りかねたる狭小路  
 師走の顔に編笠も着ず  
 瘦ながら水仙ひらく川おもて  
 野中へ牛を綱ほどきやる  
 嫁入の來てにぎやかな門まはり  
 杖と草履を預りて置  
 一位氣色立たる月夜影  
 鱸釣なり鎌倉の浦  
 大鳥のわたりて田にも畠にも  
 蕎麥粉をふるふ帷子の裾  
 立ながら文書で置く見世の端  
 錢持手にて祖母の泣るゝ  
 まん丸に花の木陰の一かまへ  
 どこやら寒き春の北風  
 旅籠屋に雲雀が啼ば出立杖  
 ならひのわるき子を譽る僧  
 冬枯の九年母をしむ霜覆ひ  
 たま／＼すれば居風呂の漏

九 卓 芭 猿 雪  
 芝 蕉 袋 芝 雖 芳 蕉 雖 袋 蕉 雖 然 翠 芝 節 袋 蕉 雖 芝

〔一〕同に、『一間』  
 〔二〕同に、『つかはるゝ』と誤る  
 〔三〕同に、『間があれ』と誤る  
 〔四〕同に、『止た』  
 〔五〕同に、『花の浪よる大手先』とす  
 〔六〕同に、『〇』とす  
 〔七〕「夜日記」によれば元祿七年九月三日興行せるものなり  
 〔八〕「葉集」に、『元代』

持鍵の一間所にはいりかね  
 あほうつかへば皆つかはれる  
 宵の口入みだれたる道具市  
 茶の吞ごろのぬるき小薬罐  
 間あれば又見たくなる繪のもやう  
 ともに年寄逢坂の杉  
 有明にしばしへだてゝ馬と駕  
 露時雨より頭痛やみたり  
 引立てゝ留主にして置く萩の門  
 ひとりたまかにはこぶふる竹  
 ふら／＼ときせる〇付る貝のから  
 いくつくさめのつゞく朝風  
 さは／＼と花の……大手に  
 柳にまじる土手の若松  
 右元祿七・八月廿四日

二七三 十六句 (一葉集)

土 惟 然  
 芳 然 翠 袋 翠 然 雖 芝 芳 節 袋 蕉 雖 然 節 芳 翠

おもしろく嘶す間に月暮て  
 また入人なき次の居風呂  
 はこぼする道具そこ／＼置直し  
 日のさしこみに雀來て啼  
 冬はじめ熟柿を包むすぐり藁  
 置て廻りし伊勢の御祓  
 庇さへなくて古風の家造り  
 内儀出て來る酒のとれ際  
 ちりつきて又も痛める頭はげ  
 今宵は冷る浅茅生の番  
 有明より國よりはれて一かへし  
 見するほどなき沙魚籠の内  
 弓はて／＼はら／＼歸る丸の外  
 繩を引はり壁の上ぬり

二七四 歌仙 (俳諧集)

芭 猿  
 芝 蕉 然 芳 蕉 雖 芳 然 雖 蕉 然 芳 蕉 雖 然 翠 芝 節 袋 蕉 雖 芝

〔一〕「袖草紙」に、  
「ことしはわ  
けて」

連句集

ことしはきけて里の賣家  
四五人で萬事をしまふ能太夫  
いきりし駒に鞍を置かね

けさの雪この頃よりもたつぷりと  
屏風疊で膳すゆるなり  
段々上州米の取さばき

わか手の衆はそりのあはざる  
鼠ゆく蒲團のうへの氣味わるく  
風になりたる八專の雨

いそがしき體にも見えず木藥屋  
三年立ど嫁が子のなき  
雞の白きは人にとらせけり

膨みもはてぬ佛あかつく  
はつ花の垣に古竹結わたし  
道はかどらぬ月の朧さ  
はら／＼と雉子に小鳥のおどされて

鹿ヶ谷へも豆腐屋は行  
年切の小さい顔に角を入  
水風呂の湯のうめ加減よき

雪 猿 望 惟 卓

芝 雖 翠 然 袋 代 考 芝 雖 翠 袋 然 子 袋 蕉 翠 雖 芝 考 代 袋 然 子 雖 考

一二本竹伐たればかんがりと  
愛宕の燈籠ならぶ番小屋  
酔ほれて枕にしたる鴛の縁

花ぎつしりと付し水仙  
味噌賣の宵間／＼に音信て  
木綿を藍につきこみにけり

有明に本家の靱を磨しまひ  
茄子ばたけに見ゆる露しも  
此秋は蝮のはれを煩ひて

僧と俗との坐のわかるなり  
呵るほどよふ焚付ぬ籠の下  
芝切入て馬屋葺ける

花寒き片岨山のいたみ咲  
春の日南に晝のしたゝめ

二七五 五十韻 (蜜柑の色)

戊九月四日會談雜亭  
松風に新酒をすます夜寒哉  
月もかたぶく石垣の上

考 蕉 雖 芝 代 然 子 蕉 翠 芝 考 代 雖 考 支 猿 考

〔一〕「蜜柑の色」に  
「鳥の袴」とあ  
れど、今「一葉  
集」に従ふ  
〔二〕「蜜柑の色」に  
「せり／＼」と  
あれど、今「一  
葉集」に従ふ  
〔三〕原作は「同じ  
事」  
〔四〕原作は「又せ  
り返す」  
〔五〕原作は「一里  
の渡し」  
〔六〕原作は「朝霜」  
〔七〕「一葉集」に、  
「入梅の雨」  
〔八〕「蜜柑の色」に  
「さげはしみ  
なり」とあれ  
ど、今「一葉集」  
に従ふ  
〔九〕原作は「巳の  
日の風に」

連句集

町の門おはるゝ鹿のとび越て  
きてはゆかたの裾を引する  
廿日とも覚えすに行うつかりと  
この山かりて時鳥まつ  
鹿相なる草履の尻はきれかゝり  
床であたまをこそ／＼とそる  
夷講稿の袴を手にさげて  
喧嘩の中をむりに引のけ  
仕合と矢橋の舟をのらなんだ  
あふげど餅のあぶれかねつる  
せか／＼と泣子を籬につきすへて  
大工屋根やの歸る暮過  
用の有時はかけ込藪どなり  
雨のふる日の節句ゆるやか  
きわ墨を置直しても同じ顔  
親といふ字をしらで幾秋  
月影に又くり返す責念佛  
かりたふとんのあとのひやゝか  
咲花に毎年嘶すつれ斗

芭 雪 惟 卓 望

蕉 芝 然 袋 翠 考 芝 雖 蕉 翠 袋 然 子 袋 蕉 翠 雖 芝 考 代 袋 然 子 雖 考

陽氣をうけてつよき縁げた  
幸と獵の始めの雉うちて  
内義の留主に子供あばるゝ  
道場の門のさし入だゞくさに

一里の舟も腹のすきたる  
山はみな蜜柑の色に黄になりて  
日なれてかゝる畑の露霜  
母方にはなれて月の物淋し

鼠の籠るまき藁のうち  
傍輩の髪を結あふ繼の雨  
看出す程さけはしむなり  
小倉とはむかひ合の下の關

先度の風に人死がある  
水くさき千日寺の粥喰て  
齒かけ足駄の雪に埋まれ  
漸に今はすみよるかはせ銀

加減の薬しつぱりとのむ  
澁紙をまくつてとれば青墨  
こぼれて生る軒の花げし

袋 芝 考 蕉 雖 芝 代 然 子 蕉 翠 芝 考 代 雖 考 支 猿 考



しるし見わけてかへす茶筵  
 めつきりと油の相場あがりけり  
 又何所へやら羽折着て行  
 名號をよう見せたとて樽肴  
 竹橋かくる山川の末  
 大根も細根になりて秋寒し  
 若狭戀しう月のさやけさ  
 ゆるされて寝れば目がすむ夜永さよ  
 半造作でまづ障子はる  
 氣みじかに針立ふいと歸らるゝ  
 地のしめるほど時雨ふり出す  
 雌メの此中うせて一羽雞  
 ふりあきなひに棒さげて行  
 船入をあちに住なす三井の鐘  
 枯た薪を澤山にたく  
 人ひとの尻も居らぬ花盛  
 組のはづれを雉子うつり行

二七九 歌仙 (畫兄弟)

然堂考流道蕉流道堂止然蕉考堂道流蕉

秋もはやはらつく雨に月の形  
 下葉色づく菊の結ひ添  
 こつそりと獨りの當に蕎麥操て  
 手間隙いれし屏風出来たり  
 朝寝する内に使のつどひ居る  
 繩切ほどく炭の俵口  
 此際ウは齋にてあへる市のもの  
 逢坂暮し夜の人音  
 美しき尼のなまりの伊勢らしく  
 住むに過る湯どの雪隠  
 木の下で直に木練を振まはれ  
 早稲も晩稲も米になりけり  
 月影はおもひちがへて夜が更る  
 奉行のひきの甲斐を求し  
 高うなり低うなりたる酒の辭義  
 財布切らるゝ柴賣の連  
 さく花に内裏の浦の大へいさ  
 馬を引出す軒のかげろふ  
 雇人ニの名を忘れたる節の客

車惟游酒支共芭

考然道堂蕉考然刀柳庸堂蕉庸然刀堂考柳蕉

二八〇 半歌仙 (俳諧集)  
 二八〇 半歌仙 (俳諧集)

手ばやく埒を明る縁組  
 藪先の窓の障子のあたらしく  
 焼てたしなむ魚串の煤鯨  
 此錢の有うち雪のふれかしと  
 宵の口よりねたたやしけり  
 相撲取の宿は夕飯居へならべ  
 疇を打越すはつ汐の浪  
 日は入てやがて月さす松の間  
 笑ふ事より泣がなぐさみ  
 洗濯のおそきを文でせつかるゝ  
 十夜の明に寒い雨降る  
 逗留は菜で馳走する由家衆  
 あつらへて置白のかすがい  
 一二町つけ出す馬を呼かへし  
 雞おりる長塀の外  
 花ざかり何ぞといへば立て舞  
 上髻あつてあたゝかなかほ

二八〇 半歌仙 (俳諧集)

堂庸然蕉刀考柳堂蕉庸然刀考蕉堂柳庸

秋アキの夜をうち崩したる嘶かな  
 月まつほどは蒲團身にまく  
 西の山二はな三はな雁鳴て  
 ひかゆる牛のよくうごくなり  
 男の名まんまと囁ふ眞性者  
 小袖を出して寝たる大とし  
 使ウやる所をはたと打わすれ  
 かへても醫者の見廻れにけり  
 拭ヌグひ立惣トの柱きらくと  
 寄て揃る辨當の椀  
 糺より黒谷かけて暮かゝり  
 薄がなくば野は見られまい  
 鹿の來ぬ夜は宿賃が百の損  
 雨氣の月の細き川すぢ  
 火燈カして薬師を下る誰が嬾  
 七種まではよろづ隙なき  
 見せ馬の荷鞍のあかね花やかに  
 小屋コかたならぶ金杉の春

支惟飄游酒車芭

然堂刀蕉庸然考刀堂庸蕉考然竹刀堂庸蕉

二八一 半歌仙 (其 便)

所思

此道や行人なしに秋の暮  
 岨の晶の木にかゝる蔭  
 月しらむ蕎麥のこぼれに鳥の寝て  
 小き家を出て水波む  
 天氣相羽織を入れて荷拵へ  
 酒で痛のとまる腹癢  
 片つかぬ節句の坐敷立かはり  
 屏の覆ひにあかき梅ちる  
 線香も春の寒さの伽になる  
 惠比須の餅の残る二月  
 兵の宿する我はねぶられず  
 かぐさき茸に交るまつ風  
 はら／＼と山田の稻は立枯れて  
 地藏の埋る秋は悲しき  
 仕事なき身は茶にかゝる朝の月  
 鹽飽の船のどつと入り込

芭 泥 支 游 之 車 酒 畦 惟 龜

蕉 足 考 刀 道 庸 堂 止 然 柳 足 蕉 庸 考 道 然

散花に暮の芝引吹立て  
お傍日永き醫者の見事さ

二八二 歌仙 (菊の塵)

白菊の目に立て見る塵もなし  
 紅葉に水をながす朝月  
 冷々と鯛の片身を折まげて  
 何にもせずには年暮行  
 小襖に座右の銘は煤びたり  
 みやこをちつて國／＼の旅  
 あらたまる秤に銀をためてみる  
 袖ふさぐより親の名代  
 垣越にちよつと盥の禮いうて  
 普請のうちには小屋で火を燒  
 歸らぬにきはまる娘のさめすまし  
 酒買てのむ早稻のすり初  
 はれ／＼と月の出かゝる杉の森  
 夜話ひけたる町宿の秋  
 とれたやら濱から通る看籠

芭 園 諷 渭 支 惟 酒 舍 何

蕉 女 竹 川 考 然 堂 羅 中 蕉 女 竹 川 考 然

止 堂

(一) 其便に『此集を録んとす久々難波の舟撒し給へると開て直にかのあたりに訪ふ歌仙を食り吐止亭の懸を吟じて予が集の始終を測るものならし』と小序を附せり  
 (二) 『一葉集』に、『折わけて』  
 (三) 『一葉集』に、『酒買うて』  
 (四) 『一葉集』に、『上下』の句を『調竹の句とす』  
 (五) 『一葉集』に、『小かまひに』  
 (六) 『菊の塵』に、『鍋のあたり』とあれど、『一葉集』に從ふ  
 (七) 『一葉集』元祿の夏期に於て芭蕉其角の會すべき筈なし不審也  
 (八) 『一葉集』元祿四年とすれど此の時許六未だ芭蕉に相見せず不審也  
 (九) 『一葉集』元祿七年とす

彼岸のぬくさは是でかたまる  
 青芝はことにもえたつ奈良の花  
 出かはり時の一步たしなむ  
 通ひ路も横にならねばはひられず  
 しどろになをす奥の空櫃  
 あさ／＼と色うつくしき重の莖  
 雪のかへしの北になる風  
 柴賣の隣の子ども連だゝせ  
 清藏口に夜のしらむ也  
 上下の橋の落たる川の音  
 うゑ田の中を鴻ののさつく  
 小がまへに不斷をかるう打なぐり  
 鳥の仕出しのはやる帯機  
 月かげも寒て師走の夜の長さ  
 杖一本を道のわきさし  
 野鴉のそれにも袖のぬらされて  
 老のちからに娘ほしがる  
 餅ちぎる鍋のあたりの賑かさ  
 敷かぬ疊の積てかさなる

堂 蕉 中 竹 川 堂 女 考 然 中 蕉 女 考 堂 川 竹 中 蕉 堂

田の水の注連に流るゝ花盛  
柳のさし木みどりのび行

◎年次不明の部

二八三 三句 (一葉集)

笠寺や乗敷さます一すゞみ  
 二人していざ大なる瓜  
 裁物の麻のきれ端悦びて

間 指 芭 蕉

二八四 三句 (一葉集)

湖水より光り出しけり比良の雪  
 浪にまぶれていさゝとる人  
 哥よめと友がこしたる文ときて

芭 蕉 丈 草 許 六

二八五 三句 (一葉集)

百景や杉の木間にいろみ草  
 箒を杖に咲ふ山公家  
 隣から祝ひと雛の餅くれて

芭 蕉 浪 化 去 來

二八六 表十句 (有也無也圖)

松杉にすくひあげたるみぞれかな

鐘面白う冴るたそがれ

ひたすらにねばる誓の丁子風呂

長い羽折も四五年の内

吹晴てあとは蹄の月まろく

橋まで押してのぼる初汐

鰯網干場を鳶の離れかね

編笠組に入は何故

神明の花に願をひらかせて

天高かれど地にも鼓草

二八七 二句 (一葉集)

何となく柴吹風もあはれ也

雨の夕に牛捨に行

二八八 附句一五 (一葉集)

みづから前句をなして付給ひし分

其一

ころ／＼となるは鈍栗落しなり

その鬼見たしみの虫の父

其二

かれ果てみじかき髪のをしき

琵琶つき立て其かげに泣

其三

龜山やあらしの山や此山や

馬上に酔てかゝへられつゝ

其四

宵の間はかさなる山の月くらく

芋ほりかへす小男鹿の角

其五

笠敷てうれしく今朝となしけるよ

笈かゝへたる小僧わづらふ

其六

冬のきぬたの涙きはつく

世のうらみまだ六位の名に呼れ

其七

芭蕉

同

同

同

同

同

うき戀に文つきかへし咲れて

尻もつたてるうらみ寝の襪

其八

庭のかゞり火たてるたそがれ

うねめ召玉のお膝の打くづれ

其九

端居がちなるあさみ石竹

夏ながらえりふる／＼と物思ひ

祈るしるしのかひなくもあれ

其十

綿ふきありく猫の眞白

人しらぬ中を火燧にもたれ合

師走の日敷折指もなし

其十一

縁に草履の打しめる春

石ぶしに細き小鮎をより分て

其十二

煤掃の道具大方取出し

向ひの人と中直りけり

連句集

其十三

鐘つく人もたへし此寺

朝日さす小松に雪の降かゝり

其十四

櫻をこぼす市のあざけり

大和路へ入日はけふも花曇

其十五

やしきの客はかはる獻立

きのふけふ庭は櫻の物あかり

二八九 附句二 (千鳥掛)

ばせを老人此所に杖を休め給ひ俳談のあまり付句

井にほくども書残し置れけるを反古の中よりさが

し出したつかしきのまゝこゝに記し侍りぬ

其一

琴引ならふ窓によらばや

打提る道にて菊の名を忘れ

其二

酒に興ある友を集る

其二

酒に興ある友を集る

芭蕉

同

ぬけ初るちゝの一齒のかなしくて

同

二九〇 附句一 (誹諧曾我)

南無あみだ此醜は酔になりし

梅

守

旅の馳走に尿瓶さし出す

物一ついえば念佛唱へられ

芭

蕉

二九一 三句 (芭蕉翁真蹟拾遺)

二二六三夕顔や  
の巻り三句日  
の巻所にの次  
物一つとあ  
り且此附句  
は南無あみ  
だ」と念佛  
と釋教打越  
誤あらんは  
錯

仲秋初三夢想

薄原龍のいびきに鹿の聲

御

神の慮にまかす秋風

某

甲

盃のまはる間遅き月出て

芭

蕉

句評集



目次

貝おほひ……………(三九)

田舎之句合……………(三九)

常盤屋の句合……………(三六)

初懐紙 芭蕉註……………(三四)

續の原 芭蕉判の部……………(三六)

貝おほひ

(一名 三十番併諧合)寛文十二年

小六ついたる竹の杖ふしく多き小歌にすがり、あるはやり言葉のひとくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれぶしにうたはしめ、其かたはらにみづからがみじかき筆のしんきばらしに、清濁高下を記して三十番の發句合を思ひ太刀折紙の式作法も有べけれど、我まゝ氣まゝに書ちらしたれば、世に披露せんとにはあらず。名を貝おほひといふめるは、合せて勝負を見るものなれば也。又神樂の發句を巻軸に置ぬるは、歌にやはらく神心といへば小うたにも予がこゝろさす所の誠をてらし見給ふらん事をあふきて、當所あまみつおほん神のみやしろのたむけぐさとなしぬ。

寛文十二年正月廿五日 伊賀上野松尾氏 宗房  
釣月軒にしてみづから序す

一番

句評集

松尾氏宗房撰

左勝

にほひある色や伽羅ぶしうたひ初

三木

右

春の歌やふとく出申すうたひぞめ

義正

左の句は匂ひも高き伽羅ぶしの、うどんげよりも、めづらかに覺侍る。右も又春の歌はふとく大まきにと云ふより、まことに大音のほどもしられ侍れども、一聲二ふしともいへば、猶匂ひある聲に心ときめき侍りて、仍左を爲勝。

二番

左勝

紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ

此男子

右

兄分に梅をたのむや兒ざくら

蛇足

左の赤いこんぶくろは、大阪にはやる丸の菅笠とうたふ小歌なればなるべし。右梅を兄分にたのむ兒櫻は、尤たのもしき氣さしにて侍れども、打まかせては梅の發句と聞えず、兒櫻の發句と聞えず侍るは、今こそあれわれも昔は衆道すきのひが耳

後人の註に「案ずるにこゝろ」とは「小袋のこと」とは「小袋のことにしはねてうたひしなるべし」と

〔後人註に〕案ずるにらうさいと云ふ歌を癡癡のやまひにかけていへるにや

にや。とかく左のこん袋は、趣向もよき分別袋と見えれば、右の衆道のうはき沙汰は、先思ひとまりて、左を以爲勝。

三番

左

なく聲やげに伽羅のはし匂ひ鳥

露 節

右勝

藪にすむうぐひすのうたやお竹ぶし

哉 也

左、伽羅の橋をかきよいのとあるを、匂ひ鳥のはしに取なされたるは、げによくさへづられたる口ばしなれども、右のおたけぶし藪にすむといふより、言葉の茂りも深く、いくふしも籠りて、是も百姓の納米のくだけたる所もなく、上々蟲いらすとかや申侍らん。

四番

左

さかる猫は氣の毒たんとまたゝびや

信 乗 母

右勝

妻戀のおもひや猫のらうさいけ

和 正

〔一〕一本『牛馬ふんこつ』

消殘る雪間や諸あしふんごんだ 一 友  
左の句、雪間をふみわけしつめたさは、うき／＼どつこい、うき世に住めばうさこそまされとうたふは、しかあるべし。太山みやまのがけ道へ引出されたる牛馬うまのふんこつふんこつげに珍重に覺侍る。

〔種彦書人〕

〔下巻狂歌集〕  
牡丹花下の睡  
猫上に蝶のま  
めざますなこ  
てふの夢のふ  
かみ草なれそ  
なれこれね  
こねこの子

右の句、雪にもろあしまでふみ込んだるは、草履のうらもたまるまじく、足もとしらすの龜相ものと見え侍れども、一足とんだる作意もをかしく、また雪に立したためしもなきにあらねば、持とさだめぬ。

六番

左勝

きやん伽羅の香にほへかし犬櫻

正 之

右

見にゆかんとつと山家のやまさくら

意 見

左の句、伽羅の香に匂へとは一句もやさしく、手さはりもむく／＼とむく犬の尾もしろき作意なるに、右の句、さのみ言葉のたくみもみえず、とつと山家のいよ古狸とうたふ小歌なれば、秀逸物の犬櫻に狸は喰ひふせられ侍らん。

七番

左持

たぐりよせんから糸ならばいと櫻

廉 尼

右

春風はるかぜになれそなれそ江戸櫻 信 乗 母

唐糸の句は、長太郎ぶしと聞えよくいひかなへられて、此世のものとも覺えぬは、から糸なればなるべし。

右、またこむろぶしの江戸衆になれそといふを春風になれそと作り立られしは、花を惜む心ふかく、いづれも捨がたく、持に定侍りき。

八番

うたへるや晚鐘ばんね寺ぶしの幕の花

鋤 道

左勝

種ならばまかせておけろ花ばたけ

指 盡 子

右

左は山寺の春の夕暮も思ひ出られ晚鐘寺の花の作意げにおよびなき所なり。

右の句、花の種をまかせが定なら、といて口説てかたりて聞せ侍らん、種をまかるゝ花すきの心も優に聞ゆれど、浮世五十年一寸もまだのびぬ花の枝咲までの間違なれば、先づ目の前の晚鐘寺のけふの花見こそたふとけれ。仍左を爲勝。

九番

録できる音やちよい／＼花のえだ

露節

きても見よ甚べが羽折花ごろも

左、花の枝をちよい／＼とほめたる作意は、誠に俳諧の親／＼ともいはまほしきに、右の甚兵衛が羽折は、きて見て我をり」と云心なれど、一句の仕立もわるく、染出すこと葉の色もよろしからずみゆるは愚意の手づゝとも申べし。其上左の録のはがねも堅さうなれば、甚べがあたたまもあぶなくてまけに定待りき。

十番

暗さわげにほんづゝみの無常鳥

左持

ゆかしきや山の尾常はなきやるもの

右

左は、日本堤の無常の烟も立のびたる句の姿は子規のとりなりもよく見え侍るに、

種彦書入の翁の肖像の大小一... 延寶坊主の翁の肖像の大小一... 種彦書入の翁の肖像の大小一...

右の句は、空なきさうなおつねの顔も、すんといやな気なれども、左にひつびけうんのめ、とうたふ小歌なれば、お常のしやくも捨がたくて、いづれのかちまけをもえさだめ侍らぬは、こゝろきたなき判者なめり。

左勝

郭公谷から峯からこんをせ

右

左は、きやりの音頭と聞えて、くどく言葉の中につな、扱も見事によろ揃うた。

右の句、鶯のかひこの中の郭公と云心をふくみ聲のふしをあらせて、醫者に見すれば玉子じやとおしやるといふ小歌をかり加へられ侍る。伊勢のおたまが事に出れば、玉の句といはんに難なかるべけれど、左の谷から峯からこゝはちつくりこさかしくいひ出されし大持に心はひかれ侍りき。

左勝

右の句、たはんはと云ふしを、言葉にことわられたるは、かやの木どくに思ひよられたり。其上木賣のむすめにふすべられて、われもむかひ火つくらんもむづかしければ、たゞ右の半夜のけぶり立まさり侍らんかし。

右勝

かゝばやな小舞あふぎの織どの繪

左持

左は、かの孫三郎が織手をこめし織ぎぬの、いとしほらしき舞振也。右の句、折節かぜが吹きたと云小歌、扇にいひ叶へられたれば、あなたのかたへはからころひやう、こなたの方へはからころひよつと、勝まけを定めかねしは摸陵の手をはなさぬ扇のかなめも、むくの葉、木賊のみがき骨とも云べければ、扇角力のかちまけなく、持に物さだめし侍る。

右勝

蚊やり火にわれも木賣が娘かな

左勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を、残したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のもとも見えねど、

右勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

右勝



句評集  
ば、あぶなき筒先あしはばやに遊のき侍りぬ。  
二十一番

左

佐男鹿の妻の名もいとし萩の花

鼻毛

右勝

みぞ萩やほそけれど長いぼんのもの 石口

左、萩を鹿の妻といへるを、をかしくうたひなされ侍れ共、みぞ萩のほそけれど長いと云處を能考へて、心のおくをつけて見るに、ほそ長き故にや、一句もすらりと立のびてなれ合たり。左の發句には、はるかにこえたやつさ大いかい物とや申さん。

二十二番

左勝

とりやげばやが右の手なりの紅葉哉

三木

右

もみぢぬと来て見よかしの枝の露

蚊足

左の句、紅葉のきめうの作意也  
右の句よくいひ叶へられ侍れども、もみぢぬか

しを好まるゝは、異風なる物すきにて、色にふけらぬ人なるべし。左の婆々が右の手の赤くなるはいかさま戀をすきもの、言葉の品も大むすこを雲泥萬里のたがひあれば、かゝるめでたき折節を來てみよかしの木刀ならば一本かたげてのがれ候へ

二十三番

左勝

しつぽとやぬれかけ道者北時雨

餘淋

右

しぐるおとやさつさやりたし養と笠 政當

左のぬれかけ道者は、ぼつとりものゝ、しなもののゝ、袖にしぐれの通りものとや申さん。  
右の句さつさやりたし、なんしゆんさまと、うたへば、あつたものぢやないはさてと、いはまほしけれど、とてもぬれよならなまなかしぐれはいやよ、君がなみだの雨にしつぽとぬれかけ道者を、例のかちとや定めむ。

二十四番

左持

れたるは、桶の底意深いひ立てられ、樽のかゝみともなるべき句なれば、かん鍋のふた目とも見ず、かちのかちとさだめぬ。されど判者もひとつ過て耳熱し、目もちろ／＼りのみぞれ酒、のみこみ違ひも有やせん。かやうにはほむるとも、さのみに勿體付さすな。

二十六番

左持

わる音はかんからめける氷かな

勝云

右

そこでさせ氷のしたの月のかげ

城次

左の句、こがねのはしはかんからめくにと云小歌を、わつ／＼くどいつ云立られたれば、氷のはり臂にて、自慢せらるゝもことわりなるべし。

右又、居合躰のそこでさせと云を、氷にとぢあはされたるは、げによく思ひ月影のひかつた句作とも申べければ、勝まけのわいだめをさだめん事、おろかなるさえのおぼつかなく、深き淵に臨むがごとく、うすき氷をふんでとりて、持ときはめ、

の國のしよし  
やむしや寺の  
おつきやがお  
とまりぢや  
(七)一本『足も』  
(八)種彦書入  
「うんのめ」前  
の無常鳥の註  
に見えたり  
(九)種彦書入  
「十訓抄」一の  
巻、昔し中納  
言和丸と開  
ゆる人おはし  
けり(中略)大  
なる蜂一、二  
二百うちと  
れていくらと  
もなく入集る  
もいと氣むづ  
かしく見え  
た  
(一〇)一本『もみぢ  
ぬも』  
(一一)一本『しぐる  
ゝおとや』  
「種彦書入」  
「類下徒然草」  
寛文十一年  
花時右近  
のはだへこま  
やかにして、  
ぼつとりと  
はゆらしきし  
なものはなり  
記「東海道名所

萬治元年  
かぶきの少年  
の事をいふ條  
に「かざりたて  
つる藪うちあ  
げたれば階が  
いでりねり  
つたものはあ  
ないと思はる  
ないと思はる  
「垣下つれつ  
松島市之丞  
いちの上あつ  
たも、ではな  
ら板や  
(一二)一本『あしき  
ば』  
(一三)一本『面白  
くて』とありい  
かい  
(一四)一本『勝負』

酒の酔やすぢりもちりの千鳥足

餘淋

右

から白の代のちんどり足をふめ

三竿

左の酒の酔は、まことに一盃過たるとみえて、足もとはよろ／＼と弱く侍れども、一句たしかにひ立られて、下戸ならぬこそ男はよけれともいへば、おもしろく侍るに、右のちんどり足ごぼ／＼とふみならずから白は天の原をふみとどろかす神鳴の袂箱もちの器量にもすぐれて、骨ぐみつよく足の筋骨もたくまじければ、作者のちからも強さうにて、いづれも千鳥のあしき所なければ、爲持。

二十五番

左

しやうことかたまらぬものはみぞれ哉

鼻毛

右勝

みぞれ酒元來水ちやとおぼしめせ

一入

左の句、しやうことかたまらぬといはれしは、みぞれのふる句とも見えず。われも面白てたまらぬに。右は元來水ちやと云小歌をみぞれ酒に作ら

二種彦書入  
「いかのほり」  
越後さらし

世の人のそしりを、けふよりしてのち、われまぬ  
かれん事をしんぬるかな。

二十七番

左

越後布か松の葉はんの雪のいろ 正 之

右 勝

降つる雪やしら藤こふじ山 義 正

雪の色を越後布に見立られたる左の句は、げに  
も手きよのしわざにて、あさ糸のよりもよくか  
りたるにや、わらはれぬ作意なれども、松のは  
んと云事、小歌のふしは尤ながら、一句のはたら  
き見え侍らす。

右は、しら藤こふちを富士に取なされ候こと、

まことに名高き不二には、いかでか肩をならべ侍

らんと、左の越後布を安うりにまかせせたるは、  
さぞもとねになりかねや侍らん。

二十八番

左 持

炭の荷や付てうるしいこんだ馬

吉 勝

右

炭頭けふるやすんといやな木ぢや

善 勝

左、炭をうると云かけられたるは、げにうるし  
いこんだ馬のあしき處なく、一句もよくいひ立が  
みの、けおされぬ作者也。

右の句、すんといやなきとはあれど、氣のどく  
たんといひ叶られたれば、今更けし炭となさんと  
もおぼえず。勝負に世話をやく炭がまの、口く  
いづれも捨がたくて、持と定め侍りき。

二十九番

左 勝

掃除して瓢箪たゞき、炭ぼこり

右

不 屈

炭焼やおのが先祖はよくしつた

一 入

左、炭とりべうたんを、たゞきて掃除したるは、  
手もまめなる處あらはれて、奇麗なる發句也。

右は、野郎さぶとく出中な、おのが先祖はよく  
知つたと云ふを、小野炭に取なされたる事、尤炭  
頭をかたぶけて感じ入侍れども、先祖をよくしら

ふと同じ語勢  
なり一歌にて二  
句とも明かな

種彦書入  
うれしいうをう

當世の流言、

ことだをこん

だことなりそ

六方割なりそ

いひかけたり

「ト幾狂歌集」

湯治土産に木

箱をねはりか

地ちねりつけ

たりぬりつけ

かへとありけ

れば當世はや

りことばにて

よめる

たまはりし木

組にうるし

けな

「一葉集」に、

「炭かしら」と

記す

種彦書入

野郎さぶとく

れん事わきまへがたく、只左のへうたんの軽口に  
まかせて勝と定めたるは、をかき判とゆふがほ  
の、ひよんな事にやあらんかし。  
三十番  
左 勝  
犬の鈴やいきくびしやだんの神々樂 此男子  
右  
舞衣やをかみの出立神樂神子 一 友  
左の犬の鈴の句、まことに人作の及ぶ所にあら  
ね共、いきくび社壇もうごき、御社のおやぢさま  
も御感心淺からず、末社のほこらのこや／＼まで  
も、いきくびごたいをかたぶけれん事うたがひ  
なくおぼえられ侍る。  
右のをかみの舞衣、ひとへに聞えて手うすき作  
意なれば、まけの上のまけたるべし。とかく息災  
延命の神樂歌を舞のきにのき給へとぞ。  
附貝於保飛跋  
松尾氏宗房雅伯爲予斷金之友、其性嗜滑稽、滑  
心於談諧、者幾換伏臘矣、今茲春正月閑暇之日

以童謡俚近之語作狂句者總若干采而輯之分三  
是於左右以判斷其可否誠錦心繡口擊節嘆賞  
焉。臨編既成請予爲後序、雖生素以一切惚之情  
不忍袖手旁觀、文雖慚、幸約一言、以續于  
後云  
寛文壬子孟春日

伊陽城下横月漫跋

田舎の句合 (延寶八年)

桃翁羽々齋にひまして、爲に俳諧無盡經をとく。  
東坡が風情、杜子がしやれ、山谷が氣色より初て  
其體幽になどらかなり。ねりまの山の花のもと、  
渭北の春の霞を思ひ、葛西の浦の月の前、再江東  
の雲を見ると、螺子此の語にはすんで農夫と野人  
とを左右にわかち、詩の體五十句をつる。章の  
ふつゝかに、語路の巷のまがり曲れるをもつて、  
田舎とは名付たるなるべし。仍以これに翁の判を  
獲たり。判詞莊周が腹中を吞で希逸が辯も口にな  
るす。遠くきく大江の千里は百首の詠を詩の題に

ならひ、近所の其角は誹諧に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なることを知る。しるといへば、我是をしるに似たり。しらずしてこゝに筆をとる、又是しらざる也。

延寶八歳次庚申仲秋日

嵐亭治助謹序

第一番

左持

霞消て富士をはだかに雪肥たり

右

菜摘近し白魚を吉野川に置いて見う

先左の句は、卷頭の一句と見えて、豊にして長高し。また初春の體、霞みもやらで、あり／＼と見えたる不二のけしき、雪肥たりと云所奇也。古人春雪瘦タリなど、作れる便多きにや。右の句、菜摘と云より、吉野川に白魚をねがひたる一興、尤妙也。山の妾川の流、見處多し。

第二番

左勝

農夫

春の水やかろく能書の手を走らす  
右  
引かへつ蕪をはたのに春の駒  
岩間をとちし苔の下水、さら／＼と流出る波の文、羲之が石すり、懷素が自叙帖の筆のわしれるがごとし。右の句論するにたらず。

第三番

左持

宿の梅櫻いかばかり青かつし

右

青柳に蝙蝠つたふ夕ばえなり

左右の妾詞、此句にとゞまり侍る。かの山谷が烟雨ニ青カツシガ己ニ黄ニナンヌト、作れる梅の詩に似たり。其體つよくして優あり。又柳につたふかはほり、鶯よりも猶興あり。よわ／＼と見え又つよし。左は唐繪、右は大和繪、墨繪にしやれて色繪にうるはし。法印も筆を捨、予も又筆をなげうつ。

第四番

野人

庄司其右衛門の事なれば  
名家の御社に  
御長に納り  
やちさまた判  
は則に書きし  
「源氏物語」常  
夏巻のこた  
名もたちくた  
れど御前やう  
さぶるに御  
のさぶらつて  
のさぶらつて  
のさぶらつて  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに  
あはれに

左

歸雁米つきも古里やおもふ

右勝

今案スルニ寒食の家には自身番

越路に歸る雁がねに、米つき古郷をしたふ、哀深からぬにはあらざれども、寒食の自身番珍し。この日は火のさたを忌といへば、批言の批をも忌べき也。

第五番

左持

德利狂人いたはしや花故にこそ

右

櫻狩けふは目黒のしるべせよ

德利をいだいて、花にたはふる、狂人深切也。又目黒が原の遠のさくら尤やさし。上野谷中の櫻を見盡したる體、言葉の外にあらはれたり。兩句幽玄差別なし。

第六番

左

句評集

農夫

俗にいふうぶめなるべしよぶこ鳥

右勝

駕に乗て春を送るに白雲や

喚子鳥、予先年吟先生にまみえて此事を尋侍れば、傳受の事誹諧にせんこと無用のよし。又うぶめ、李時珍が説に姑獲鳥と書り。鳥と云字によせて思ひ出られ候にや。猶批判なりがたし。且右の句の駕に乗て無窮の空々たるに逍遙せんこと、樂猶窮なるべしや。

第七番

左

今日にかはる淨瑠璃殿の青すだれ

右勝

何と夏羽織縮緬は重し紗は輕し

青簾よく云叶侍れども、夏羽折重からず、輕からず、中庸の中を用ひてしかるべきよし、兼才寺の入道前の關白とやらのせりふにもかゝれたり仍以夏羽織勝と定め侍る

第八番

(「雨」字恐くは

鐘カンノ驚破ほととぎす草の戸に  
左勝 農夫

時鳥家隆のうそやきりくす  
右 野人

草の庵の夜の念佛先殊勝。家隆のうそとはほととぎす聲も絶にし垣根よりしのび音になくきりくす哉、とよめる心にや。誰まことより此うそを用ひんか。されども鐘の音のはるかに聞ゆるを、時鳥に心付たるありさま、猶可ナランヤ。  
第九番

壁の麥葎千年をわらふとかや  
左持 農夫

摺鉢の早苗穂に出る秋こそあらめ  
右 野人

壁に生る麥は朝菌の晦朔をしらす。冥靈大椿を論ずるに似たり。又摺鉢の早苗に秋おもふこと、かの二葉吹くだに萩の上風とよみ給ふ心もおのづから也。左は虚也、右は實、花實いづれをかとらん  
第十番

藻の花や海老こす袖にさざれ浪  
左 農夫

何を音にすばん鳴らん五月雨闇  
右勝 野人

藻の花のいさぎよきに、小えびの飛ちがふけしき、涼しくしほらし、右の句は、川越の遠の田中の夕やみに何ぞときけば龜ぞ鳴なると聞え侍る。小えびも捨べきにはあらねど、予は龜に乗て遊ばん。  
第十一番

むかし匂ふ花さへ實さへ陳皮さへ  
左持 農夫

蚊遣火に夕がほ白しだい／＼は  
右 野人

枝に霜おけとよまれたる、常盤木の緑青々と、うるはしく仕立られたるに、右又かやりの煙の中に期々見つる夕がほの白く咲て、軒に干れし橙の色をあらそふも、又をかしくこそ侍らめ。  
第十二番

石の枕に鮎屋ありける今の茶屋  
左 農夫

芝物の涼しき常夏の巻を見て思ふ  
右勝 野人

石の枕、古歌明也。並木の茶屋の繁榮も其ひとつやの名残とや。且芝肴の取ませ、かの巻の鮎石ぶし、御前にて調じさせ給ふ、折ふし思ひやるさへ涼し。  
第十三番

袖の露も羽二重氣にはぬぬもの也  
左勝 農夫

夢となりし骸骨踊る萩の聲  
右 野人

羽二重の袖の露は、貴人の心に秋至らず、と作れる詩の心を、おもひよせられたるにや。右また骸骨の萩の聲をかりたる、さも有べきことながら左の感淺からず覺侍る。  
第十四番

左持

農夫

句評集

月のさそふ詩の舟か山市か川武か  
右 野人

公任卿歌の舟に乗て秀歌よみ給ふよし。これは是山一丸川武の舟はたを敲て、いかなる秀歌うたふにや。右はまた眞木の板戸もさすねにけりなどよめる、月にわすれたる柴の戸のしりさし、咎なし難なし。  
第十五番

眺め送る函谷やけふ驢馬迎  
左持 農夫

霧汐烟行徳かけて須磨の浦  
右 野人

函谷關の驢馬  
行徳の汐燒、眺望いづれも  
珍重なるべし  
第十六番

左勝

農夫

分限者に成たくば秋の夕昏をも捨よ

三三三



右 野 人

秋の心法師は俗の寢覺かな

先、左の句珍重。法師の寢覺俗にかへらんこと尤さも有べきや。兩句辯じがたきに仍て、大福山金徳寺の和尚にまみえて問フ。答テ、假にも無常を觀する事なかれ、一錢をえたらん時は、神のごとく如レ君せよと、仍て右の句閉口ス。

第十七番

左 農 夫

碓の町妻吼る犬あはれなり

右 野 人

芋を植て雨を聞風のやどり哉

左の句、里の碓といはんは古しとて、碓の町と云、妻戀る鹿は不珍とて、妻吼る犬といひしは猶作の中に作有て、いさゝか作過たるにや。

又芋の葉に雨を聞かんは、まことに冷しく淋しき體、尤感心多し。是孟叔異が雨の題にて、檐聲和月落ニ芭蕉ニと作れる氣色に似たり。右勝たるべし。

第十八番

左 農 夫

月日の栗鼠葡萄かつらの甘露有

右

紀路行山はみかんの吉野哉

野 人

鼠をりすと作意して、ぶだう葛の甘露とつゞけり。右の句は信章子が句に

茶の花や利休が目にはよしの山、と作れるに、いさゝか俳の似かよふにや。強て心を別たん時は等類の難とも云がたく侍れど、甘露の一滴には我も前後を忘れたるなるべし。

第十九番

左 農 夫

時雨瘦松私の物干にと書り

右 野 人

風となりぬ蝸牛の空セ貝

和歌三體に、秋冬の歌はほそくからびてと云り。瘦松のしぐれもさびしく、蝸牛のうつせ貝もさびたり。されども、かれが角の上にあらそはん時は

右いさゝかまさりなんや。

第二十番

左 持 のうふ

金藏のおのれとうなるなり霜の聲

右 や 人

啼千鳥幾夜あじかの夢おどろく

豊山のかねくら、おのれとうなり、かよふ衝の鳴聲に、海鹿の夢もおどろくべしとや。兩句目さむる心地して蓬々然たり。

第二十一番

左 持 農 夫

侘に絶て一爐の散茶氣味ふかし

右 野 人

火燧のうたゝねや夢に眞桑を枕にす

口切の一句、手づから罐子を鳴らし、茶袋を洗ふ。鹿茶淡飯の樂はいかなる侘助にや、又火燧のうたゝねの夢は、列子曰、陽氣壯則夢涉ニ大火ニ燔燔又籍ニ帯寢則夢蛇云々。是を以これを思ふに、爐邊のあたゝかなるに、瓜を夢みん事さも有

りつべし。

第二十二番

左 持 農 夫

雪おもしろ軒の掛菜にみそさとい

右 野 人

雪にとへばかれも蘇鐵の女なり

左の句は、をかしき處に、風情をもとめて風情あり。適、山家のけしきを見るに、此鳥必軒近く啼て、雪の折ふしなどは、一入人家をはなれず。山里のさびしさ、まことに思ひ合せたり。右も又雪中のそてつの詠、餘情かぎりなく、雪と雪とのあらそひ、いづれも白し。

第二十三番

左 持 農 夫

詩人ゆるせ松江の河豚といはんに

右 野 人

鯖にこりす鯉にこりす雪の鯉

金澤のあそびたのしいかな、けふの薄暮にあみをあけて、狀松江のかとんを得たり。昔は鱸今は

ふぐ、古風は鱸魚を愛して河豚をしらず。又右の  
腹數寄、さばにあてられ、かつをにゑひての上、  
しばらく用捨あるべし。

第二十四番

左勝

農夫

題山家之糠味噌

閑居のぬかみそ浮世にくばる納豆はなど

右

野人

寄貧家之冬夜

夢猶寒し隣家に蛤を炊ぐ音

葉生姜の森の木がらし吹あれて、枯々なる夢の  
林にかくれ、ぬかみそ壺に入て乾坤を忘れたる隠  
士、世間寺無用房ヲ笑ふなるべし。右の句、貧家  
にして冬夜をわぶるの體、寒苦をふせぐにたらず。  
尤哀深きといへども、隣家の蛤より當前のぬかみ  
そを愛せんにはしかに。

第二十五番

左

農夫

町神樂店前の日かけをかつらとし

右勝

野人

流るゝ年の哀世につくも髪さへ漱捨つ

店前の日蔭を、葛とせん事一句云がたし。なが  
るゝ年のあはれまことに是を歎美すべし。

瀬々齋主桃青漫探毫判

常盤屋之句合 (延寶八年)

鯛のなる木のさくら咲て、鮒はもみちをあらそふ  
といへども、青物の青々と、四時全き常盤の陰に、  
ひとり其味の浅く水くさきを愛す。

杉風子

第一番

左勝

草すでに八百屋の軒に芳し

右

今引も小松がはらのはたな哉

左の芳草、八百屋の軒に梅をあらそひ、鶯菜にも  
初音まちたる心地するに、はた野の原のわか菜に  
すがりて、子日の松を引そへたるも、めでたく侍

れども、先八百屋の草のかうばしきに心とゞまり  
侍る。仍以左爲勝。

第二番

左

はやなりぬ干物の木目もはるに

右勝

花よりも猶目うどの春の紅は

左、干物の木目も、春に若歸りたるけしき、尤  
ながら、目うどの色のくれなゐなるに心付たる一  
作、まことに花よりも匂ひかうばし。

第三番

左持

芹とる翁碧潭に望んでこはいかに

右

防風ゆるく吹て。青酢漸く垂り

碧潭に望んで芹とる翁、薄氷をふむかと危きに  
防風ゆるく吹て、青酢の氷解初たるものどけしや。  
左右のけぢめ、いづれかと筆をかざして、はるか  
なるむかうの祖道をみれば、髭むさ／＼と生たる

句評集

老人、早わらびの杖にすがり、忽然と來たり、芹  
をあなどるべからず、ばうふうを捨べからず、我  
は是此山にかくれ住野老先生と云ものなりと云  
て、即うせぬ。

第四番

左持

しほらしき物つくしちよろ木かいわりな

右

澤菫やくされ草鞋のちぎれより

左の句、しほらしき物の類を集たるは、もし是  
新清少納言などが筆のすさみにやとやさしく、右  
も又澤ちさの塵芥の中より生出たるけしきも猶む  
づかしげならず。兩句ともにしほらしくおぼえ侍  
る。

第五番

左勝

青わさび蟹が爪木の斧の音

右

茗荷たけは生姜の上になん事を

『一葉集』に、『予いつぞやや』と記す。『同』に『蟹の來て』と誤る。

(二) 予日外、かた田舎の老夫の語りしを聞に、わさび植置かしこに、必蟹來てこれを喰ふと。此作者此事を知るや、しかも其作工にして、かにが爪木の丁々たるひびき、山更幽なり。右又、茗荷、葉生萎の似たるを以、あらそふといへども、左のわさび感情多し。

第六番

左

櫻菊弱いかなる人の何を以櫻

右勝

干大根よめ菜を戀るおとろへは

櫻にあらぬさくらごんにやく、予たはふれに曰、彼は紅葉豆腐に増れるといはんか。且一樽の霞の間より、顯れ初るのけしきかと、をかしく侍れども、干大根のうき戀にやせほそりて、たとへ其身は一分刻に成とても、此よめ菜の君を社と戀つらめ。哀也。深切也。

第七番

左

夕べかな雨杜鵑坐禪豆

右勝

麥飯やさらば菘の宿ならで

左の句、雨の夕べの淋しさをいはんとて、坐禪豆といひ、郭公に慰たるさま、興有て聞え侍れども、菘の宿ならぬ麥飯こそ、猶珍しけれ。

第十番

左持

きり蓼の切れておのが命かな

右

夕影や色落すしその露おもみ

前栽國の傍にして、蓼紫蘇の二もと色をあらそふあり。先、左蓼の曰。我はこれ、色翠に位いやしきといへども、人をして利根になさしむるの徳あり。其上露命不食、切れて己が命と云所こそ命なれ。紫蘇答。我には天徳をゆるして紫衣をなす。多くの梅法師の中に紫衣上人とあがめられ、又五臟に入て病を治し、庭に有ては色落すしその露おもげなる風情、青蓼の青キにまさらんやと云

蜈のり榮螺の洞に潜てけり

右勝

獨活の千年能なし山の柚木かな

むかで苔の住所、さびの洞に求たるも珍し。右は又、能なし山のうどの大木、千とせを経たるも奇也。此山いづれの處にや、山海經にも見えず。もし无何有之郷、廣莫の野につゞきたる名所か、彼大楊を捨ざるのためしも思ひ出られて、うどの大木又愛すべし。

第八番

左

柚の花は香故に花と社いへれ花

右勝

都人山柁を藤の若葉とて

花柚のかをり露に落て、いかなる上戸の柚の匂ひぞとなつかしけれども、都人のみなれぬ木目、藤のわか葉に見ちがへたる風流、優にやさし。

第九番

左

論、しばらくにしてやます。

第十一番

左持

女とや茄子。はがくれに打かたぶける姿

右

山賤の垣ほのさげともよめるや

己が葉隠れに打かたぶける茄子の君、むらさき式部が娘にや。わかむらさきのゆかりにや。いかなるものゝ妻となり、いづれの人のよめとやならん。なつかし。右の句も又、山賤の垣ほにはへる青さげ、人はくれども言傳もなしと、よめるは古今集籠どのゝ下女のよみたるうたなるべし。いづれかをかしく、いづれか哀深からん。

第十二番

左勝

五月雨のよそに。露のはなから蓮の池

右

天蓼の枝折。老たる猫にはあらねども

絶間なき五月雨の空、庭上忽池邊の思ひをなす

に、かの遍昭が何かは蔭を蓮とあざむくとよめる心もをかし。又齊の管仲また、び山に道をうしなひ、老たる猫を放て道しるべしたるも珍しけれども、只遍昭の詠に心ひかるゝ也けり。

第十三番

左勝

あへて此帚木のほろ／＼と成て只

右

影うらむや毛蟲。かりきかうれの溜水

左、帚木のほろ／＼あへ、淡くしてやすし。右の句はかりきかうれのたまり水に、いぶせき毛蟲の影をはぢんも興ありながら、餘りに趣向をもとめ、たくみ過たるやうに覺侍るは僻耳にや。只帚木の安らかなる方こそ、やすらかなれ。

第十四番

左

古そばやあかでも人に夏大根

右勝

朝顔の夏日陰待間のとうふかな

雫に濁るしぼり汁、あかでも人にとよめる古そば、珍らしからぬにはあらず。然れども松壽千年豆腐一日の榮と作れる、朝がほの詠尤興あり。

第十五番

左

里芋の長なり。畠中の庄司とやらんは

右勝

薯は山をうばつて。金輪際に自然生

里芋、興有て實なし。右の山の薯、自然薯、蕨、生の字用ひんこと、いかゞ有べきや。但自然石、自然木等の類にて、くるしかるまじきか。其上五文字力ありて、一句もつよく聞え侍るまゝ、右勝たるべし。

第十六番

左勝

茶俯月を見るに。梅干の影のごとくに來り

右

亂酒の僧見よやゆべしの責を受ける

左の五文字、先珍重なるに現に見えし梅干の精、

（一）原書「梅干の精」とあれど當時の誤字なり「葉集」に「梅干の精」とせる正しこれに従ふ

まことにかすか也。かの土大根を食したる昔も、此類なるべしや。右の句、破戒の僧をいまして未來袖べしのせめをうけ、焦熱の苦しみには袖味噌の釜うけにも成べしやと、おそろしく、唯茶數奇の僧こそ殊勝におぼえ侍れ。

第十七番

左勝

暮山の雨松茸のす／＼と獨り

右

岩もる水木くらげの耳に空シク

しよぼ／＼と降、暮山の雨にぬれて、松茸のす／＼とたてるけしき、言葉の外に意味深し。右の句も一體なきにはあらざれども、木くらげの耳に空しく岩もる水の雫さへ聞もらし侍るにぞ。

第十八番

左勝

だい／＼を蜜柑と金柑の笑て曰

右

水又栗。々を清しといはんとすれば

橙を蜜柑、金柑の論は、作のうちに作有て、虚の中に實をふくめり。數句の中の秀逸、此句に於て莊周が心あらん。尤玩味すべし。水復栗の句は栗また水を清しと打返したる心、よく云残し侍れども、心餘りて言葉たらずなど、難する方も有べきや。唯左の句ヲ以、類なき勝と定畢ぬ。

第十九番

左

賤が契は干瓢のむすびもとめず

右勝

かれ／＼ナルやのべに冬瓜の獨ぬる

ひさがもとの賤が情干瓢の結びもとめぬ仇なる契こそはかなけれ。されども干瓢むくといふ時は、六月の季に出たるを、秋の句に合せんこといかゞ。右は又、うら枯わたる秋の野に、冬瓜ばかり取残されて、ひとりぬに打かけて、あぢきなきさましたる見立、新敷感多し。

第二十番

左勝

（一）「葉集」に、「空シク」と誤る

霧浪の音。昆布の管屋の夜すがらやな

右

山寺の冬納豆に四手うつやあらし

左の句、蝦夷松前のあたりに、昆布を以、管屋を覆ふとかや咄に聞傳へたるを、時雨浪の音のさびしきまゝに遊なるさかひまでおもひ出たる、哀深し。右の句は納豆に四手うつ山寺の嵐、まことに寒き景氣をよく云のべだれば、兩句持にてさしおきぬ。

第二十一番

左勝

風の風干葉は窓をうがつて去

右

霞やは芥子に牛房は埋木の

しづが軒端のほし葉さへ、風の尋來て、おとするにやと、茅屋の閑窓おもひやるさへさむし。牛房の埋木、花咲くべしともおぼえず。

第二十二番

左勝

はづかしや根深の。老の黛も白根がちに

右

あけぼのや霜にかぶなの哀なる

あさつきのみどりうるはしく、蕪の若葉のたをやかなるも、いつしかねぶかの白根がちなる白髪の老女に見立たるも新し。又霜下にしばむかふなの委けしきなきにはあらざれども、根深の前のいにしへこそ、猶なまめかしけれ。

第二十三番

左勝

鉄と云もの有。性水を好で氷に遊ぶ

右

氷筋のごとしかんてんのかんは寒いとよむ

魅ハ性ヲ註シ、カンテンハ文字ヲトク。増補猷立抄ニ曰ク、魅ハ風味ノ切以テ酒煮以テ油煎則味愈厚シト云リ。此方賞翫タルベシ。

第二十四番

左勝

大根生る逆なるがをかしいとや人く

右

雪の冬菜男鉄ついで立りける

左の句、賤がわら屋の軒に、生たる大根にや、おもしろし。雪の中の田圃三徑うしなひたる體、又珍重。

第二十五番

左勝

雪の竹子。今は鹽したが有ものを

右

臘月の青物。我常盤やなりとよばふ

晋の孟宗、雪の中の須田町は尋問さるやとをかし。右はまた、臘月の青物に四時不變の國をおもひよせたるも奇特。左右わかちなし。

種彦書入  
華桃園は明芭  
蕉なり、華桃  
青ともいふ  
古短冊にあり

『葉集』に、  
『つたはらば』  
と誤る

『葉集』に、  
『あらはる』

初懷

紙 (貞享三年(落葉考))

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉

其角

元朝の日はなやかにさし出て、長閑に幽玄なるけしきを、鶴のあゆみにかけていひつらね侍る祝言々外にあらはず。流石にと云手に葉、感おほ

し。

みぎりに高き去年の桐の實

文 鱗

貞徳老人の云。臨體四道ありと立られ侍れども、當時は古く成て、景氣を云そへたるをよろしとす。梧桐速く立て、しかも木枯のまゝにして、枯たる實の梢に残りたるけしき、こと葉こまやかに、桐の實といふは桐の木といはんも同じ事ながら、元朝に梢は冬めきて、木枯の其まゝなれども、ほのかにかすみ、朝日匂ひ出て、うるはしく見え侍る體なるべし。但桐の實見附たる、新しき俳諧の本意、斯る所に侍る。

秋の山手東の弓の鳥賣らん

芳 里

狩の鳥をえて、市に持出て賣體さも有べし。酒屋にたよりたる珍重の付やう也。手東の弓はみじかき弓也。秋季を持たる鳥の名多くいはずして秋の山と大やうに置たる大切の所也。見る人心を風味すべし。

(一)「葉集」に、「こまやかにして」

(二)「こまやかにして」

雪村が柳見にゆく棹さして

枳 風

第三の體、長高く風流に句を作り侍る。發句の景と少しかはりめあり。柳見に行とあれば、いまだ景に不對なり。雪村は畫の名筆也。柳を書べき時節其柳を見て畫んと、みづから舟に棹さして出たる狂者の體、珍重也。桐の木立詠やう奇特に侍る。附様大切也。

炭がまこねて冬のこしらへ

杉 風

前句ともに山家の體に見なして付侍る。獵師は鳥をかり、山賤は炭竈を捨て冬をまつ體、別條なき句といへども、炭がまの句作終に人のせぬ所を見付たる、新しき句也。

里の麥ほのかなるむら緑

仙 化

附様別條なし。炭がまの句を初冬の末霜月頃などの體にうけて、冬畑の有様よくいひのべ侍る。其場也。

酒の幌に入逢の月

コ 齋

我のる駒に雨おほひせよ

李 下

是等奇意也。何を付たるともなく、何を詠めたるともなし。里々の麥と云より旅體を云ひ出し、むらみどりなどうるはしきより、雨を催し侍る景色、辯口筆頭に不掛。

有明の梨打鳥帽子着たりけり

芭 蕉

朝まだき三島を拜む道なれば

舉 白

是さしたる事もなくて作者の心に深く思ひ込めたるなるべし。尤旅體也。箱根前にせまりて雨をわびたる心深切に侍る。

うき世の露を宴の見をさめ

執 筆

念佛に狂ふ僧いづくより

朱 絃

此句わづかに興をあらはしたるまで也。神社には佛者をいむもの也。參詣の僧も神前には狂僧也。三島は町中にある社なれば、道通りの僧もよるべきか。

後住女きぬたうち

其 角

淺ましく連歌の興をさますらん

蚊 足

句評集

三四五

連歌の興をさます附やう珍らし。度々我人の上にもある事にて、一入珍重に侍る。

コ 齋

敵寄せ来るむら松の聲

千 里

聞えたる通り別意なし。連歌に軍場をおもひよせたる也。

コ 齋

(一)「葉集」に、「朱弦」

(二)「道通」

(三)「かた」

(四)「着た」

(五)「軍を」

(六)「梨打えぼしに」

(七)「軍を」

(八)「梨打えぼしに」

(九)「軍を」

礪は里水邊濱浦等におほくよみ侍る。尤媛捨更科よしのなど山類にも讀侍る。礪を山類にてあしらひたる句也。乳を吞猿と云にて女と云字をあしらひたる也。かすかなる意味しかもよく通したり。いのちを甲斐の筏とも見よ

に眼を留べし。橋は小雨のもゆる陽炎。春の景氣也。季のつかひやう、軽く安らかにしたる所を見べし。花の絨目などは安くとかるく付るもの也。

猿の聲悲しきより、山川のはげしく冷しき體を形容したる付様、尤山類をあしらひたる也。

是又春のけしき也。付様させる事なし。野邊田如に雪の残たるに、破れたる案山子の立たる姿あはれなるけしき見えたるなり。秋冬こめて春まで残たるにうす雪のかゝりたる體、尤感情なるべし。しづかに酔て蝶をとる歌

法の土我剃髪を埋み置かん

句作の工なるを興じて出せる句也。蝶を取、歌は酔てと興じたる體誠に面白し。

筏の危く物すさまじきを見て、身の無常を觀じたる也。甲斐と云ば古人佛者の古跡等おほく、自然に無常もおもひ寄たる也。剃髪を埋み置作意、新しく哀をこめ侍る。

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ

はづかしの記を閉る艸の戸

此句附所少し骨を折たる句也。前句の蝶を現在にしたる句にあらず、蝶を取歌と云を諷物にして付たる也。殿守は禁裏の下官のもの也。蝶とる歌と云に風流なる禁裏におもひなして、夜すがら夜明し興有て、殿守等が夜明て眠る有さま珍し。一句

咲日より車かぞゆる花のかけ

千 里

(一)「葉集」に、この句「李下」とす  
(二)「同」に「懐紙の絨目」  
(三)「同」に「蝶を取たる」  
(四)「落葉考」に、「誤れり」「葉集」による

長高く見ゆる也。兀げたる眉をかくすきぬく

蕨かけの有さまありくと見え侍る。しかも句作風情をぬきて、只有のまゝに言捨たる句續き、心を付べし。

朝朗と云よりきぬく常の事也。兀たる眉と云は寝過してしどけなき體也。伊勢物語に夙に殿守司が見るになど、書る也。此句の餘情ならんか。

あられ月夜のくもるからかさ

けし咲て情に見ゆる宿なれや

冬の夜の感深き體を言のべ侍る。傘に霰降音いと興あり。しかも月さえくと見ゆる、尤おもしろし。狐良と云にこまかに付侍るはわろし。

兀たる眉と云に、老長たる人のおとろへて、賤の家などにひそかに住る體也。けしは哀なるものにして、上つかたの庭にはまれ也。爰に取出て句をかざり侍る。是等の句にて植物草花のあしらひ、所々分別あるべし。

石の戸極鞍馬の坊に音すみて

葉分の風を矢筈きりに入

霰は霜雪と云より少し寒風冷敷聞ゆるものなるに依て、鞍馬と云所思ひよせたり。昔は名所の出しやう礪に須磨の浦、十市の里、芳野の里、玉川など、附て證歌に便りて付る。あられは那須の篠原、雪に不二、月に更科と付侍るを、當時は句の形容によりて名所を思ひよする、尤心得ある事也

矢筈切と云言葉先新し。前句民家にして、武士の若者どもふと珍しき物かけなど見付たる體也。大形は物語などの體をやつしたる句也。或は中將なる人の鷹居て小野に入、浮舟を見付たるなどのためしならん。されども其故事をいふにはあらず。其餘情のこもり侍るを意味と申べきか。

我三代の刀うつ鍛冶

かゝれとて下手のかけたる狐良

此句詠中の奇特也。鞍馬尤人といひ傳へて、僧正が谷など打物に便る事なり。石の戸極など、云に鍛冶、近頃遠く思ひよせたる珍重也。淨き地、清き水などをえらみ名剣を打つべきとおもひしより

一句感情少からず。三代と云にて粉骨鍛冶名人といはん爲也。

永祿は金ともしく松の風

仙 化

永祿は其時代をいはん爲也。鍛冶の名人おほくは貧なるもの也。依てこがね乏しといへる也。前句しかも明かに聞え侍る。是等よく心を付て翫味すべし。

近江の田植美濃に恥らむ

朱 絃

只上代の體也。金乏しと云より昔を云句也。昔は物毎簡略にして金乏しき事人ノ云傳へ侍る。美濃近江のちかき所にて田植などの風流も遠き田舎とは違ふべし。

疾く起て聞がちにせんほとゝぎす

芳 里

時節を立合せたる句也。美濃近江と一所を云にて、時鳥をあらそふ心持有て、聞がちにせんといふ起てと句作れり。

舟に茶の湯の浦あはれ也

共 角

時鳥、水邊津浦などに云事勿論也。船中にて茶の湯などしたる風流奇特也。思ひかけぬ所にて茶

の湯を出すは茶窓の好士也。されば思ひよらぬ物を前句におもひよせたる、又俳諧の逸士也。

筑紫まで人の娘を召つれて

李 下

此句趣向句作付所おのゝ具足せり。船中に風流人の娘など益て、茶の湯などさせたる作意、戀に新し。感味すべし。松浦が御息女をうばひ、或は飛鳥井の君などを盗取たる心ばえも、おのづから筑紫の人のよそほひに便りて餘情かぎりなし。

彌勒の堂におもひ打ふし

枳 風

此句尤やり句にて侍れども、邊土の哀をよくいひ捨たり。句々だんだん其理詰りたる時を見て、一句よろしく付捨たる、逸句不勞。

待かひの鐘は墮たる草の中

芭 蕉

彌勒の堂といふ時は、觀音堂釋迦堂など云様に參詣繁昌にも聞えず。物淋しき體を心にかけて、鐘の地に落てむぐらの中に埋れ、龍頭わづかに見えたる體、見る心地せらる。五文字にて一句の味を付たり。注釋に及ばず。能味ひ聞くべし。

友よぶ蟬の物うさきの聲

仙 化

友呼蟬、近頃珍重に侍る。神むらの體、物凄き有さま、前句に云残したる處をよくうけたり。う

き聲と云にて、まつ便なき戀をあしらひたり。

雨さへぞいやしかりける露曇

コ 齋

蟬の聲と云より田舎の體を云のべたり。雨と付る事珍しからずといへども、露曇珍し。しかも秋に云詞にあらず、古き歌によみ侍る。惣じて句々折々古歌古詩等の詞、所々有といへども、しひて名句にすがりたるにも非ず侍れば、さのみことんしく不記。

門は魚干す磯際の寺

學 白

露の體あらは也。濱寺などの門前に魚干、網など打かけたる體多し。曇り空に干と附たる、却て作者の器量思ひよるべし。

理不盡に物くふ武者等六七騎

芳 里

此句秀逸也。海邊の軍みだれたる體也。民屋寺中に押入て狼籍したる亂國のさま、まことに斯有べし。世の中おだやかに安樂の心ばえ、有がたく思ひ合せて句を見るべし。

あら野の牧の御召えらみに

共 角

前句の勢よく替りたり。野馬取りに出立たる武士の體尤面白し。三句のはなれ、句の替りやう、句の新しきを、能々眼にとむべし。

鴉の一聲夕日を月にあらためて

文 鱗

だん／＼附様文句きびしく續たる故に能く云ながし侍る、かやうの所功者の心付べき義也。夕日さびしき鴉の一聲と長嘯のよめるに、西行の柴の戸に入日の影をあらためてとよめる、月を取あはせて一句を仕立たる也。長嘯を本歌に用ふるにはあらず侍れども、俳諧は童子の語をもよろしきばかり用ひ侍れば、いづれにても當るを幸に、句の餘情に用る事先矩也。

糺の館屋秋寒きなり

李 下

洛下の景色尤やり句也。月夕日に其地思ひはかりて見ゆ。

稻妻の木間を花のころばせ

學 白

はたらき言語に述がたし。糺あたりの道すがら、森の木間勿論也。木間に稻妻おもしろし。誠に秋

〔一〕「葉集」に、「し」かも私に「し」と誤る

〔二〕「同上」に「す」は「作者の」

〔一〕「葉集」に、「時鳥をあらそひなどする心付にて」  
〔二〕一本「持よひの」  
〔三〕一本「物うさきの」



の夜の花ともいふべし。  
つれなき聖野に笈を解く

積風

此句の付様、一句又秀逸也。物凄き闇の夜の稲妻ひか／＼とする時分、聖野に臥倦る、近頃新しき俳諧のまなこ、是等にとゞまり侍らん。

人あまた年とり物をおかづぎ行

楊水

此句秀逸也。聖の宿かりかねたる夜を、大晦日の夜に思ひ付也。先珍重。聖は野に臥わびたるに、世にある人は年取物をおかづぎはこぶ體、近頃骨折也前句の心を替る所、猶々韻味すべし。

酒もりいさむ金山が洞

朱絃

金山は我朝の大盜也。前句をよくうけたり。註に及ず。付様明らか也

當時の俳道意味心得がたし、願くは句解し給はらんやと侍りければ、即興に加筆し給ふ。終日の席、翁持病快らず、五十韻にして筆をたち給ふ。  
貞享三丙寅年正月

續の原 四季之句合(貞享四年)

判者四人

春 素堂  
夏 調和  
秋 湖春  
冬 桃青

撰者

才丸  
不ト  
其角

(この書中桃青判なる冬の部のみを次に掲ぐ)

一番落葉

落つかぬ木の葉にあたる雫かな

風水

落葉とて富士のつゞきに塔ひとつ

松海

左の句、景氣微細に心を付たり。右、又山もあらはなるふじの詠め、一句のたけもゆたかに聞え侍る。されども句中目に見えたる切字なし。五文字にて云残したれば、切字を加へて見るべきにや。

同じに『俳諧の意味』

猶分明ならざるを難じて、持に定侍るべきか。

持トス。

二番霜

四番枯野

左勝

左勝

親と子の霜夜をかこふ野馬かな

溪石

松苗も枯野に目だつあらしかな

積風

右

右

霜深し扇をかざすよるのふね

勇招

大橋を枯野にわたす入日哉

全峰

ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかなや親の子をおもふ。とよみ給ひしこのうたに便して、野馬の子をいとふさま、せつ也。右の句、さもあるべきながら、左の句秀逸なれば、まけ侍らんかし。

三番夜興

五番網代

左持

左持

我笠に月夜わする、夜興かな

コ齋

子を連て夜にあじろに囊狭し

心水

右

右

いづれ狸得失覺て犬もなし

文鱗

あじろ木のゆるぎやみぬる氷かな

不角

ひだりの句、茂み深く分入狩人の形容、いぶかしき處あり。右の句もすがたつよく、言葉もたくみに聞え侍れども、其得失我もわきがたし。仍以

あじろの床に子を連たる作意、めづらかにしてやさし。右又あじろの枕の氷にとちて、寒さいやましたるけしき。左右感心わきがたし。

六番 石蘭

左勝

破れ葉のツハに顔出す颯かな

調 柳

聲、句調たかしとやいはん。

八番 氷柱

左

風に来て氷柱にさがる楓かな

一 排

つわ咲や誰が引すてし雪車の跡

立 些

門閉て閑居をしゆる氷柱哉

琴 風

左の句、いたちとかいふものゝ、わが方を見おこせたと云けん、をのゝ薄もおもひよせられてをかしく侍るに、引捨し雪車の句意しかときゝえず。仍以左爲勝。

七番 鴨

左勝

鈴鴨の聲ふりわたる月寒し

嵐 雪

九番 あられ

左持

あかつきの霰は冬の信かな

李 下

鴨くはで茶を干枯す鹽屋かな

魚 兒

森深く野馬飛こむあられかな

仲 風

すぐがもの聲ふり立つる秀句かぎりなし。一句安らかにして嚴寒のけしき盡たり。かの妹がりの歌を吟ずれば、六月二十四日の日も寒しと書けん、さることにや。右の句も、蠶を飼ふものゝ、きぬ着ぬためしもあはれに侍れども、鈴がものすぐの

烈風寒威、曉の寢覺、冬のことゝいへるぞ、かくてはよにもあられ降哉と吟聲さびしきに、右は又野馬のあられにおどろきたるさま、能云叶れたり。聞所、見る處、師曠が耳をそばだて、離婁

が目のさやをはづすといふとも 右右の是非辨ずることあたはじ。

十二番 煤掃

左

何方に行てあそばん煤はらひ

舉 白

左勝

御神樂や火を燒衛士にあやからん

去 來

右勝

煤とりて寺はめでたき佛かな

不 ト

鉢たゝきまじりて狂ふ神樂かな

孤 屋

左りの句させる難もなく、秀たる所も見えず。

右は鉢たゝき神樂に交るべき方いかゞ、右に難あるをもて、左がた勝たるべし。

十一番 頭巾

左勝

山里や頭巾とるべき人もなし

京 観 水

右

頭巾きぬ出家見らるゝ野中かな

鹿 言

めにふれぬ山中の客、そとろに愛せらるゝ楓林もあるか。右は、目に立て猶すぎき冬野の法師、人にはいかゞおもはるゝ心ばえもありなん。左まはるべし。

一柳軒不トのぬしは、身を塵境にしたがひせまりて、志は雲ゐる山の岩根をたどり、あるはよし野の花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅の奴となること年有。是より先も集あらはすことふたゝびにおよぶといへども、春秋遠く、雲ゆき雨ほどこし、東籬の菊も名をさまざまに、唐朝の牡丹も花しべをことにす。梅のわび、さくらの興も、折にふれ時にたがへば、句も又人をおどろかしむ。なほ其しげき林に入て、花の香の清きにつき、色こき木の葉

をひろひて、左右にわかつて積て四節となす。判士よたりに乞て、我も其一にしたがふ。まことや樂にえらるゝものゝ、笛をぬすむに似たりといはん。されども青鷺の目をぬひ、鸚鵡の口を戸さゝんことあたはず。貞享卯のとし、筆を江上の湖にそゝぎて、終に蕉庵雪夜のともし火に對す。 桃青書

芭蕉集一に、  
芭蕉雪夜とあり

「芭蕉翁句評一軸」

此俳本は吾祖不玉叟の巻にして、はせを翁の評せるものなり。過ぎし頃回祿の災侍りて、家本うせけるを、二木何がしのひめ置きしを乞侍りてうつしぬ。吾方技の道ならねども、かゝる志のたへなるを都の空に残しけむも、風雅の美談ならめと、筆をとり侍るのみ。  
樂水軒書  
延享四年葉月

潜淵庵不玉

坊主子や天窓うたるゝ初菴

近年の作、心情専に用る故、句體重々し。左候へば愚句體多くは景氣斗を用候。これらも愚意相應に感美候。

犬守り居る木の葉散なり

犬守る言葉、小坊主のさはり急になり候。唯木の葉散と斗うちなぐり有べきにや。

箕を作る庵は月のさし入て

寄所感心、一句體疎ならず。風景俳意尤に候。

藁の丸太のさび鮎の串

よろし。

博勞の泊定めぬ秋の風

句體幽玄、俳意奇妙に覺候。

柿の羽織の暮の稻妻

祭文の拍子にかゝる虫の聲

拍子にかゝると、むしの聲にとりたる所、聊いやしきにや。

瓦落ちたる淺茅生の中

奇意の風景、大感不斜候。

本丸のから松ひとり縁にて

本丸となくて瓦あしらひたき敷。

富士は世界の雪の大將

富士は軒端に續けて、道灌勇士の好る事にや。

一本「致」とす。

然る時は大將の字感。

幽なる筋より戀の發り初

心はかよひ候て哀に侍れども、句面いさゝかとり寄うときにや。

小町が像のをがまるゝ哉

珍重々々。

縁とりに雀の遊ぶ朝日影

船のむしやく水の水上

三越路や乙の寺の花ざかり

乙寺は御教へにまかせ、貴境下向之節、予も立寄拜み候。

牢人の子が膳すゆる春

唯事の一體新。此一味珍重。

夕月の朧の眉のうつくしく

小柴垣より鏡とき呼ぶ

うつり所よく侍る。

古井戸に咲きかゝりたる桐の花

感心。

脚半もとらで拜む灌佛

句評集

俳諧上達、此句にてあらはれ候。猶御工夫、老後の御樂、尤に候。

懷の餅をおとしてころ／＼と

酒通る間は一座皺面

若武者の障子を蹴込月の影

泣く／＼露にぬるゝ御輿

隱逸に水無瀬の菊の花咲て

一句あさからず。餘情かぎりなしとやいはむ。

悟り初たる山本の雲

夕は秋と何おもひけむとや。三句のうつり、うるさき敷。

折々は三社を捨り馬薬煉

一體むつかしきにや。

そら雙のつくり氣違

左も有るべき事にや。

世の中は師走の末の物おもひ

あしらひ、くるしからず。

喰ふてありく女房の扶持

三五五

（一本『在』とす。）

大感、新意狂意□。

道邊の名はこと／＼し茶屋立て

一句幽玄。

履をうづむる御廟淋敷

とりのきやう神妙。

肩衣に雨とはなしに降りかゝり

一句奇特。

飯は雲井に金の鯀しづも

よろし。

黒坊が帆繩をたぐる花の春

おなじ。

音はいろ／＼の嶋の鶯

一卷熟覽感吟不斜候。近年武府之風雅分々散々、適々邪路の輩も相見え候處、微軀方寸相傳へて、邊國鄙のかたはらより、かゝる風雅を見せしめ侍る、誠に殊勝の事に候。予曾以點削之斷筆といへども、遠國の志といひ、先年行脚の情難忘によりて、聊評詞協書加のみ也

元祿六年春中

芭蕉庵桃青

（完來編「あきの夜」）

韻文集